18世紀英国の文法家 James Buchanan に関する社会言語学的研究

別府大学大学院文学研究科

田口　純

2013年3月

謝　辞

本論文を完成し、公表できるようになったのは、九州大学の英語学の伝統を受け継いでこられたお二人の先生からの直接的、間接的なご指導によるものです。

まず、九州大学名誉教授の田島松二先生には、本論文の構想から執筆、審査にいたるまで、大変お世話になりました。心からお礼を申し上げたいと思います。田島先生の研究室に伺ってからはや 10 年あまり、英語学、とくに英語史や英語学史に関して多大なお時間を割いてご指導いただきました。理論だけではなく、第一次文献に立ち返り、一字一句を疎かにせず精読するという訓詁の学の大切さ、学問の基本と真髄を身をもって学ぶことが出来ました。本論文の執筆に際しては、遅々として進まない間も、暖かく見守っていただきました。最後まで完成出来たのも、先生のご指導と激励があったからだと感謝しております。この場を借りて厚くお礼申し上げたいと思います。

もう一人、英語学史の大先達として、九州大学名誉教授の故林哲郎先生のお名前を挙げないわけにはいきません。林先生には大学院時代に英語学史、とくに英文法史をご教授いただきました。本論文の着想は林先生のご講義が元になっております。この分野の日本における先駆者である先生から学ぶこと大でした。残念ながら直接のご指導はわずかでしたが、先生のご高弟である田島松二先生とのご縁をいただき、林先生のご研究の一端に関わることが出来ました。改めて感謝の意を表し、ご冥福をお祈りしたいと思います。

最後になりましたが、審査をご担当くださり、数々の有益なご指摘を賜った別府大学文学部の浅野則子教授、東京外国語大学大学院総合国際学研究院の浦田和幸教授に心からお礼を申し上げます。

目　次

序　論　・・・

序　論

本論文は18世紀の規範文法家 James Buchanan に関する社会言語学的研究である。その目的を述べる前に、近年、18世紀の規範文法が注目されるにいたった経緯や、そのコンテクストの中での Buchanan に関する再評価の動きに簡単にふれておきたいと思う。

1.　「規範文法」再評価

18世紀は、規範文法書の相次ぐ刊行、本格的な英語辞典の出現が物語るように、文法と語彙の両面で17世紀までの流動的な状態から安定へ向かおうとする傾向が明確に現れた時代であった。英語史的に見ても、興味深く、重要な時期の一つであるが、現代英語との表面的な類似性のためか、厳密な分析・記述の対象になることはこれまで稀であった。しかし、20世紀末に近い1980年代に入って、さまざまな意味で18世紀が見直されてきている。そして、21世紀に入ると、当時の資料がコンピューターの普及により、デジタルアーカイブ化され、研究がさらに盛んになってきている。[1)] そのひとつが18世紀の「英文法」である。

'The Cinderella of English historical study'[2)] の世紀と言われるこの18世紀はいわゆる「規範文法」が確立された時代であり、20世紀の「科学的」文法学者からは「規範的」な方法に則っているとして非難されてきた。しかし、近年、Helmut Gneuss, Ingrid Tieken-Boon van Ostade, Joan C. Beal などにより、そのような見方が再考されている。そして、単にその文法書を考察するだけではなく、当時の言語を取り巻く状況、文法の目的とその文法を利用する対象者などを考慮に置いた研究がなされつつある。たとえば、 Beal（2004, p. 90）は次のように述べている。

---

1) 18 世紀の英語に関する近年の研究動向については田島（2005, pp. 17–19）や Tieken-Boon van Ostade (2009) を参照。
2) Jones (1989, p. 279) を参照。

Only very recently have a number of scholars, including Crowley (1991), Rodriguez-Gil (2002) and Tieken (2000), challenged this monolithic view of eighteenth-century grammars, turning to the original texts and viewing them and their authors in the social and intellectual context of their time. What emerges from these studies is that eighteenth-century grammarians had a range of motives for writing their grammars, and that these and later grammars, far from being uniformly 'prescriptive', would be better described as occupying different points on a prescriptive-descriptive continuum.

つまり、 Crowly (1991) や Rodriguez-Gil (2002) や Tieken-Boon van Ostade (2000) など多くの研究者によって、18世紀の文法に対する一方的な見方がごく最近になって変更を迫られていると言う。第一次資料に戻って、それら原典とその著者を18世紀の社会的、知的文脈によって見直そうとする。これらの研究からわかってきたことは、18世紀の文法家たちには、文法書を書くためのさまざまな動機があったのであり、この時代やそれ以降の文法が、一律に「規範的」であったのでは決してなく、規範的立場から記述的立場へと連続する中でそれぞれに違った観点から書かれたという方がより適切であろうというのである。

Gneuss (1996, pp. 31–32) も同じような立場から、18、19世紀の英文法の見直しを提案している。

English grammarians, especially those of the eighteenth and nineteenth centuries, have been accused of employing prescriptive methods. ... Such sweeping judgments have gained popularity in histories of English and of English grammar, but fortunately in the light of more recent scholarship, they have been revealed as anachronistic and in need of revision; more research needs to be dome in this area. ...One also needs to consider the linguistic situation in the eighteenth century, as well as the aims of the grammars and the audiences for which they were intended: ...In future, it may seem more appropriate to speak of

prescriptive tendencies rather than of prescriptive English grammar in the eighteenth century and later.

Gneuss によると、イギリスの文法家、特に18世紀と19世紀のイギリスの文法家は、20世紀の言語学者から、規範的方法を使用したと非難されてきたが、最近の研究に照らしてみると、このような判断は時代錯誤で見方を修正する必要があると言う。さらに、18世紀における言語的状況、ならびに文法の目的と文法を利用する読者をも念頭に置かなければならないとも述べている。そして、これからは、18世紀およびその後の「規範文法」という言い方よりも、むしろ「規範的傾向」という言い方にとどめる方が適切であろうと述べている。これは上記の Beal (2004) と同じ立場である。

'The codifiers and the English language: Tracing the norms of Standard English' というプロジェクトの WebSite において、Tieken-Boon van Ostade は、次のように述べている。[3)]

> Lowth's grammar is rarely studied in great depth, particularly in relation to the language of the period. This was true thirty years ago, when Pullum (1974: 63) commented that the book "is more mentioned than read by the majority of grammarians today", but it is still so today. And it is even rarer for Lowth's grammar to be considered in the context in which it was written, i.e. by a man who wished to do better in the world and who, through his grammar, enabled others to do likewise.

Lowth の文法は、とくに18世紀の言語状況との関連から詳細に研究されることは稀である、と Tieken-Boon van Ostade は言う。Pullum (1974, p. 63) では、

---

3) http://www.hum.leiden.edu/lucl/codifiers (2011 年 12 月確認)
このプロジェクトは現在ではすでに終了している。このプロジェクトに関連したものとして、 Tieken-Boon van Ostade 主催のブログ 'The Codifiers and the English Language' (http://codifiers.weblog.leidenuniv.nl) や、同じく Tieken-Boon van Ostade 主催のホームページ Historical Sociolinguistics and Sociohistorical Linguistics (http://www.hum2.leidenuniv.nl/hsl_shl/) も参照のこと。また、 Tieken-Boon van Ostade (2012, pp. 5–6) も参照。

Lowth の文法書は多くの文法家によってよく引用されるが、実際はそれほど読まれていないとあり、それは30年経った今も変わっていない。 Lowth の文法をそれが書かれた文脈に照らして考察されることはもっと稀であると言う。やはり Tieken-Boon van Ostade も18世紀のいわゆる「規範文法」を研究するには、その当時の社会状況などによって見直す必要がある旨のことを述べているのである。

従来「規範文法」という汚名を着せられていた18世紀の英文法であるが、近年、再評価する動きが高まっている。 R. C. Alston の一連の書誌[4] や、 Ian Michael (1970, 1987), Emma Vorlat (1975), Bertil Sundby et al. (1991) の詳細な調査などを基にして、第一次資料の情報が多くなってきたことや、[5] また、コンピューターやインターネットの発達により、 "Eighteenth Century Collections Online" (ECCO) [6] や "Eighteenth-Century English Grammars database" (ECEG) [7] などが整備されてきたことにより、第一次資料に直接アクセスできるようになってきていることも、この分野の研究の進展に寄与していると考えられる。

---

[4] R. C. Alston が編纂した *A Bibliography of the English Language from the Invention of Printing to the Year 1800. A Systematic record of writings on English, and on other languages in English, based on the collections of the principal libraries of the World* を主タイトルとする一連の書誌のことである。1965 年に Volume I が上梓され、1974 年には Volume I から X をまとめた一冊本の改訂版が出版されている。本論文ではこの 1974 年改訂版を主に利用している。

[5] Tieken-Boon van Ostade (2000, p. 876) を参照。

[6] http://gdc.gale.com/products/eighteenth-century-collections-online/
Eighteenth Century Collections Online (ECCO) は 18 世紀に出版された英語・英語圏刊行物すべてを収録対象とし、それらをフルテキスト検索可能にするコレクションである。2003 年に ECCO (I) が利用開始となり、現在もその続編が継続刊行中である。

[7] http://www.helsinki.fi/varieng/CoRD/corpora/ECEG/
Eighteenth-Century English Grammars database (ECEG) は 1700 年から 1800 年に書かれた英文法書とその著者の書誌学的情報を収録したデータベースである。2010 年から公開されている。

2. 規範的アプローチにおける James Buchanan の再評価

文法に対するアプローチの仕方はいくつか考えられるが、言語事実をあるがままに観察して、その結果を記述・説明することによって法則を定立する記述的なアプローチや、多くの可能な言語事実の中から一定の基準に基づいて選択し、価値判断を加え、その使用に関する規則を定める規範的なアプローチというものが考えられる。記述的アプローチをとる文法家は、客観的に言語事実を観察して、どちらがよりよい表現形態であるとか、どちらが正しくて、どちらが正しくない、ということには関わらない。一方、規範的アプローチをとる文法家は、いかに一般に使われていても、それを正しいものとして教授できないことがあるとする。アプローチの仕方が異なっているのである。

20 世紀に入り、言語研究では Ferdinand de Saussure (1857–1913) の構造主義を基とする構造言語学が主流になるにつれて、文法研究においても、19 世紀までの規範文法に対して記述文法からのアプローチがなされるようになってきた。英文法では、早くも 19 世紀の終わりに Henry Sweet (1845–1912) が記述文法的態度で英文法を著した。[8] また、 Otto Jespersen (1933, pp. 19–20) は、次のように述べている。

> Of greater value, however, than this prescriptive grammar is a purely descriptive grammar which, instead of serving as a guide to what should be said or written, aims at finding out what is actually said and written by the speakers of the language investigated, and thus may lead to a scientific understanding of the rules followed instinctively by speakers and writers.

Jespersen は、19 世紀までの規範文法よりずっと価値が高いのは、純粋な記述文法であると言う。記述文法では何を話し書くべきかという指導を目的とするのではなく、対象となる言語の話し手が実際に話し、書いていることを見出そうとするものなのである。こうすることによって話し手（書き手）が本能的に従っている規則を科学的に理解することができるようになる、と彼は論ずる。

こうした記述文法家からの規範文法に対する見方はその後も続き、科学的な

---

8) H. Sweet, *A New English Grammar: Logical and Historical.* 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1891, 98.

手順に従っている記述文法に対して、規範文法は非科学的、前近代的とみなされるようになってきた。たとえば、 Beal (2004, p. 89) は次のように述べている。

> All of these works take their lead from what was for a long time the most influential work on eighteenth-century grammars and attitudes to language, S. A. Leonard's (1929) *The Doctrine of Correctness in English Usage 1700-1800.* Whilst, as we shall see, Leonard's work was seminal and still commands serious attention, the iconicity of the phrase 'doctrine of correctness' was to prove damaging to eighteenth-century studies. In an age when 'prescriptive' had become a term of abuse amongst linguists, the eighteenth century was seen as a period fit only to be trawled for instances of malpractice.

Beal によると、 Baugh and Cable (1978), Bourcier (1981), Freeborn (1992) などの著作はすべて、長い間、18 世紀の文法と言語に対する態度に関する最も影響力のあった S. A. Leonard の *The Doctrine of Correctness in English Usage 1700-1800* (1929) に範をとったものである。 Leonard の著作は独創性に富んだものであったし、今なお真剣に注意が払われている一方で、「正しさの教義」という表現が 18 世紀の研究にとって不利となることを証明することともなった。「規範的」という言葉が言語学者の間で悪口となった 20 世紀においては、18 世紀は間違った例を多く集めるためにのみ適した時代と見られたのである。そしてこれは 1960 年代後半に Alston が刊行したマイクロフィッシュ版の出現によって、第一次資料に直接アクセスできるようになってからでさえも、18 世紀の文法についてなされる言及の多くが第二次資料によるものであったため、上記の傾向が改まることはなかった。しかし、20 世紀の終わり頃から、この 18 世紀の文法に対する一辺倒的な見方に対して異を唱える研究者が現れ始める。そして、第一次資料となる当時の文法書そのものをもう一度見直して、当時の社会的、知的文脈の中でそれら文法書とその著者たちを研究していこうとする傾向が広がってくる。先に見たように、 Beal (2004) や Gneuss (1996) はいわゆる「規範文法」に対して、そのような態度をとるべきだと主張しているのである。

このことに関連して、Tieken-Boon van Ostade (2006, p. 552) もさらに次のように述べている。

> Prescriptive grammarians and their grammars have generally suffered form a lack of scholarly interest. Primarily, this is due to their linguistic approach, which differs fundamentally from that of modern, structural linguists. These differences in approach have been responsible for persistent prejudice and preconceptions concerning the aims and intentions of the normative grammarians.

Tieken-Boon van Ostade は、規範文法家とその文法書は一般的には学問的な関心がないために打撃を被ってきたとする。主として、これは彼らの言語学的アプローチのためであり、現代の構造言語学者たちのアプローチとは根本的に異なっているからである。これらアプローチの違いが、規範文法家たちの目的と意図に関して長く続いた軽蔑と偏見の原因となってきたのである、と彼女は述べている。構造言語学では言語そのものを研究対象とするため、それ以外の言語を取り巻く諸状況はその対象から外れてしまっていた。しかし、最近の歴史社会言語学では単に言語をその研究対象とするだけではなく、その当時の社会や文化などをもその対象としており、規範文法家と呼ばれる人たちのアプローチと通ずるところがある。違った立場からいわれなき偏見を被るのではなく、それに相応しい立場からのアプローチをとることにより、当時のあるべき姿を正しく捉えられるようになってきたのである。

Tieken-Boon van Ostade (2006) は、主として Robert Lowth に関する研究であるが、彼女はその 'Conclusion' で次のように述べている。

> In this chapter, I have concentrated on Lowth and his search for a linguistic norm, but other prescriptive grammarians deserve closer attention, too, such as Ash, already referred to, Buchanan, who wrote three grammars (1753, 1762, and 1767) and Lady Eleanor Fenn, author of *The Child's Grammar* (1799) and *The Mother's Grammar* (1798?), to name but a few (see, further, Alston 1965). Fenn's grammars were enormously popular, and they must influenced the language of many people. Further

analysis of grammars such as these as well as of the phenomenal number of grammars published in the century afterwards (cf. Michael 1991) will enable us to acquire greater insight into the principles which lay at the basis of the prescriptive grammatical tradition, and to understand why the grammatical rules formulated at the time have continued to be at odds with actual practice. (2006, p. 553)

Lowth 以外にも詳細な研究に値する 18 世紀の文法家として、 John Ash, James Buchanan, Lady Eleanor Fenn などを挙げている。 Fenn の文法は当時大人気であり、多くの人たちの（国語としての）英語に影響を与えたに違いない。このような文法家たちが著した文法書や、それ以降のその他多くの文法書をさらに詳しく研究することによって、規範文法の伝統の基となっている原理原則にさらに深い洞察を加えることができるようになる。また、その当時に系統立てられた文法の諸規則がその後の言語事実となぜ合致しなくなってきたのかを理解する手助けともなるであろう、と述べている。

3. 本論文の目的と構成

本論文では、 Tieken-Boon van Ostade や Beal らの主張に沿って、つまり単に言語そのものだけを対象とするのではなく、その言語が実際に使われていた社会やその状況をも含めた歴史社会言語学的な観点から、18 世紀中葉の文法家である James Buchanan をとり上げる。彼は 3 点の文法書 *The Complete English Scholar* (1753), *The British Grammar* (1762), *A Regular English Syntax* (1767) を公刊しているが、それらを分析することにより、 Buchanan が誰を対象に、何を意図していたのかを、その当時の社会的状況の中で読みとろうとする試みである。このような試みを行うことにより、単に当時の英語研究を振り返るだけにとどまらず、現代における国語教育とは何か、外国語教育とは何かを考える上での一助ともなると考える。

本論文の構成は以下の通りである。

第 1 章は、「英国における規範文法隆盛への時代的背景」と題して、18 世紀のイギリスにおいて、いわゆる「規範文法」が成立するにいたる時代的背景を

考察する。一方では、社会の変化と社会階層の移動による下流階層の上昇志向に伴う教育への高まりがあり、他方では上流階層の知識人たちが望んだアカデミーではなく、民間レベルで国語問題がいかに解決されたかを考察する。

第 2 章は、「18 世紀の規範文法にいたる文法史」と題して、中世初期のラテン語教育から始まって、中世から近代にかけていかにラテン語教育から国語（英語）教育へとシフトしていったか、具体的な文法書をとり上げることにより、その流れを考察する。

第 3 章は、「18 世紀の規範文法家 James Buchanan」と題して、 Buchanan 研究の意義は何か、 Buchanan その人について、また彼の著作とその解題を行なう。 Buchanan の著作の跡をたどることによって、彼が国語教育である英語教育に対してどのように考え、また取り組んでいたかを考察する。

第 4 章は、本論文の中心をなす章である。「James Buchanan の文法」と題して、Buchanan が刊行した著作のうち 3 冊の文法書をとり上げる。その 3 冊を比較検討することにより、彼が誰を対象に、何を教え、どのように学習させることを目指していたのかを考察する。また、Buchanan の文法書と同時代の、Priestley と Lowth がそれぞれ著した文法書、彼らから 30 年ほど後の Murray が「編纂した」文法書と比較することにより、 Buchanan の独自性を捉える試みも行なう。

結論では、1〜4 章のまとめと、そこから得られた知見を整理し、今後の課題を述べる。

第 1 章　英国における規範文法隆盛への時代的背景

17 世紀後半に始まったイギリス社会の変化と社会階層の移動は、18 世紀に入るとさらに大きなものとなった。経済がそれまでのように中世以来続く土地を中心としたものから貨幣を中心とするものへと変わり、産業革命が進行するにつれて、下流階層の生まれであっても、その能力などにより社会的に上の階層に上がることが可能となってきた。イギリスの社会は能力主義となり、金権主義となるにつれて、かなり低い身分の者でも豪華な家や土地等を所有することができるようになった。そして、そのような社会的地位を得るには金が必要となってきた。都市化がそれに拍車をかけ、大都市に出て、金を儲け、自分の子供には自分よりも良い教育、良い教養を身につけさせ、より高い地位を目指させようとする新興勢力が特に商人たちの中で起こってきたのである。

本章では、この 18 世紀のイギリスの社会状況の変化とそれに深く関わっていくことになる教育の必要性の高まり、そして自国語である英語の辞書や文法書、自習書が教育の中でいかに必要になってきたかを、民間レベルでの需要の拡大と国家レベルでの取り組みの衰退という時代的背景に照らして一瞥してみたい。英語学史の中でも 18 世紀の規範文法の成立は特に重要なテーマの一つとなっているが、それを取り巻く当時の時代的背景、社会的状況を瞥見することもまたその成立を研究する上で重要と考えるからである。

1.　中流以下の階層における様々な学校の誕生 [1)]

1662 年の祈禱方式統一令（Act of Uniformity）において、全教師が英国教会の祈禱書を遵守しなければならなくなり、免許状取得が法令によって実質的に義務づけられた。これによって、非国教派と認定された教師は公立・私立を問わず学校で教えることを禁じられた。しかし、非国教派の教師の中には自分で学校を興す者も現れた。そしてそれは 18 世紀末まで続いた。統一令が 1689 年の寛容令によって緩められた結果、非国教派の学校（Dissenting Academy）はその数を増す。また、法令を守った国教派の教師たちが属する学校も公立・私

---

1) 第 1 節は主として Reader (1964)、横尾 (1978) を参考にしている。

立を問わず、さまざまな学校が現れた。さらに、寄付金という支援方法によって財団立教区学校であるチャリティ・スクール（charity school）がロンドン市教区にたくさん設立された。キリスト教知識普及協会（Society for Promoting Christian Knowledge: SPCK）が特にこの学校を発展させていった。しかし、そのカリキュラムなどの魅力が失せてくるにつれて、チャリティ・スクールは18世紀後半には次第に消滅していった。

貧民児童には救貧院が建てられ、職業訓練が施されることになる。1723年に発布された救貧院法以降、さらにその数が増え、若年労働者を育てる学校から、基礎的な読み書き能力も授ける学校へと変わっていった。産業革命の進展とともに、都市部での労働力がさらに必要となってきて、貧民層の子弟は読み書きやそれ以上の教育を施されるよりも、歳相応になると、徒弟として働きに出される場合も起こったりして、必ずしもすべての救貧院が納得の行く教育を施していたわけではなかった。しかし、全般的には単なる労働力、稼ぎ手としての立場から、読み書きなどの教育の必要性が徐々に高まっていったのがこの時代である。

グラマー・スクール（grammar school）は依然として保守的な古典的教育を行なっていたが、その一方で、社会階層の移動から新興勢力としての商人階層が社会的地位を高めてきて、その子弟に対して近代的な科目を教える新たな学校が興ってくるようになった。このような中流階層の私立学校の発展が18世紀の主要な展開の一面であり、国教派も非国教派も合わせて、独自の発展を示すようになってくる。その目的も多様であり、管理者も規模もさまざまであった。この私立学校のカリキュラムは、古典、英文法、修辞学、算術、簿記、地理、歴史、初等科学、フランス語、音楽、ダンス等、実学的で多彩なものであった。このような非国教派の私立学校が18世紀社会の変化をさらに加速させた。大学入学者への新しい道を開き、数学や科学の教育から産業革命の精神的態度を広く養い、書記や職工、技術改良者、さらにはそれらの経営者をも訓練していった。産業革命は私立学校で功利主義的路線に沿った教育を受けた人々によって可能となったのである。それに対して、グラマー・スクールで行われていたような旧態依然としたカリキュラムはその魅力を失い、読み書き以上の能力を必要とする英文法や修辞学などの新しい科目が現れてくるようになる。そして、その必要性に応じて、辞書やテキストなども必然的にその必要度合いを高めていくのである。

私立学校は営利を目的とした学校であったので、保護者や生徒の期待にできるだけ応えようとするところが増えていった。そのような学校では職業訓練と、世間に出ても恥ずかしくないだけの教養を教えるのが一般的であった。少なくとも低い身分の出である両親よりも高い教養を身につけさせようとしたのである。これは元来低い地位にあった商人たちが上昇志向とともに中流階層、あるいは上流階層の末端に上がってきたが、それはひとえに経済的富裕さのためであることを身を持って知っていたからであろう。自分の子供にはそのような苦労をさせたくない、あるいはもっと上を目指させて、自分たちにも恩恵をという思いもあったのかもしれない。

2. 識字率の上昇と読み書きの必要性 [2)]

17 世紀半ばまでに、識字率はおおよそ男性 50%、女性 25%であった。それが 1753 年の婚姻法以降ある程度正確に測ることが可能となり、18 世紀の半ばまでには男性 62%、女性 38%とそれぞれ上昇した。[3)] これらの数値は明らかに識字率の着実な向上を意味するのであるが、この識字率は何を指すのであろうか。現代では読み書きを一体のものとするのが一般的であるが、18 世紀以前は、読むことと書くことはそれぞれ別個の能力として教えられていたのであった。義務教育はまだ始まっておらず、読み書き共にできない者や、初歩の読みはできるが書くことはできない者が多くを占めていた。しかしその一方で、さらに上を目指して、書くことを学ぼうとする場合、書く能力は「書き方教師」によって教えられるものであった。また、一般的に男性に対してだけというのが当時の状況であった。婚姻法によって自署をしなければならなくなり、それによって識字率を測るという方法がこれまでの研究の中で行われてきたが、たとえ自署できなくても多くの人が読むことができたという事実がより最近の研究によって明らかとなってきている。[4)] 「書く」ことはできなくても、「読む」ことはできるという識字能力は、最も身近なデイム・スクール (dame school) などで授けられたものであり、これが 18 世紀末までの状況であった。

読めるようになりたいという動機としては、様々な理由が考えられる。娯楽

---

2) 第 2 節は松塚 (2001)、横尾 (1978) を参考にしている。
3) 松塚 (2001, p. 118) を参照。
4) 松塚 (2001, p. 120) を参照。

や宗教のためだけでなく、そもそも土地を中心とした社会から貨幣経済を中心とする社会へと変化するにつれて、書かれた文書が重要な意味を持つようになってきた。借用書、財産目録、遺言状、約束手形、徒弟契約など、流動的ともなってきた社会の中で各種の文書が重要な役割を果すようになってきた。本人は書くことができなくても、あるいは読むことすらできなくても、書かれた文書自体が自らの財産と安全を保証し、人間関係を維持していくうえで重要なものであるという認識が広がっていったのである。そのような文書を通しての人間関係の構築と維持が当時のイギリス社会では必要となってきたため、まずは読めること、さらには書けるようになることへと結びついていった。より良く生きるため、より上の階層を目指そうとする上昇志向の高まりと、社会的変化や都市化など人間関係の変化の上で、文書の存在価値と読み書きの必要性がそれ以前とは比べ物にならないくらい大きなものとなっていったのである。

3. 辞書や英文法書などの需要の高まり [5)]

18 世紀のイギリスにおいては、教育が国によって組織されておらず、また義務でもなかったため、教育を受けるというのは生活の糧を得るための学問習得であった。社会的変化に応じて、上昇志向が高まってきて、向上心を起こさせる廉価本が多く発行された。たとえば、古典縮約本、独習書、簡便読書法、辞書、習字入門書、などである。文学の古典に親しむだけの金や時間に余裕のない人のために古典縮約本が発行された。小説は要約されて安価な小冊子となり、手軽に利用することができるようになる。たとえば、John Wesley (1703–1791) は *The Pilgrim's Progress* (『天路歴程』) の簡約版を作り、自作の *A Short English Grammar* (『簡略英文法』, 1748) と *The Complete English Dictionary* (『完全版英語辞典』, 1764) とを一緒にして販売した。独習書としては、たとえば James Buchanan (*fl.* 1753–1770) が *The Complete English Scholar* (1753) を上梓し、その中で将来商人となる少年たちのために書いたと述べている。 John Ash (c. 1724–1779) も同様に、その著書 *Grammatical Institutes* (1760) の中で、商売をすることになる若い紳士のための文法を編集したと述べている。少し下って William Cobbett (1763–1835) は、1818 年に英文法書を刊行しているが、表紙の題名に、その対象をとくに兵士や、船乗り、

---

5) 第 3 節は Beal (2004)、 Porter (1982)、渡部 (2003) を基にしている。

徒弟、若い農夫であるとはっきり記している。[6] Cobbett は後に著書 *Advice to Young Men, and, incidentally, to Young Women* (1830) の中で、文法を知っていたおかげで、自分の書いた文章から信望を得て、自信を持つことができて、様々な仕事に就くことができるようになったので、文法の知識は正しく書くことの基本であると述べている。[7] 彼は、元々は農奴の子として生まれ、軍隊に入り、本屋や出版業を経て、ジャーナリストとなり、晩年には農場主であり国会議員にまでなった、いわゆる立身出世の人である。その彼が立身出世できたのは文法をきちんと身につけたからだったと書いているのである。このような変化しつつある社会状況の中で、独習書や辞書や文法書の需要が高まっていったのである。

また、18 世紀には先述の識字能力がさらに重要になりつつある時代でもあった。新聞や雑誌の出現によって読み物が増えたからである。熟練工になると新聞の求人欄に目を通すこともあり得ることとなった。文化が大都市化、直接化、画一化、現代化してくる。18 世紀は教育の需要が高まりそれを巧みに使用する効用が認識されて新しい学校が作られた世紀となったが、学校教育を受けられたものはまだまだ少なく、識字能力と学習の基盤となったのは、学校ではなく、自助、家庭、共同体などであった。たとえば上述のデイム・スクールなどである。このようにイギリスの一般社会は、とくに 18 世紀に入ると、かなりめまぐるしい動きを見せ、社会状況の変化から教育への必要性が高まってきて、それに伴い、教育の中でも自国語である英語の読み書きがとくに新興の中流階層やそれを目指す上昇志向の人達にとって重要なものとなってきた。このような流れの中で、国家レベルではどのような動きがあったのであろうか。

4. イギリス版アカデミー論の高まりとその終焉[8]

王政復古のなった 1660 年、「英国学士院」(The Royal Society for the Improvement of Natural Knowledge by Experiment) が正式に発足し、その 4

---

[6] William Cobbett, *A Grammar of the English Language, intended for the Use of Schools and of Young Persons in general; but, more especially for the Use of Soldiers, Sailors, Apprentices, and Plough-boys.* New-York: Clayton and Kingsland, 1818.

[7] Cobbett (1830, pp. 40–43) を参照。

[8] 第 4 節では林・安藤 (1988)、渡部 (2003) に負うところが大きい。

年後には英語改良を進める委員会を作る決議がなされる。この学士院設立を受けて、すでにイタリアやフランスで設立されていた国家レベルでのアカデミーを設立する動きがイギリスでも活発化し、英語規制のために、英文法書や英語辞書の編纂を押し進める動きが出てきた。イタリアでは、すでに標準イタリア語の固定のため、アカデミア・デラ・クルスカが3巻よりなる辞典を17世紀初めには出版しており、出所を明示した、精選された語彙と用例文を備えた優れた辞書のモデルとなった。イタリアに次いでフランスでも、アカデミー・フランセーズが辞書・文法書・修辞学・詩論に関する論考を編集して、フランス語純化を目指した。イタリアに遅れること約80年、17世紀の終わりにはアカデミー・フランセーズ辞典が完成する。

これらの国々に刺激されて、イギリスでも John Dryden (1631–1700), Daniel Defoe (1660–1731), Joseph Addison (1672–1719), Jonathan Swift (1667–1745) などの作家・知識人たちが国語純化と規制のために論陣を張った。中でも *Guilliver's Travels* (『ガリバー旅行記』, 1726) などを著した Swift は、1712年に Oxford 卿に当てた書簡 (*A Proposal for Correcting, Improving and Ascertaining the English Tongue: In a Letter to the Most Honourable Robert Earl of Oxford and Mortimer, Lord High-Treasurer of Great-Britain*) によって、英語の「矯正」と「改良」と「固定」が急務であると提案する。しかし、Anne 女王の急逝 (1714) などによりこの Swift の建議は実現されなかった。

イギリスにおける国家アカデミーの役割を果すことになった一人に Samuel Johnson (1709–1784) がいる。彼は1746年に『英語辞典』編集についての *A Short Scheme for Compiling for a New Dictionary of the English Language* (『編集概略書』) を公表し、その中で、英語辞書編纂の目的は英語の語彙の純粋性を保存し、その用法を固定することであると述べている。そして、翌年の1747年には、上記『編集概略書』を修正した *The Plan of a Dictionary of the English Language* (『辞書編集計画』) を公刊して、Chesterfield 伯に献じた。その後1755年に *A Dictionary of the English Language* (『英語辞典』) を完成させた。国家レベルではなく Johnson 博士一個人が辞書編纂をやってのけ、語彙と綴字問題に解決を見出したのである。彼はこの辞書の序文で、それ以前に盛んに議論されていたアカデミーがたとえ設立され、英語のスタイルを洗練しようとしても、英国民の自由の精神がその設立を阻害するか破壊するであろ

うとはっきり述べている。その後も彼に歩調を合わすかのように、様々な辞書や文法書が民間レベルで編纂され、イギリスにおけるアカデミー設立への反対は決定的となり、イタリアやフランスで見られた国家的レベルでの実現は不可能となったのである。

5. 民間レベルの需要の拡大とその解決[9)]

国家レベルではなく、民間レベルで Johnson 博士が英語辞書を完成させた背景には、イギリス初代の首相 Sir Robert Walpole (1675–1745) の長期政権下 (1721–42) での平和政策によりイギリスの国力が相対的に非常に高まり、フランスを凌ぐようになったことがその要因の一つとされる。[10)] 1066 年のノルマン人による征服以来、フランスよりも下の位置に甘んじてきたイギリスが、近代期に入り、国力を徐々に伸ばしてきて、この時代になるともはや自国の豊かさが隣のフランスよりも高くなってきた。それだけ自信がつくと、フランスを後追いする気持ちも薄れていったのか、17 世紀後半から 18 世紀前半にかけてあれだけ盛り上がっていたアカデミー設立の機運は、Johnson 博士の辞典の出版など民間レベルが力をつけてきたことにより、急速に衰えていったのであった。

このようにしてイギリスではまず 1755 年の Johnson 博士の『英語辞典』が一般大衆に広く受け入れられることになり、その後の辞書編纂はこの辞典をもとにすることとなった。文法書については、その後の 40 年ほどの間に、Robert Lowth (1710–1787) や Joseph Priestley (1733–1804) など後世に名を残した文法家が何人も現れ、多くの文法書を世に送り出すことになる。そして、18 世紀の終わり、1795 年に Lindley Murray (1745–1826) がその著書 *English Grammar* を「編纂」して、その後 1 世紀以上にわたって標準的英文典としての地位を保ち続けることになるのである。先に述べた *The Complete English Scholar* (1753) の著者 James Buchanan (*fl.* 1753–1770) はその 40 年の間に登場するスコットランド出身の教育者であり、文法家でもあった。この Buchanan など多くの文法家の文法書を経て、Murray の『英文典』へと結実していくことになる。これらの文法家たちが英文法書を通してイギリスにおけ

---

9) 第 5 節では林・安藤 (1988)、渡部 (2003) を参照した。
10) 渡部 (2003, pp. 182–83) を参照。

る民間レベルのアカデミーの役割を果すことになったのである。

以上、第1節から第5節で見てきたように、18世紀のイギリスにおいて、いわゆる規範文法が成立するにいたる時代的背景としては、社会の変化と社会階層の移動による下流階層の上昇志向に伴う教育への高まりがあり、それは必然的にその元となる文法書や辞書の需要が高まることを意味した。また、上流階層の知識人たちが望んだイギリス版アカデミーは国家レベルでは設立されず、文法書や辞書などの需要と相まって、民間レベルでの解決となったのであった。規範文法がなぜ必要とされたのかを改めて考察することにより、英語学史における規範文法の存在意義もまた再認識されるのではないだろうか。これこそ林(1990, p. 34)のいう「詩や散文であれ、文法書や辞書であれ、英語文献のなかに、英国民の考え方もしくは精神的傾向の特質を捉えようとする」態度に他ならないであろう。次の第2章では、このような活発な動きが見られた18世紀にいたるまでに、イギリスではどのような文法論が起こり、展開されていったのかを、詳細に考察していく。

第 2 章　18 世紀の規範文法にいたる文法史 [1)]

本章では、イギリスの中世から 18 世紀にいたる文法史を概観する。

1.　中世の文法史

1.1　中世初期（7 世紀～12 世紀）の状況

イギリスにおけるもっとも初期の文法論に関する関心は、キリスト教の布教活動に伴う学校教育の中で、ラテン語の教授もしくは学習というものに現われた。聖 Augustinus (?–c. 604) は Gregory I (540–604) 教皇の命により、597 年にケントに到来し、カンタベリーの初代司教となったが、その布教活動にはラテン語の教授や教会付設の学校を建てることが含まれていた。664 年のホイットビィの宗教会議の後に、タルスス生まれの Theodore はカンタベリー大司教としてローマから派遣され、その同僚 Hadrian とともにカンタベリーに修道院付設の学校を建てた。ノーサンブリアの Biscop (628–690) は、そのときローマに滞在していたが、 Theodore に伴ってイギリスに戻り、その事業を助け、カンタベリーの修道院長を勤めた後、ノーサンブリアに帰り、ベネディクト派の修道院を建てた。その教授法にはカンタベリーで学んだことを適用したと伝えられている。聖職者が教授の任につき、学校教育はローマ・カトリック教会と密接な関係があったからである。

歴史学者 Bede (c. 672–735) の *Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum* (『英国民教会史』) の 631 年の記事には、東アングリアの Sigebert 王が、ガリア地方を旅行して帰国、王位につくとすぐに、ガリア人の間でよく整備されているのを見た学校を真似しようと思って、少年に文法を教える学校を建てたというくだりがある。ガリア地方は、当時ローマ帝国の属州であり、キリスト教化が拡がるにつれて、各地に文法や修辞学のための文法学校が設立された。ここで聖書や古典ラテン文学が司教たちにより教えられたが、Sigebert 王もこれに倣ったのである。

---

1) 本章は主として林・安藤 (1988)、林 (1990)、渡部 (1975) を参考にしている。

アングロ・ラテン文学の第1期（7世紀末～8世紀）の文法学校における学科としては、カンタベリー系のものとしては、ローマ法・ラテン韻律学・天文学・数学などが主要学科であった。この時期の文法教育はギリシャ・ラテンの伝統的な古典・聖書学・教父に関する知識であり、文法書としては Donatus, Priscianus, Servius, Pompeius などの書であった。このようにして8世紀の間には、イギリス全土に修道院が設立され、近隣の地方の一般文化の中核をなして、神学の研究が栄え、付設の学校におけるラテン語教授が進められるようになっていた。

9世紀末になると、ウェセックスの Alfred 大王 (849–899) は、南部地方から北欧人を撃退して、北部地方にその領土を限定した。北欧デーン人との条約を結び、平和を回復して、荒廃していた国内の改善と興隆に力を注ぎ、学芸の復興に努めた。大王のキリスト教文化とその信仰を各地の教会に取り戻す政策は、イギリス庶民と聖職者の間に学問、とくにラテン語研究を目覚めさせることになり、修道院付設の学校で、青少年は読み書きとキリスト教信仰を授けられ、自由民と資力のある者は英語を読むことを習い、聖職を志す子弟にはラテン語学習を課したのである。

第2期アングロ・ラテン文学期（10世紀末）には、'Grammaticus' とも呼ばれ、この時期の代表的学者であったベネディクト会士 Ælfric (*fl.* c. 955– c. 1010) は、修道生活者のラテン語学習のための基本的な教本として、*Grammar* (『文法』) を編纂した。これらは修道院内の学校で使用する教師のための優れた必携書であった。この『文法』は、Priscianus (6 c.) の *Institutiones grammaticae* (『文法の原理』) からの抜粋と、そのほかの文法家からの文法事項を継承して、伝統的な資料を整理したものである。この文法は、11世紀初めのヨーロッパにおいて、古典語以外の母国語で書かれた最初の文法書である。そして2か国語により英語とラテン語の文法的事項を教示する最初の指導書として、その歴史的意義は大きい。

ラテン語研究が復活した10世紀末から11世紀にかけて、文法家 Ælfric の出現により文法論は注目すべきものがあったが、ノルマン人に征服された後は、学芸の衰退は甚だしく、目立ったものはほとんど現われなくなった。12世紀から14世紀にかけて、学芸と学校教育はさらに衰えていき、15世紀に文法学校

が各地域に設立されるにいたるまで低調のままであった。

当時のイギリス社会においては、 schole (schola) (「学校」) という名称は schole musice (= song school,「聖歌学校」) か schole grammatice (= grammar school, 「文法学校」) を指すことが多かった。聖歌学校が読み書きを含む基本的な学習や賛美歌などの朗読・斉唱を行う初等教育機関であったのに対して、文法学校はさらに複雑で高度の学習を授け、ラテン語の文法やラテン古典の読解、ラテン語を話す能力の養成を主目標にしていた。この時期のラテン語教育は次の 3 段階に区別される、すなわち、(i) 初歩のレベルの主目標としては、綴り字・発音・屈折形の習得、語彙の理解、(ii) 一層進んだ段階では、韻文と散文の両面にわたる作文技法とラテン語原典の研究と理解、(iii) 最高のレベルでは、文法研究者はラテン語文の構造の理解を求め、語の起源的意味をも探求するものである。

1.2 中世中期から末期 (13 世紀～15 世紀) の状況

中英語時代、特に後半の歴史的特色は、政治的には英国民の国家意識が高まってきたことと、当時ヨーロッパに広く見られた中世騎士道精神の衰退であった。これにともなって、中産・下層階級が次第に政治的・経済的力を持つにいたり、国王の権力が制限され、国民議会が発達した。ノルマン王朝の宮廷人・貴族により用いられていたフランス語に対して、大多数を占めていた一般庶民の英語が再び確立していった時代である。

すでに 13 世紀には礼拝堂 (chantry) 付設の学校も数多く開設されていた。礼拝・勤行を維持する基金により建てられたこのような施設は寄進学校 (chantry school) と呼ばれ、他の世俗の学校と同様に教育と宗教の両方の目的でもって運営されていた。しかし、14 世紀から 15 世紀を通じて、学校教育の重要な中心は依然として大聖堂やそのほかの大きな教会にあった。文法教育の初歩的な過程は、地方の聖歌学校や施物院学校 (almonry school) において授けられていた。14 世紀に起こった Black Death (「黒死病」) などにより聖職者である教師不足もあり、牧師養成もそのひとつの目的であった新しい文法学校 (grammar school) がイギリス各地に設立されることになり、宗教的施設の援助により発展していった。

14 世紀半ばごろまでは、文法学校の教場内で用いられていた言語はフランス語であったが、黒死病の流行以後に、文法学校の教授法に大変革が起こる。1385年にはイギリスのすべての文法学校では、フランス語を離れて英語で翻訳したり覚えたりするようになった。そのため、以前より短い時間で文法を学べるようになったのである。14 世紀半ばごろから始まった文法学校における英語使用は、1385 年には一般に普及したと考えられる。

中世末期における言語事情は、英語が口語として広く普及していくとともに、文書・証文などの書記言語としても確立したことを特徴とする。1423 年以降は、イギリス議会の記録はラテン語にかわって英語が用いられるようになる。1425年までには、公的私的書簡は、形式ばった場合でも、日用の格式ばらない場合でも英語で記されるようになっていた。このような言語状況と相まって、15 世紀には文法学校の創設が広まり、初等教育における革新運動が高まっていき、文法的論考とくに学校教科書の編集の量が次第に増していった。文法学校の教師たちが自らの教授資料としてさまざまな類語集が編まれていった。また、ラテン語作文のために、ラテン語に訳されるべき英語の文例集である「用例集」(vulgars) と称されるものが幾編か編纂された。[2] さらに 15 世紀半ばごろには、ラテン語の基本的な語彙の全体を包括し、これに英語の訳語と文法的説明を付したいわゆる「辞書」が出現するにいたった。[3] 文法書、類語集、用例集から辞書にいたるまで中世末期にはラテン語学習のためとはいえ、英語を用いたさまざまな学習書が現れるようになったのである。

2. 16〜17 世紀の文法史

2.1 17 世紀前半までの状況

封建制度の社会構造の中でカトリック信仰がゆきわたっていた中世の思考習

---

[2] たとえば、John Stanbridge, *Vocabula Magistri Stanbrigi* (1496), *Vulgaria Stanbrigi* (1508), William Horman, *Vulgaria* (1519), Robert Whittinton, *Vulgaria quaedam cum suis vernaculis* (1520) などである。

[3] たとえば、*Promptorium Parvulorum* (c. 1440), *Medulla Grammatice* (c. 1460), *Catholicon Anglicum* (c. 1483), *Ortus Vocabulorum* (1500) などである。

慣に対して、16 世紀のイギリスにおいては、新しいものの考え方ないし原理がこれに取って代わった。この、イタリアやフランスから影響を受けて発達した「ルネサンス（文芸復興）」は、主に宮廷と大学を通じてイギリスにもたらされることになった。これらの国々の人文主義者たちは、イギリス宮廷内において、中世の崩れたラテン語に対して、 Cicero (106–43 B.C.) の洗練されたラテン語を教え、公文書や公的な場でラテン詩の発表を行ったりした。他方、オックスフォードでは優れた古典学者のグループが集まり、イギリスの文献学の興隆に先駆的役割を果たしていた。彼らは「オックスフォード改革運動者」 (Oxford Reformers) と呼ばれ、そのメンバーは William Grocyn (c. 1446–1519), Thomas Linacre (c. 1460–1524), John Colet (c. 1467–1519), William Lily (c. 1468–1522) である。ギリシャ語と古代ギリシャの学芸の研究を進め、哲学・医学・神学などの広い学問領域において活躍した。なかでも Colet と Lily は Erasmus (1466–1536) と協力して聖パウロ校の建設につとめ、もっとも影響のあった *The Royal Grammar* (「ラテン文法書」) を生徒たちのために編集した。1527 年版の表題によると、「もと聖パウロ校の校長である神学者 Ioannis Coleti (John Colet のラテン名) の *aeditio*、[4] これとともに Guilemi Lilij (William Lily のラテン名) の *Grammatices rudimenta* をあわせ収めたもの」となっている。 Lily は 1522 年に亡くなったが、その遺著に *Short Introduction of Grammar* (1540) がある。第 1 部は 'Brevissima Institutio' というラテン文法で、内容は前述の *aeditio* と大差ない。第 2 部は 'De Orthoepia' と題して、イギリス人がラテン語を発音する際によく間違う点を指摘したものである。

15 世紀の間に、英語は文書記録とともに一般の話し言葉としても確立したが、フランス語はすでに努力して学ぶべき外国語となっていた。地理的・文化的にも関係が密接になってきた近代諸国家の言語への関心も深まることとなった。英語で書かれたフランス語文典や辞書だけでなく、スペイン語やイタリア語に関する学習書や辞書も 16 世紀後半には編纂された。たとえば、以下のような文典や辞書がその頃に編まれたものである。

---

[4] これは Donatus (*fl.* mid 4th c. AD) の *Ars minor* (同じく Donatus が著し、一般には *Ars maior* とも呼ばれた *Ars Grammatica* の簡略版) を作りなおしたものである。

フランス語について

(1) William Caxton, *The Vocabulary in French and English.* c. 1483.

(2) Alexander Barclay, *The Introductory to Wryte and Pronounce French.* 1521.

(3) John Palsgrave, *Lesclarcissement de la langue francoyse.* 1530.

(4) Claudius Holliband, *The French Schoole-maister.* 1573.

(5) Claudius Holliband, *A Dictionarie French and English.* 1593.

イタリア語について

(6) John Florio, *Florio His Firste Fruites.* 1578.

(7) John Florio, *A Worlde of Wordes.* 1598.

スペイン語について

(8) Richard Percivale, *Bibliotheca Hispanica.* 1591.

また、文法学校の教科としてなお重要な科目であったラテン語は、上記の古典ラテン文学熱とともにラテン語辞書の必要性を高めることになった。羅英辞書、英羅辞書が幾種類も編纂され、語義をローマの古典作家からの文献で解説するだけでなく、同義語畳用の原理を実行して語彙を豊富にするような工夫も見られた。以下、当時のラテン語辞書をいくつか挙げてみる。

羅英辞書

(9) Thomas Cooper, *Thesaurus Linguae Romanae & Britannicae.* 1565.

(10) John Veron, *Dictionariolum Puerolum.* 1552.

(11) Thomas Thomas, *Dictionarium Linguae Latinae et Anglicanae.* 1587.

英羅辞書

(12) Richard Howlet, *Abcedarium Anglo-Latinum.* 1552.

(13) John Withals, *A Shorte Dictionarie for Younge Beginners.* 1553.

(14) Peter Levins, *Manipulus Vocabulorum.* 1570.

(15) John Baret, *An Alvearie or Triple Dictionarie, in Englishe, Latin and French.* 1573.

(16) John Rider, *Bibliotheca Scholastica.* 1589.

このようなルネサンスの影響を受ける中で、英語は以下の大きな 3 つの問題に直面し、その解決を強いられることになった。それは、(i) 数世紀にわたり優位に立っていたラテン語に対して、国語としての独自性を認識すること、(ii) 合理的で統一ある綴字法を確立すること、(iii) 広範な使用に耐える語彙を増大させること、である。イギリスの人文主義者たちは、英語の特質を弁護し、英語を軽視し差別する人々に対して反論するようになった。ここにおいて、本格的な英語の研究が始まったのである。まず、英語綴字法の改良と音声表記の合理化という形態面についての認識とその解決法の実践に手が付けられた。このような機運の中で、ラテン文典に対してイギリス人の母国語である英語の文法書、英文典も産み出されることになった。

学校教師であった William Bullokar (c. 1530–c. 1590) は、英語そのものを語学的に取り扱った最初の体系的な文典を著した。次の二書である。

(17) W. Bullokar, *A Short Introduction or Guiding to Print, Write, and Reade Inglish Speech.* London: Henrie Denham, 1580.

(18) W. Bullokar, *Bullokars Booke at Large for the Amendment of Orthographie for English Speech.* London: Henrie Denham, 1580.

(17) は英語の綴字法改革論の趣旨を小冊子の形で述べたもので、このような改良はイギリス国民の福祉と英語の名誉になると述べている。(18) の方は、英語を容易にしかも迅速に完全に読み書きができるようにという目的で執筆されたもので、自らが考案した完全文字を推奨している。上記 2 冊を刊行した 6 年

後に、 Bullokar は修正綴字法を用いて書かれた最初の英文法書を世に送っている。

(19) W. Bullokar, *William Bullokarz pamphlet for grammar: or rather too be saied hiz abbreuiation of hiz grammar for English, extracted out-of hiz grammar at-larg.* London: Edmund Bolliant, 1586.[5)]

約 80 ページの小冊子であるこの書は (18) の抜萃である。英語を簡単に分析するために著し、その後の外国語の文法の知識に熟達することを、その趣旨で述べている。前述の Lily のラテン文典を手本とし、その分析方法を英語にあてはめ、英語そのものの改新を目指した点が今なお評価されている。[6)] 第 1 部 (品詞論・語形論)、第 2 部 (英文法の総括)、第 3 部 (英文法とラテン文法の比較)、

---

5) 実は同年に Bullokar 著で *Bref Grammar or Abbreviation of hiz Grammar for english entracted out-of his Grammar at-large* という書名の文法書が存在するが、これをめぐっては (19) との関係で諸説がある。1586 年にいわゆる *Bref Grammar* が出版され、それには 'Abbreviation of hiz Grammar for english extracted out-of his Grammar at-large' (p. 1) という副題がついている。そして、 Bodleian Library に現存するこのコピーには *Pamphlet for Grammar* という小冊子が最後のところに付いており、Dobson (1957, p. 96) は、おそらくこれは *Bref Grammar* の広告であろうと述べている。しかし、 Alston (1974, I, p. 2) はこの Bodleian Copy は綴じ誤り ('misbound') であり、 *Bref Grammar* は *Pamphlet for Grammar* の欄外見出し ('running-title') であると反論している。そして、Christ Church College にはその完全な形で残っているとも述べており、 Alston (1974) は *Bref Grammar* を独立した別個の書籍としては挙げていない。大塚 (1971, p. 348) はその注で、大塚本人がこの Christ Church College のコピーをチェックし、Alston の観察が正しいことを確認したと述べている。ただし、大塚 (1971) は従来通りの呼び名である *Bref Grammar* という名称を最初の英文典に使用するとしている。ところが、渡部 (2003, pp. 72–77) はこれとは反対の考え、つまり Dobson の方が正しい、と述べている。最近では、 Tieken-Boon van Ostade (2012, p. 5) が、 'the English grammar writing tradition started with the publication of *William Bullokarz Pamphlet for Grammar* in 1586 (Alston 1965)' と述べており、 Alston の記述に従っている。そこで本論文でも Alston の表記に従った。

6) 宇賀治 (2010, p. 6)、宇賀治 (2012, p. 69) を参照。

第4部（韻律論）からなり、第1部がその中心をなす。

(19) から遅れること約10年、ラテン語で書かれた英文法書が出版された。

(20) P. Gr. (?Paul Greaves), *Grammatica Anglicana, praecipuè quatenus à Latina differ, ad vnicam P. Rami methodum concinnata.* Cantabrigiae: ex off. Iohannis Legatt, 1594.

これはラテン語で書かれた最初の英文法書でもあり、Petrus Ramus (1515–72) の影響を示す最初の英文法書でもある。著者名は P. Gr. とだけ記されているが、現在では Paul Greaves[7] か、あるいは Paul Graves[8] とされている。副題に「P. Ramus の独特の方法に従って構成されている」という説明がある。国家意識をはっきりと示し、英語の優秀性への自信が見られる。

Bullokar は「規制されていない」母国語の状態に着目し、そのために「野蛮な」言語とみなされている英語に対して、辞書と文法書の必要性を論じた。一方、P. Gr. は諸言語より勝っている英語を外国人に理解させ使用させるためにラテン語で文法書を刊行した。両者ともに、語彙と綴字法改正の問題からはじめて品詞論・統語論にまで取り扱いを広げ、文法の中心的な部門の研究へとイギリス国民の関心を向けたことは特筆に値する。

先に見たように、16世紀の中頃に羅英辞書や英羅辞書がいくつも編纂されたが、イギリスで始めての英語辞典（英英辞典）は、Robert Cawdrey (*fl.* 1604) の *A table aplphabeticall, conteyning and teaching the true vvriting, and vnderstanding of hard vsuall English words.* (London, 1604) であり、これは17世紀に入ってすぐのことであった。それから10数年を経て、スコットランド出身の Alexander Hume (c. 1560–1609) は以下の書を著した。

---

[7] E. J. Dobson (1957, p. 95) を参照。
[8] O. Funke (1938, p. xxxv) を参照。

(21) A. Hume, *Of the Orthographie and Congruitie of the Britain Tongue.* c. 1617.[9)]

この書は、英語の綴り字や発音を標準化して、イングランドとスコットランドで統一化しようとする目的で、彼自身の学校用として編纂したものである。

詩人 John Milton (1608–1674) の師でもあった Alexander Gill (1564–1635) はラテン語で次の英文法論を公刊した。

(22) A. Gill, *Logonomia Anglica. Qva gentis sermo facilivs addiscitvr.* Londini: Iohannis Beale, 1619.

この書は伝統的な 4 部門として、綴字論・語形論・統語論・韻律論に長い音声表記一覧表を加えた包括的な文法論である。統語論を重視し、また表記法に工夫が施されている。

次の書は、ロンドン定住のフランス人の商人 George Mason がフランス人向けに書いた文法書である。

(23) G. Mason, *Grammaire angloise. Contenant reigles bien exactes & certaine de la pronunciation, orthgraphe, & construction de nostre langue.* Londres: Nat. Butter, 1622.

本書は文字論・文法論の部分と、実用会話篇として英仏対象の例文を示している。

---

9) Michael (1970, p. 567) には、次のように記されている。

> Alexander Hume, Rector of Edinburgh High School, 1596–1606. *Of the Orthographie and Congruitie of the Britan Tongue*: a treates, noe shorter then necessarie for the shooles. Ed. H. B. Wheatley, EETS No. 5, from BM MS. Bibl. Reg. 17A. xi, 1865.

なお日下部 (1968, pp. 337–48) にもこの書の詳しい解説がある。

それからさらに 10 数年を経て、音楽研究家でもあった Charles Butler (c. 1560–1647) が次の書を著した。

(24) C. Butler, *The English grammar, or the institution of letters, syllables, and words in the English tongue.* Oxford: William Turner for the Author, 1633.

音声論を含む文字論、綴字法を含む音節論、語彙論では名詞・動詞・副詞を扱い、語修飾法に句読法・アクセント論を入れ、類義語・同音語一覧表を付している。彼は英語の優秀性を信じたうちの一人であり、その古代性や豊富にして優雅さ、一般性を賛美している。

同じ時期、 Ben(jamin) Jonson (c. 1573–1637) は次の書で文法を述べている。

(25) B. Jonson, *The works of Benjamin Jonson.* London: Richard Bishop, sold by Andrew Crooke, 1640. [Volume II: London: Richard Meighan, 1640]. [10)]

第 1 巻は文字論・語形論であり、第 2 巻は統語論となっている。文法を「語の構成を教える」部門であると規定している。 Jonson はラテン文法にならって 8 品詞（分詞を 1 品詞とみなす）に冠詞を加えて 9 品詞とする立場をとっている。彼は文法をすべての外国人の利益のために書いたと述べているが、英語が粗野で野蛮であるという見解を改めるために、英語を文法的に整理しようと努めたのであった。

以上、17 世紀前半までに著された主な英文典を見てきた。中世から連綿として受け継がれてきたラテン語の学習と研究が、ルネサンス期に入り、古代ラテン語の重要性が再認識されるとともに、母国語である英語を客観的に学習・研

---

10) Alston (1974, I, p. 4) には、次のように付記されている。

[*The English grammar* (with separate title-page) vol. II, 31–84: pronunciation; grammar; syntax.] Parallel English and Latin, and based on the grammar of Pierre de la Ramée.

究する素地が出来上がってきた。それまで非難されていた英語が賞賛される状況へと変化してくるにつれて、ラテン文法をモデルとして英文典が編纂されるようになってきたのは、英語辞書の発展とともに、自国民に対してのみならず、外国人に対してもその優位性を示そうとする態度にほかならない。このような状況を受けて、17 世紀後半から 18 世紀にかけて、実に多くの英文法書が世に現れることになるのである。

2.2 17 世紀後半の状況

イタリアからフランスへと広がっていったアカデミー設立の機運は、イギリスにおいても 17 世紀前半に高まってきた。[11] 1660 年に「イギリス学士院」(The Royal Society for the Improvement of Natural Knowledge by Experiment) が正式に発足し、1664 年には英語改良を進める委員会を作る決議がなされている。その委員の一人 John Evelyn (1620–1706) は、英文法書の編集と余分の文字をのぞいた綴字法の改良が必要であることを提案した。これにつづいて、純正な英語語彙の収集、外来語の本来の意味、技術用語、方言的表現、廃語の復活などについても論じた。

同じく委員の一人である John Wallis (1616–1703) は、この時期におけるもっとも重要な著作となる以下の英文法書をラテン語で著した。

(26) J. Wallis, *Grammatica linguæ Anglicanæ. Cui præfigitur, de loquela sive sonorum formation, tractatus grammatico-physicus.* Oxoniœ: exc. Leon. Lichfield, veneunt apud Tho. Robinson, 1653.

音声論・綴字論は文法本論に先立つ部分で取り扱われ、全巻の 3 分の 1 を占める。その後、語形成・語形態論、統語論、語源論、韻律論をそれぞれ扱っている。 Wallis は英語の言語としての優秀性に誇りを持っており、それが文法規

11) はやくもイタリアでは 1582 年にアカデミア・デラ・クルスカ (Accademia della Crusca) が創設され、フランスでも 1635 年にアカデミー・フランセーズ (l'Académie françsaise) が設立された。

則により整えられる必要があると考えていた。文法観としては次の 2 つの目標を立てている。(i) ラテン文法の規範を英語に押し付けてはならないこと、(ii) 英語を直接観察し、それに基づいて英文法を構築するという経験的立場に立つことである。

次に、 Wallis の英文法書と並んで、17 世紀末に最大の影響を及ぼしたのが Christopher Cooper (?–1698) の以下の書である。本書もまたラテン語で書かれている。

(27) C. Cooper, *Grammatica linguæ Anglicanæ. Peregrinis eam addiscendi cupidis pernecessaria, nec non Anglis præcipuè scholis, plurimum profutura.* Londini: typis J. Richardson imp. Benj. Tooke, 1685. [12)]

第 1 部は音声論、第 2 部は綴字の問題を論じている。これらに先立つ序論の中で彼は、英語の特色として語彙が豊富であり、他の言語に引けをとらず、明晰であり、優雅にして、習得が容易であることを挙げている。そして、第 3 部では文法論を展開しており、品詞と派生、品詞論、統語論、語の属性と合成、句読法に分けて解説している。彼は資料の収集家であったばかりでなく、理論の裏付けを持ちながら、独断にとらわれずに公正に判断した優れた文法家であった。

---

12) Alston (1974, I, p. 11) には次のように付記がある。

> Cooper published an English translation (with considerable changes) of the first two parts of the *Grammatica* in 1687 entitled *The English Teacher.* But since this is virtually a new work, and contains nothing on grammar, it will be fully entered in the volume dealing with pronunciation.

また、渡部 (1975, pp. 139–40) は「このこと (ラテン語版にある英文法の部分が欠落していること [筆者注]) は明らかに、英語版が発音と綴字教育専用に作られたものであることを示し、研究のためには両版を対照することが必要である」と述べている。この英語版については (29) で改めて考察する。

イギリスに帰化したフランス人 Guy Miège (1644–1718?) がフランス語教師として名声を博した後に上梓したのが次に掲げる文法書である。

(28) G. Miège, *The English grammar; or, the grounds, and genius of the English tongue.* London: J. Redmayne for the Author, 1688.

Wallis が科学者としての立場から公平に英語の構造を眺めたのに対して、Miège はイギリス人の教育の重要性という観点から、英語の特質を理解させる必要があることを強調した。彼はラテン語学習以前に母国語教育を奨励したのである。その後、哲学者 John Locke (1632–1704) の *Some Thoughts Concerning Education* (『教育に関する若干の考察』、1693) が公刊され、母国語としての英語教育の重要性についての見解が一般識者に大きな影響を及ぼした。中世以来強調されてきたラテン語学習に対して、母国語教育の必要性が理解されるようになった。Wallis や Cooper の優れた英文法書の出版は、このような母国語教育運動を推し進める基盤として機能したのである。

3. 18 世紀の英文典の発達

3.1 18 世紀前半の状況

1660 年にイギリス学士院 (The Royal Society for the Improvement of Natural Knowledge by Experiment) が設立されて以来、学者や文人たちによって国家的なアカデミーを設立しようとする動きが出てくる。1700 年前後には Daniel Defoe (1660–1731), Joseph Addison (1672–1719), Jonathan Swift (1667–1745) らの文人によって、英語を洗練し、矯正し、固定することが急務であるという論陣がさまざまに張られた。 Swift は国家的事業で固定化を目論んだのであったが、1714 年に Anne 女王が急逝したことにより、これは実現しなかった。

このような状況の中で、イギリスにおける英文典はどのような発展を見せるようになっていたのであろうか。17 世紀後半に Cooper は上述の *Grammatica Linguae Anglicanae* (1685) をラテン語で著した。そして、その 2 年後の 1687

年には自国のイギリス人を対象として次の *The English Teacher* を英語で刊行している。

(29) Christopher Cooper, *The English Teacher, or the discovery of the art of teaching and learning the English tongue. Fitted for the use of schools, and necessary for all those that desire to read, write, or speak out tongue with ease and understanding.* London: John Richardson for the Author, sold by Walter Kettleby, 1687.

この英語版は1685年のラテン語版の簡略版であり、詳細な文法を扱った第3部は省略されている。また、英語版のタイトルからわかる通り、この文法書は教育的見地から編まれたものである。さらに、1685年版はラテン語で書かれているが、その2年後には英語で書き、内容自体はラテン文法に依拠しながらも、それまでのラテン語で書くという伝統を破ったことは注目に値する。 Poldauf (1948, p. 90) によると、前節の Cooper の英文典はラテン語で書かれた最後の英文典ということであり、対象が外国人を主にするものであったが、英語で著された英文典は、子供のために書かれたものであり、また、正しい英語を書くことが求められている大人にもその必要性があったようである。英語を必要とする外国人だけではなく、上昇志向を求めるイギリス人やその子供たちにも徐々に英文法書が必要になってきていることがわかる。

次に世紀の変わり目となる1700年に次の書物が出版された。

(30) A. Lane, *A Key to the Art of Letters: or, English a learned language, full of art, elegancy and variety. Being an essay to enable both foreiners, and the English youth of either sex, to speak and write the English tongue well and learnedly, according to the exactest rules of grammar. After which they may attain to Latin, French, or any other forein language in a short time, with very little trouble to themselves or their teachers. With a preface shewing the necessity of a vernacular grammar.* London: A. & J. Churchil, and J. Wild, 1700.

先にふれた Cooper の英語版 (1687) から13年後に著されたこの英文法書は、その副題からもわかる通り、英国人および外国人の男女に文法の最も厳密なる規則を教えようとするものである。古典語は 'learned language' であるのに英語はそうではないと考えられているのは、文法が確立していないからだという考え方が背後にあり、そのような英語の地位を上げるという愛国的な目的のために本書が書かれたのである。 Lane はこの書の中で文法の目的として、あらゆる言語が同様に持っている普遍的な規則に従って、すでに知っている言語（ここでは英語）をいかに上手に教養にあふれた話し方、書き方ができるようになるかを教授することだと述べている。これは17世紀後半から広まった普遍文法 (universal grammar) の考え方[13] を取り入れて、英語を理性的な観点から教育してゆこうとするものであり、文法は言語の知識を有するものに有益であって、その駆使能力を向上させるのに役立つものと考えたのである。 Lane の英語教育の必要性については、英語教育の歴史における重要な変化を反映しており、それは Locke の合理主義的な教育改革論に影響を受けたものである。

Lane の文法書から 7 年後には以下の書が著されている。

(31) Thomas Dyche, *A Guide to the English Tongue. In two parts.* London: Sam. Butler, 1707.

この書は約 100 年間で 100 版を超え、当時彼の名前は多くの人が知ることとなった。英文法書 (Dyche の書は厳密には綴字本であるが) が一部の人対象のものから、広く一般の人に必要なものとなっていく過渡期のものであり、これ以降さらにその傾向は広まっていくのである。

---

[13] 普遍文法の考え方は Francis Bacon (1561–1626) から始まり、Bishop Wilkins (1614–1672) の *An Essay towards a Real Character and a Philosophical Language* (1668), フランスの修道院 Port-Royal des Champs の A. Arnauld and C. Lancelot による *Grammaire générale et raisonnée* (1660), John Locke (1632–1704) の *An Essay concerning Human Understanding* (1690) などがその流れを作った。なお、 Port-Royal については、興津 (1976, pp. 30–32), Robins (1990^3, pp. 140–47) を参照。

1710年頃、イギリスの文人や批評家たちの英語を純化し矯正しようとする考え方は、イギリス国民一般の英語についての関心を反映したものであった。文法家たちもそのような傾向を受けて、英文法書がつぎつぎと出版されるようになっていく。国をあげて、自国の言語である英語に関心を持ち、議論を行い、国家統制にまで持っていこうとする雰囲気があったのかもしれない。このような中で、1711年から1712年にかけては、 John Brightland (?–1717), James Greenwood (?–1737), Michael Maittaire (1668–1747) と相次いで3人の文法家による文法書が現れ、「文法戦争」とも呼ばれる時期を迎える。この 3 名が著した文法書に対する作者不詳の批判書 *Bellum Grammaticale* が 1712 年に現れる。その副題に *The Grammatical Battle Royal* とあるところから、「文法戦争」と呼ばれるようになったのであるが、この不詳の作者は、 Brightland を支持し、 Maittaire を揶揄し、 Greenwood をこき下ろしたのであった。

(32) Anon., *Bellum Grammaticale: or, The Grammatical Battle Royal, in Reflections on the Three English Grammars.* London: J. & M. Jerund [!], sold by J. Morphew, 1712.

以下、この3名の文法書について見ていく。

まず、「文法戦争」でとり上げられた 3 名のうち、作者から支持された Brightland について見てみよう。この書は誰が書いたものか、いろいろな議論があったようであるが、現在では批評家 Charles Gildon (1665–1724) が書き、出版者 John Brightland が出版した書と推定されている。[14] Michael (1970, pp. 563–64) では第4版まで出されたようになっているが、Alston (1974, I, pp. 13–15) では 1759 年の第8版まで出されたことになっている。[15]

---

[14] 著者論争ついては、渡部 (1975, p. 549) の注 388 に詳しい。

[15] Alston (1974, I, pp. 13–15) によると、厳密には 1782 年に London で *Youth's preceptor, containing a grammar of the English tongue* という a new edition が出版されているが、これは第 8 版の 'verbatim' (同一内容書) であり、タイトルページに著者名として Sir Richard Steele という名前があるだけの書である。

(33) Charles Gildon, and John Brightland, *A Grammar of the English Tongue, with notes, giving the grounds and reason of grammar in general. To which is added, a new prosodia; or, the art of English numbers. All adapted to the use of gentlemen and ladies, as well as of the schools of Great Britain.* London: John Brightland, 1711.

本書は、その対象者として子供や女性とはっきりうたっており、その目的は 'to Read and Write English with as great Justness and Exactness as the Learned', つまり「古典語と同じくらい正確に英語の読み書きをするために」とある。また古典語をもとにする規則ではその負担が大きくなり、得るところが少ないとも書かれている。この文法書は初学者だけではなく、教師などのための参考書的な側面も持たせたかったようで、場合によってはその脚注の方が多いページもある。ここから、学校教育などでの英語教育の必要性も読みとれる。文字論・音節論・正字法・語形論・文論という構成であり、最後に韻律論を付している。英語に即した文法を目指している点が評価されている。

次は、Gildon and Brightland と同じ年に書かれた Greenwood の文法書である。この書もよく売れたようで、1753 年の第 5 版まで出されている。

(34) James Greenwood, *An Essay towards a Practical English Grammar, describing the genius and nature of the English tongue. Giving likewise a rational and plain account of grammar in general, with a familiar explanation of its terms.* London: R. Tookey, sold by Samuel Keeble, John Lawrence [et al], 1711.

この文法書の目的としては、(i) 人々に母国語を勉強する刺激を与えること、(ii) 若い人達にとって文法の勉強が退屈で厄介なものではなく楽しいものにすること、(iii) 文法の教育がそれまで無視されてきた女性を対象とすること、が書かれている。そして、文法の捉え方は、正しく話す技術を先ず第一とし、書くことは二義的としている。文法の定義の補足として、問答形式で説明を加えている箇所があるが、ここでも正しく話すこととはっきり述べている。巻頭に Wallis

による英語史と英語資料を載せ、語形論・語形成論・統語論・正書法・韻律論の 5 部からなっている。母国語の研究を奨励し、女性にも文法教育の必要性を説いている点が注目される。上記の Gildon and Brightland も同様であるが、男性だけでなく、女性にも教育が求められるようになってきたことの現れであろう。

「文法戦争」の 3 人目の文法家は Maittaire である。彼が書いた文法書は前の 2 書と違い、あまり売れなかったのか、改訂されていない。[16] Maittaire はフランス人であり、ユグノー教徒である両親とともに、ナントの勅令廃止とともにイギリスに渡った人であり、Cooper などのラテン語で書かれた英文法書を必要とした外国人であったようである。

(35) Michael Maittaire, *The English Grammar; or, an essay on the art of grammar, applied to and exemplified in the English tongue.* London: W. B. for H. Clements, 1712.

Maittaire の文法の定義は、正しく適切に書いたり話したりする技術であるとしている。しかし、このような態度の Maittaire に対して Poldauf (1948, p. 107) は真に学問的な文法を英国の若者に提示しようとして失敗したと評している。また、子供たちに文法を好きになってもらうように意図したようだが、その時代を正しく理解していなかったとも評している。 Vorlat (1975, p. 37) も Maittaire が対象者として子供や女性を意図していたことをあげているが、先ほどの Poldauf と同様に、その時代を読めていなかったとも評している。本書は伝統的に、発音、文法、統語論、修辞学、語形成を取り扱っている。

「文法戦争」の時期から 20 数年間は、のちに著名となる文法書は現れなかっ

---

[16] Alston (1974, I, p. 16) には次の記述が見られる。

> M. Löwisch, *Zur englischen Aussprache von 1650–1750 nach frühneuenglischen Grammatiken,* Kassel, 1889, 16–17, cites a fourth edition published in 1721, but as this reference is given in connection with Brightland's grammar it may be assumed to be an error for the fourth edition of that grammar published in 1721 (no. 46).

た。先述した国家アカデミー論が実現されなかったことを受けて、イギリス国内の雰囲気が停滞したのかもしれない。しかしこのような中でも、多くの文法書が出版された。年代を追って、そのいくつかを見ていくことにする。

(36) Thomas Sheridan, *An Easy Introduction of Grammar in English for the understanding of the Latin tongue.* Dublin, 1714.

これは俳優でもあり、雄弁術でも有名であった Thomas Sheridan (1719–1788) の父 Thomas Sheridan (1687–1738) （父子同姓同名）が著した文法書である。元来ラテン語の理解のために書かれたもので、従来と同じ品詞分類となっている。動詞の定義に「名詞がなければ何も意味することができない語」('... a Word that cannot Signify any thing without a Noun') と述べたのは彼が最初である。

(37) Hugh Jones, *An Accidence to the English Tongue.* London: John Clarke, 1724.

上記 (37) の著者 Hugh Jones は、アメリカ人ではじめて英文法書を書いた人ということになっている。[17] 品詞分類は 3 分法、文法用語に独自のものが見られる。

(38) Daniel Duncan, *A New English Grammar, wherein the grounds and nature of the eight parts of speech, and their construction is explain'd.* London: Nicholas Prevost, 1731.

---

[17] Alston (1974, I, p. 16) には次の記載がある。

> As stated on the title-page Hugh Jones was "lately mathematical professor at the College of William and Mary, at Williamsburgh in Virginia." Note: Grace W. Landrum, *William and Mary Quarterly Historical Magazine*, XIX, 1939, 272–85. K 5764 (筆者注： Kennedy 1961, p. 206 にある 5764 番の Jones の項目のこと) gives the title as "A short English grammar: an accidence to the English tongue". Presumably the first recorded English grammar written in America.

Islington School の教師であった Duncan は普遍文法論者でもあった。生徒にまず母国語を教えると文法の習得が容易となり、ラテン文法の習得という目的のための予備学習として役立つという立場である。品詞分類は表題にもある通り 8 品詞で分類している。

(39) Isaac Barker, *An English Grammar shewing the nature and grounds of the English language in its present state.* York: Tho. Gent for John Hildyard, 1733? [18)]

品詞分類は上記 Duncan などと同じく 8 品詞論者である。冠詞は形容詞と見ている。時制を過去・現在・未来の 3 分法としている。

(40) Anon., *The English accidence, being the grounds of our mother tongue: or a plain and easy introduction to an English grammar.* London: J. Roberts, 1733.

作者不詳の文法書である。英語を始めに学ぶことにより、ラテン語などをもっと速く習得できるとするものである。品詞は冠詞を別に立てているため、9 品詞となっている。

(41) William Loughton, *A Practical Grammar of the English Tongue.* London: Cæsar Ward & Richard Chandler, 1734.

学校教師 Loughton による文法書である。英語の正しい習得を目的として、英語教育だけを受け入れる人の学校用に考案されたものとなっている。

[18)] Alston (1974, I, p. 17) には、'The dedication is dated from Whitby, May 22, 1733.' とある。

(42) John Collyer, *The general principles of grammar: especially adapted to the English tongue.* Nottingham: Tho. Collyer & R. Robinson (London), 1735.

地方都市 Nottingham の教師だった Collyer の英文法書である。英文法はできるだけ「普通のラテン文法」('the common Latin grammar') に近づけたほうがよいとの考えであり、形容詞を 'noun' (広義の「名詞」) の中に含めず独立させ、冠詞と分詞を形容詞の中に含めるという現代の学校文法にも通ずる 8 品詞分類をとっている。

(43) Solomon Lowe, *English grammar reformed into a small compass and easy method for the readier learning and better understanding of the English tongue.* London: the Author, 1737.

普遍文法に立った文法書であり、諸外国語への入門として、英語をよりよく理解することを目標としている。

(44) James Greenwood, *The royal English grammar, containing what is necessary to the knowledge of the English tongue.* London: J. Nourse, 1737.

これは 1711 年に出版された上記 (34) James Greenwood, *An Essay towards a Practical English Grammar* の簡約版である。1711 年版が第 5 版 (1753 年) まで版を重ね、好評だったのであろう、この簡約版も版を重ねて第 9 版 (1780 年) まで出版されている。[19]

(45) Thomas Dilworth, *A New Guide to the English Tongue.* London: Henry Kent, 1740.

---

[19] Alston (1974, I, pp. 15 & 20) による。

文法の定義として、適切に統語的に書いたり話たりする技術であるとする。実践的な英文法を目指しており、語順の問題にも言及している。

(46) James, Corbet, *An Introduction to the English Grammar.* Glasgow: John Robertson and Mrs. M'Lean, 1743.
(47) John Wesley, *A Short English Grammar.* Bristol, 1748.

これら2書はともに地方都市の出版として珍しいものである。

(48) Thomas Merriman, *A Compendious English Grammar.* Reading: C. Micklewright & Comp. for the Author, 1750.

音声論や韻律論はなく、文法習得をもっぱらとする書である。

(49) Anne Fisher, *A new grammar: being the most easy guide to speaking and writing the English language properly and correctly.* Newcastle upon Tyne: J. Gooding for I. Thompson, 1750[2].

本書は大変売れた文法書のようである。1800 年に第 31 版が出ており、[20] Kennedy (1961, p. 208) によると、1801 年に第 32 版、1803 年には J. Wilson による第 3 版が出版されるほどの人気書であった。伝統的な文法観に則った英文法書だが、'false syntax' を流行させたことで有名となった。[21]

以上見てきたように、17 世紀後半の影響を受けて、18 世紀前半には多くの文法書が刊行された。ここでは述べなかったが品詞論に関しての議論も活発となり、基本的にはそれ以前のラテン文法に立脚しながらも、英語を客観的に観察

[20] Alston (1974, I, pp. 25–30) による。
[21] 渡部 (1975, p. 351), Tieken-Boon van Ostade (2006, p. 542) を参照。

して、さまざまな試みがなされるようになってきた。この 18 世紀前半の英文法への高まりを受けて、18 世紀後半ではさらに多くの英文法書が現れるようになる。

3.2 18 世紀後半の状況

第 1 章第 4 節 (p. 15) でふれた Jonathan Swift の建議から 30 年余りが経ち、18 世紀も半ばにかかる頃、国家によらず個人によってアカデミーの役割を果すことになった一人に Samuel Johnson (1709–1784) がいる。彼は 1746 年に英語辞典編集についての『編集概略書』(*A Short Scheme for Compiling for a New Dictionary of the English Language*) を公表し、その中で、英語辞書編纂の目的は英語の語彙の純粋性を保存し、その用法を固定することであると述べている。そして翌 1747 年に、この『編集概略書』を修正した『辞書編集計画』(*The Plan of a Dictionary of the English Language*) を著して、 Chesterfield 伯に献じた。その後、1755 年に Johnson 博士は『英語辞典』(*A Dictionary of the English Language*) を完成させた。その理念は、英語の発音が固定され、その熟達が容易になり、純粋性が保たれて、用法が確立し、永続性が長期に渡ることにあった。18 世紀前半に文人や学者たちによって盛んに議論され、機運が高まっていた国家的なアカデミーは設立されることなく終わったが、その意志は、まず Johnson の英語辞典の中で結実されることになったのである。Robert Cawdrey の英語辞典 (1604) から約 150 年を経て、近代的な英語辞書への始まりとされる。

Johnson の英語辞典には英文法が付されているが、これは 1653 年の Wallis のラテン語による英文典の翻訳であり、独創性に欠けると評されている。しかし、彼の優れた文法観は、英語辞典の「序文」にある文法的範疇の解説から読み取ることができる。彼の英語辞典の出版を契機として、英文法書がさらに数多く出版されていくことになる。

Johnson の英語辞典が出版される 2 年前の 1753 年に、James Buchanan によって次の文法書が著されている。

(50) J. Buchanan, *The Complete English Scholar.* London: A. Millar, 1753.

英語の習得にはラテン文法の助けは不要であることを主張している。その第 3 部が英文法になっている。第 4 章で改めて詳しくとり上げる。

(51) John Ash, *Grammatical institutes: or grammar, adapted to the genius of the English tongue.* Worcester: R. Lewis, 1760.

この文法書もよく売れたようで、1800 年までに 40 版を重ねている。バプテスト教会牧師である彼は、もともと自分の娘のためにこの英文典を書いたが、それが学校向けに使われることになり、さらに以下でとり上げる Lowth の名を冠した *The Easiest Introduction to Dr. Lowth's English Grammar, designed for the use of children under ten years of age* というタイトルで 1766 年に London で出版されるほどまでになった。初学者のための文法書であるということがよく分かるのは、品詞分類である。彼は代名詞、形容詞、冠詞、分詞、感嘆詞をすべて他の品詞と同類に扱い、10 品詞論者となった最初の文法家なのである。

Joseph Priestley (1733–1804) は次の英文法書を上梓している。

(52) J. Priestley, *The Rudiments of English Grammar; adapted to the use of schools. With observations on style.* London: R. Griffiths, 1761.

1798 年までに 9 版を重ねたこの書であるが、[22] 彼はその序文の中で、文法は話し言葉の習慣が基本であり、その言語の正しい基準であり、この習慣が規則を設定するには十分であると述べている。本論が約 50 ページ、注釈 ('Notes') と注意 ('Observations') が約 80 ページある。本論では語形論・統語論・韻律論・修辞法をとり上げ、その頃の文法書に多く使われている問答形式で各項目が論

---

[22] Alston (1974, I, pp. 40–41) による。

じられている。注釈と注意では、各品詞・文法範疇・合成・派生・呼応などがとり上げられている。彼の文法の取り扱いとしては、(i) 文法範疇を設定して、独自の定義を与えている、(ii) 文法教授を規則に基づいて行い、実際の慣用を記述している、(iii) 有名な作家（たとえば Shakespeare, Addison など）からの引用例が多い、(iv) 英文法の解釈にフランス語からの影響という要因を述べている、などである。 Priestley は自然科学者として有名であり、その科学者としての観点から、英語の事実を観察することによって、規範を導き出そうとした。規則としての文法では説明がつかない事象については慣用という扱いとし、話し言葉の慣習が唯一の基準であるというのが彼の言語観であった。

上記 (52) の文法書の 1 年後に、 Priestley は次の書を出版している。

(53) J. Priestley, *A Course of Lectures on the Theory of Language, and Universal Grammar.* Warrington: W. Eyres, 1762.

この書は上述した文法書の教授用資料として著されたものであり、序論と 19 の講義からなっている。言語は技術であり、その規則は我々を導くように考えられたものであり、人間にとって必須のものだと述べている。文法は技術の規則と原理を含むものであり、その規則は言語を広く正確に理解させるのに有効であると説明している。彼は科学者としての公平な立場から良識的に論じており、教育者としての卓見を示している。

この Priestley の書が著された 1762 年に、のちにオックスフォード主教にまでなった Robert Lowth (1710–1804) が有名な文法書を著した。

(54) R. Lowth, *A Short Introduction to English Grammar with Critical Notes.* London: J. Hughs for A. Millar, and R. & J. Dodsley, 1762. [23]

[23] Alston (1974, I, pp. 42–48) によると、1800 年までに 45 の版が出版されており、1811 年にはアメリカの Massachusetts 州 Cambridge でも出版されている。

この文法書は序論のあと、10 の区分に分けられて各項目が説明されている。最後の 'Sentence' を扱う部分が最も多く、全体の 3 分の 1 の分量を占めている。序文で Lowth は、過去 200 年の英語と文法の歴史を振り返りつつ、英語の不備を指摘しながら、どのような言語でもその文法の主要な意図は、その言語で適切に表現できるようになることを教え、語法や構文の正否を判断することを可能にすることだと述べている。そして、自国の英文法を学ぶことによって、ラテン語やギリシャ語などの古典語を学んだり、フランス語やほかの外国語を学ぶことが容易になるとも述べている。言語に基準と安定を求める時代思潮の中で、 Lowth はそれに適合するような優れた規範を作るべく、この文法書を書いたのである。これは 1755 年に Johnson が彼の英語辞典の中で果たした役割を Lowth は英文法書の中で実現したものである。 Priestley と同じく用例を Shakespeare, Milton, Swift など著名な作家の作品から引用している。

1753 年に上記 (50) を公刊した Buchanan は、1762 年に英文法だけを独立させて、次の書を世に送り出した。

(55) [J. Buchanan], *The British Grammar.* London: A. Millar, 1762.

この書には著者名が記されていないが、その後のいくつかの研究により現在では彼の著作であることが一般に認められている。この書についても第 4 章で改めて詳しくとり上げる。

(56) Samuel Johnson, *An English Grammar. The First Easy Rudiments of Grammar, applied to the English Tongue. By one who is extremely desirous to promote good literature in America, and especially a right English education. For the use of Schools.* New-York: J. Holt, 1765.

先述した『英語辞典』(*A Dictionary of the English Language*, 1755) の編者 Johnson 博士と同姓同名のこの著者はアメリカ人である。この書は全部で 40 頁ほどの小冊子ではあるが、アメリカにおいてアメリカ人が書いたはじめての

英文法書という記念すべき書である。[24]

(57) James Elphinston, *The Principles of the English Language digested: or, English grammar reduced to analogy, 2vols.* London: James Bettenham, 1765.

(58) ——, *The Principles of the English Language digested for the use of schools.* London: W. Bowyer and J. Nichols, 1766.

(57) は James Elphinston (1721–1809) の文法書であり、(58) その簡約版である。どちらも品詞は 8 品詞論をとっており、冠詞は形容詞に入れ、分詞は動詞に入れている。普遍文法の基礎の上に個別文法が成り立つという普遍文法論者でもあった。文法の取り扱う分野を Orthoepy, Orthography, Etymology, Syntax, Prosody の 5 つとしている。

1762 年に著者名を付さずに出版した Buchanan はその 5 年後に、次の文法書を実名入りで出版している。

(59) J. Buchanan, *A Regular English Syntax.* London: J. Wren, 1767.

上記 (52) の 1762 年版と酷似しているため、剽窃の疑いまで持たれた書であるが、その後の研究により (52) の 1762 年版も Buchanan のものであるとされている。この書についても第 4 章で改めて詳しくとり上げる。

(60) William Ward, *A Grammar of the English Language, in two treatises. The first, containing rules for every part of its construction; with a praxis both of true and false English, shewing how the rules are to be applied in resolving the true, and in rectifying the false. The Second, shewing the nature of the several parts of speech and the reasons for*

---

[24] アメリカ人がイギリスで書いたはじめての文法書は 上記(37)の Hugh Jones, *A Short English Grammar* (1724) である。

every part of construction. York: A. Ward for C. Etherington, 1767.[25]

30年以上 public school の校長だった Ward はその経験を生かし、この文法書を著した。実践文法の部分と思弁文法の部分からなるものである。英文法を学ぶことによって、他の近代語や古典語などの学習に役立つと述べており、Wallis や Lowth にも言及している。実践文法の部分では、綴字・発音から始まり、語形論・統語論・韻律論を説明している。思弁文法の部分では名詞と動詞の一般論、一致 ('Concord') の問題と構文について述べている。有名な作家たちの文法違反を指摘し、規範文法の先駆ともなっている。[26]

(61) John Burn, *A Practical Grammar of the English Language.* Glasgow: Archibald M'Lean jun., 1766.

Lowth の文法に倣った規範文法をスコットランドで出版したもので、1810 年に同じく Glasgow で第10版が出版されている。練習問題が各項目に配されて、学習しやすく工夫されている。

同じくスコットランドの Glasgow で出版されたものとしては、次の書がある。

(62) John Bell, *A Concise and Comprehensive System of English Grammar. In two books.* Glasgow: R. & A. Foulis for the Author, 1769.

---

[25] Ward の略歴と本書の解題については前島 (1969, pp. 445–47) に詳しい解説がある。

[26] 彼にはこの書の元版ともいうべき次の大著がある。

An Essay on Grammar, as it may be applied to the English language. In two treatises. The one speculative, being an attempt to investigate proper principles. The other practical, containing definitions and rules deduced from the principles, and illustrated by a variety of examples from the most approved writers. London: Robert Horsfield, 1765.

スコットランドの規範文典としては（61）とともに最初のものとなる。普遍文法に則って、8品詞論を展開している。

Murray に向かう前に、女性で児童教育書を書いた Lady Eleanor Fenn (1743–1813) にふれておきたい。彼女は Mrs Lovechild の名で、以下の文法書を書いている。

(63) Fenn, *The mother's grammar. Being a constitution of the child's grammar. With lessons for parsing.* London, 1798?

(64) ——, *Parsing lessons for young children: resolved into their elements, for the assistance of parents and teachers.* London: E. Newbery, 1798.

(65) ——, *Parsing lessons for elder pupils.* London: E. Newbery, 1798.

(66) ——, *The child's grammar. Designed to enable ladies who may not have attended to the subject themselves to instruct their children.* Dublin: Robert Napper for B. Dugdale, 1799.

(67) ——, *The friend of mothers; designed to assiste them in their attempts to instill the rudiments of language.* London: E. Newbery, 1799.

どの書も子供（あるいはその親）を対象としたものであり、彼女の文法書は大変人気があり、多くの人に影響を与えたようである。[27]

次は Lindley Murray である。

(68) Lindley Murray, *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners: With An Appendix.* York: Wilson Spence and Mawman, 1795.[28]

---

[27] Teaken-Boon van Ostade (2006, p. 553) を参照。

[28] 宇賀治 (1971, pp.391–419) に詳しい解説がある。また、宇賀治 (2012, pp. 122–26) の解題も参照。

アメリカのペンシルバニア生まれで、弁護士をしていた Lindley Murray (1745–1826) は、1784 年にイギリスに渡り、悠々自適の生活を送っていたが、近郊にクエーカーの女学校が建つことになり、その寄宿学校の女教師たちが女学生のために教える適当な英文法書を書いてくれるように彼に頼んできたのであった。もともと自ら出版しようとしたものでもなく、懇願されて書いたものであり、彼自身としてはその女学校の教科書として使用されるくらいに思っていたようであるが、その意に反して、出版されるや大いに反響があり、その後の世界中の英文法書の元になることとなったのである。謙虚な彼は、自分を著者とは呼ばず、編集者 ('compiler') と言い、その英文法書も著作ではなく、編纂物 ('compilation') としている。 Johnson, Lowth, Priestley, Sheridan など先人の著書からいい所をとったものだと彼自身述べている。[29] 出版以来約半世紀にわたって標準的な英文法書としての地位を保ち、約 200 版を数えることとなった。彼は序文で、語は人間の思想を表す記号であり、他人の情緒を認知する媒介となる。記号として、それらが表そうと意図している事物を表す、と述べている。第 1 部では文字論・音節論・綴字法を扱い、第 2 部では語形論と品詞論、第 3 部では統語論を扱っている。第 4 部では韻律論を扱っている。彼自身が編纂物と呼んでいるとおり、この文法書は、それまでの文法家たちの文法を折衷したものである。慣用を無視してまで論理に従うのではなく、最良の作家たちが用い、一般にも使用される言葉を標準的であると考えて編纂したものである。

3.3 Murray の英文典で頂点に達する規範文法

18 世紀の半ばに起こった普遍文法や Johnson の文法論が契機となって、1760 年代には著名な文法書が現れることになった。それから 30 年余りを経て、

---

[29] Murray (1795, p. 5) には次のように書かれている。南雲堂版 (1971) による。

> It is, however, proper to acknowledge, in general terms, that the authors to whom the grammatical part of this compilation is principally indebted for its materials, are Harris, Johnson, Lowth, Priestley, Beattie, Sheridan, Walker, and Coote.

Murray の英文法書へと昇華していき、1586 年に Bullokar が最初の英文法書を世に送って以来 200 年余りで、英語におけるいわゆる規範文法が完成したのであった。この 18 世紀後半の文法家たちが目標としていた英語に対する役割は次のようなものであった。(i) 言語の諸原理を公式化して、それらを規則の形にまとめる。(ii) 文法上の論争点を決着させて、用法上の相違の諸規則を決定する。(iii) 一般的誤謬例を指摘して、言語を矯正し改良する。この (i) は例のアカデミーの設立を具現化したものとなった。(ii) では単に言語の事実を記録するにとどまらず、これに判定を下すことまで意図したのであった。そして (iii) にまで達して、文法上の規則を設定し、文法違反を禁止できるところまでもっていくのがこの時期の文法家に共通した考え方であった。それまでは作家であっても、人によって使用が異なり、一方では認められる用法が、他方では認められないなど、綴り字を含む英文法のさまざまな点が混乱をきたしていた。ロンドンを中心として人口流動が起こり、社会や経済が活性化するにつれて、固定化した階級制度が崩壊し、上昇志向を持つ人々が多くなってくると、その共通基盤として正しい英語を理解し、使えるようになりたいという欲求が起こってくる。また、学校教育が普及してくると、それ以前のごく一部のエリートのための文法学校から、万人に向けてのさまざまな目的の学校が設立されるようになり、そこで教えられる言語は、文法学校でのラテン語など教養のための言語教育ではなく、実地に役立つ英語を教えるようになってきたのである。そのような需要の高まりが英語の辞書や文法書を必要とし、それらを編纂することで英語を固定化し、純化して、規範となることを求めるようになってきたのであった。文人や作家たち、いわば上流階級の人々が求めていた国家的なアカデミー設立は頓挫した形となったが、その意志は中流や下流階級の人々からの切実な欲求によって、いろいろな立場からの文法家が現れ、さまざまな文法書が著されてくることによって、脈々と受け継がれてきたのであった。そして、18 世紀の終わりの 1795 年に元々はイギリス人ではないアメリカ人の Murray が英文法書を「編纂」することによって、それまでの人々の願いが結実することとなったのであった。これ以降は Murray の英文法書をモデルとして、イギリス国内の

みならず、世界中で英文法書が著されるようになる。[30] そして、場合によっては「規範」が過ぎるような文法書も出現することになるのである。18 世紀、19 世紀までは規範的な英文法書を求めていたにもかかわらず、20 世紀になると、いわゆる「科学的な」見方から、そのような規範的な態度が悪いものだと烙印を押されてしまい、それから半世紀以上は、否定的な意味を付与された「規範文法」として、 Murray の文法書を始めとする英文法書は学問研究の対象から外されていくことになったのであった。

---

[30] Murray は、この 1795 年の『英文法』を基にして、その 2 年後に懇請されて、児童用の簡約版（*An abridgment of L. Murray's English Grammar, with an appendix, containing an exemplification of the parts of speech.*）を出版している。そして、この簡約版の翻刻版が 70 年後の幕末の日本で出版されている。『モルレイ氏著　英吉利小文典』がそれであり、翻刻者は渡部温、発行は慶応 2 年（1866年）か慶応3年（1867年）と推定されている。詳細は宇賀治（1971, pp. 412–19）を参照。

第 3 章　18 世紀の規範文法家 James Buchanan

本章では 18 世紀の規範文法家である James Buchanan の研究の意義、彼の略歴と著作を見ていくことにする。

1. James Buchanan 研究の意義

第 2 章で考察したように、英文法史上、最初の英文典は William Bullokar が 1586 年に著した *Pamphlet for Grammar* とされている。これ以降約 200 年間、さまざまな英文法が刊行されていくことになる。とくに 18 世紀は、数多くの英文典が公刊された時代である。その 18 世紀前半、匿名氏により『文法戦争』(Anonymous, *Bellum Grammaticale: or, The Grammatical Battle Royal, in Reflections on the Three English Grammars,* 1712) が著され、John Brightland, James Greenwood, Michael Maittaire の 3 名の文法家が揶揄された。それから半世紀後、また新たな 3 名の英文法家が登場する。すなわち、のちにオックスフォード主教ともなる Robert Lowth、[1] 科学者として有名な Joseph Priestley、そして本論文で考察する James Buchanan の 3 名である。Lowth はその社会的地位から、その後の英文典に大きな影響を残し、Priestley は科学者としての観察から独自の英文典を世に問い、19 世紀以降、ともに多くの研究対象となっているのに対し、Buchanan はイングランド出身ではないこともあってか、この二人ほどの注目は集めていない。

しかし、いわゆる「規範文法」がなぜ 18 世紀にこれほど隆盛となってきたのか、どのような人々がどのような目的で規範文法を必要としていたのかを、当時の教育や社会階層の変化、社会の流動性などの観点から改めて問い直してみる時、実践的な学校教師であった Buchanan を研究することは意義あることと思われる。18 世紀の英文法史に造詣の深い Tieken-Boon van Ostade (2006, p. 553) は、Lowth のみならず、Buchanan などの文法家ももっと注目される

---

[1] Lowth は 1766 年から 1777 年までオックスフォード主教、その後ロンドン主教にも任命された。1783 年にはカンタベリー大主教も任命されるが、健康上の理由により、これは辞退している。

べきであると述べている。この第 3 章では、実践的英語教育者であった Buchanan を見ていく。

2. James Buchanan について

James Buchanan は、生没年など詳しいことはわかっていない。 *Oxford Dictionary of National Biography* (*ODNB*, 2004) にもその記載はない。後述するように、生前最後の著書が 1770 年に上梓され、没後出版の書が 1773 年であるから、没年はその間であると推測される。生まれはスコットランドで、Surrey の Loughbury House near Camberwell で教師をしたり、第 3 節で述べる発音辞典や英文法書を書いていることが知られているくらいである。 T. G. Smollett (1721–1771) の *The Adventures of Roderick Random* (1748) の中では、イングランド人に英語の用法を教えるスコットランド人として風刺的に描かれている。[2] また、 *The English Dictionary* を編纂した Samuel Johnson は半ば冗談交じり ('in semi-jocular humor') に、 'he was the only man of genius his country ever produced' 「彼の地（スコットランド）が生んだ唯一の天才的な人」と呼んでいる。[3] このように断片的な情報しか残っていない Buchanan であるが、著書をいくつか残しており、それらから彼の英語に対する考え方や態度が読み取れるのである。次の第 3 節では、彼の残した著作物を概観していく。

---

[2] McKnight (1968, p. 380) による。 Smollett の *Roderick Random* の第 14 章の冒頭に描かれているスコットランド出身の語学学校を経営する英語教師が Buchanan である。以下、その部分を引用する。

> This gentleman, who had come from Scotland three or four years before, kept a school in town, where he taught the Latin, French, and Italian languages; but what he chiefly professed was the pronunciation of the English tongue, after a method more speedy and uncommon than any practiced heretofore, and, indeed, if his scholars spoke like their master, the latter part of his undertaking was certainly performed to a title.

[3] McKnight (1968, p. 380) による。

3. James Buchanan の著作と解題

現在、彼の著作として知られているものは、年代順に以下の 9 冊である。正式なタイトル名と出版社名、簡単な解題を付す。

(1) 1753. *The Complete English Scholar. In Three Parts. Containing a new, short, and familiar Method of Instructing Children, and Perfecting Grown Persons in the English Tongue, and of Learning Grammar in general, without the Help of Latin. In which the Various Lessons are adapted to convey the ruling Principles of Life, and mend the heart at the same time that they enlighten the Understanding.* London: A. Millar.

(1) は現在までにわかっている Buchanan が英文法を記した最初の書物である。全部で 3 部に分かれ、 Part I は音節と綴り字を扱っており、それぞれの説明の後で豊富な練習問題をさせることによって、その定着を図ろうとするものである。続く Part II はさまざまな種類の読み物や雑誌から抜粋した読本となっており、 Part I で学んだ学習者にさらに進んだ学習を促そうとするものである。 Part III は副題に 'An English Grammar' とあり、英文法を説明している。詳細については第 4 章で改めてふれることにする。

(2) 1757. *Linguae Britannicae Vera Pronunciatio: or a New English Dictionary. Containing I. An Explanation of all English Words used by the best Writers, the various Senses of each Word being distinctly pointed out by Figures 1, 2, 3, &c. II. The Language from which each Word is derived. III. The part of Speech to which it belongs. IV. A Supplement of upwards of 4000 proper Names. In which every Word has not only the common Accent to denote the Emphasis of the Voice, but, in order to a just Pronunciation, every Syllable is marked with a long or short Accent to determine its Quantity, and the quiescent Letters, various sounds of Vowels, &c. are so distinguished, that any Person, Native or Foreigner, who can*

but read, may speedily acquire an accurate Pronunciation of the English Language. To the whole is prefixed. A Dissertation on the species of Sounds, &c. with practical Observations on the various Powers and Formations of the Letters. A Work intirely new, and designed for the Use of Schools, and of Foreigners, as well as natives who would speak, read, and write English with Propriety and Accuracy. London: A. Millar.

(2) はタイトルの始めこそラテン語になっているが、本文は全て英語で書かれた英語辞典である。内容は表題にあるとおり、(I) は著名な作家が用いている英単語の説明、(II) はそれぞれの語がどの言語に由来するか、(III) はそれぞれの語の品詞、(IV) は 4000 の固有名詞を扱っている。最初に 'Preface' が 16 頁にわたっており、その次に、個々の音の説明とその結びつき、綴字、派生語、複合語の説明を行ったあと、ABC 順に英単語の発音とその説明を与えている。そして最後に補遺 ('Supplement') として固有名詞の発音とアクセントの一覧が掲載されている。 Alston (1974, V[4], p. 41) によると、ラテン語名を省いた新しい版が 1769 年に London の G. Keith, J. Johnson, J. Payne [et al] から出版されており、さらに同年の 1769 年に表題を *The New Royal English Dictionary* と変えた海賊版[5] が、 Mr. Gordon and others 著で、London の A. Miller から出版されている。

(3) 1757. *A New Pocket Book for Young Gentlemen and Ladies: or, A Spelling Dictionary of the English Language. Wherein the exact Orthography, just Quantities of Syllables, proper Accent, true Pronunciation, Number of Syllables contained in each Word, the Part of Speech to which it belongs, and the Language from which it is derived, are exhibited at one View.*

---

[4] Alston (1974, V) は副題として 'The English Dictionary' とあり、 (2) が英語辞典として分類されていることがわかる。
[5] Alston (1974, V, p. 41) に 'A pirated edition' とある。

To which is subjoined, a Catalogue of the most usual Christian names of Men and Women. London: Baldwin.

(3) は上記 (2) と同じ年に出版されたもので、(2) の要約版となっている。'Preface' もなく、最初に 'General Observations' として、アルファベット文字それぞれの発音の仕方を母音と子音（厳密には母音字と子音字）に分けて 10 頁にわたって説明している。それに続いて、'A Looking-Glass for Young Gentlemen and Ladies'（「若者と女性のための鏡」）というタイトルで、ABC 順に各単語の発音とアクセント、音節数、品詞、起源となる言語が記されている。意味は記載されていない。その後に、'A Catalogue of the most usual Christian Names of Men' と 'The Christian Names of Women' というタイトルで、人名を別立てとしてとり上げ、それぞれ ABC 順に発音とアクセント、音節数が簡単に記されている。Alston (1974, IV[6], p. 100) によると、その後の版は記録されていない。

(4) 1759. *The New Universal English Dictionary of Words, and of Arts and Sciences. With their Explications and Etymologies from the Ancient British, Teutonick, Dutch, Saxon, Danish, French, Italian, Spanish, Latin, Greek, Hebrew, Chaldee, &c. each in its proper Character. Also an Explanation of Hard and Technical Terms, with Accents directing to their proper Pronunciation, shewing not only the Orthography and Orthoepia of the English Tongue, but likewise the Rise and Improvements of all the Arts, Liberal and Mechanical, from the most remote Antiquity to the Present Time. Illustrated with two Hundred and Sixty Cuts, giving a clearer Idea of those Figures, than can be comprehended by Verbal Descriptions. Likewise a Collection and Explanation of Words and Phrases used in our ancient Charters, Statutes, Writs, Old*

---

[6] Alston (1974, IV) は副題として 'Spelling Books' とあり、(3) は (2) と異なって分類されていることがわかる。

Records, and Processes at Law. A Work useful for such as would understand what they Read and Hear, Speak shat they Mean, and Write true English. To which is added, a Dictionary of Cant Words, the knowledge of which has prevented many Robberies. By N. Bailey. The Fourth Edition. Carefully Corrected by Mr. Buchanan. And published as a Complete Supplement to all other English Dictionaries. London: James Rivington and James Fletcher.

(4) は正確には Buchanan の著書ではなく、先人の著作を改訂したものである。つまり、Nathaniel Bailey が 1721 年に、*An Universal Etymological English Dictionary: comprehending the derivations of the generality of words in the English tongue, either antient or modern, from the antient British, Saxon, Danish, Norman and modern French, . . .[&c.]* (London: E. Bell, J. Darby, A. Bettesworth [et al.], 1721) [7] を刊行し、その後 1727 年には、増補版 *The Universal Etymological English Dictionary: in Two Parts: Containing I. An additional collection. . . II. An orthographical dictionary, shewing both the orthography and orthoepia of the English tongue, . . . Volume II. . .* (London: T. Cox, 1727) [8] を出版した。(4) はその増補版の第 4 版であり、その第 2 巻である正字法辞典の改訂を Buchanan が行ったのである。3 頁の 'Preface' (序文) のあと、英語、サクソン語、ギリシャ語、ヘブライ語のアルファベット一覧表を示し、それから本文の 'A New Etymological and Explanatory English Dictionary' を ABC 順に著している。そのあと、'A Collection of the Canting Words and Terms, both ancient and modern, used by Beggars, Gypsies, Cheats, House-Breakers, Shop-Lifters, Foot-Pads, Highway-Men, &c.' つまり「隠語辞典」をやはり ABC 順に掲載している。

---

[7] Alston (1974, V, pp. 16–22) によると、1800 年までに 33 の版が出版されている。

[8] Alston (1974, V, p. 22) に次の付記がある。

This is a supplementary volume, and enjoyed a separate publishing existence from the 1721 dictionary.

Alston (1974, V, pp. 22–23) によると、本書は Buchanan が改定したあとも第7版まで出版されており、元の辞書ともどもよく売れたようである。

(5) 1762. *The British Grammar: or, an Essay, in Four Parts, towards Speaking and Writing the English Language Grammatically, and Inditing Elegantly. For the Use of the Schools of Great Britain and Ireland, and of Private Young Gentlemen and Ladies.* London: A. Millar.

(5) は (1) の *The Complete English Scholar* の第3部（英文法の部）を敷衍したもので、同時期の Robert Lowth や Joseph Priestley の文法書にも引けをとらない書となっている。タイトル頁には著者名がなく、次頁の献辞にも最後に 'The Author' と書かれているのみである。その意味では著者不詳の文法書ということになる。そして、その後に出版された (7) が (5) の内容と酷似しているため、(7) の著者 Buchanan（この (7) には著者名が記されている）が (5) を剽窃したのではないかと疑われることになった。[9] しかし、Kennedy (1926, pp. 388–91) の研究によって、現在では広く Buchanan の著作であるとされる。詳細については第4章で改めてふれることにする。

(6) 1766. *An Essay towards Establishing a Standard for an Elegant and Uniform Pronunciation of the English Language, throughout the British Dominions, as practiced by the Most Learned and*

---

[9] Kennedy (1961, p. 209) には次の引用がある。

> "A most egregious plagiarism, borrowed from the British Grammar, half the volume copied verbatim." *Wells.*

Kennedy の引用は完全には正確ではない。実際には、Wells が 'W. H. W.' の名前で *The Common School Journal*, Vol. III. (1841, p. 231) に後述の (7) について述べたものであり、次のような文言となっている。

> Buchanan's Grammar is a most egregious plagiarism. Without any direct acknowledgment in his preface, he has borrowed the plan of his work, with very little modification, from the British Grammar; and more than half of the volume is copied, verbatim, from that treatise.

Polite Speakers. A Work entirely new, and whereby every one can be his own private Teacher. Designed for the Use of Schools, and of Foreigners as well as natives; especially such whose Professions engage them to speak in Public. London: Edward and Charles Dilly.

(6) は表題の下に 'By James Buchanan' と著者名が記され、そのすぐ下には 'Author of the British Grammar, &c.' ともあり、(5) の著者であることがここからも確認できる。この書は純粋な発音辞典であり、[10] その意味では (3) の *A New Pocket Book for Young Gentlemen and Ladies* 以来の Buchanan の発音綴字辞典である。地域によって異なる発音があり、正しい発音の妨げとなっているため、(3) の辞典を出版したが、その後の研究により、さらにその精密度を上げたと 'Preface' では述べている。そのあとの 'Introduction' ではアルファベット文字とその発音との関係、アクセント、強調、詩の読み方などについて説明を行なった後、本文である発音辞典へと入る。ABC 順に単語を並べ、彼の考案した符号をアルファベットに付すことによって、発音とアクセントがわかるようにしている。意味は記されていない。 Alston (1974, VI, p. 100) には初版しか記載がない。

(7) 1767. *A Regular English Syntax. Wherein is exhibited, the whole Variety of English Construction, properly exemplified. To which is added, the elegant Manner of arranging Words, and Members of Sentences. The whole reduced to Practice, for the Use of private young Gentlemen and Ladies, as well as of our most eminent Schools.* London: J. Wren.

(7) は (5) の出版から 5 年後に出された文法書であり、上述したとおり、(5) を剽窃したのではないかと疑われたが、どちらも Buchanan 自身の著作物であり、(5) をさらに発展させたものとなっている。それはタイトルにある通り、'Syntax' (文構造) を本書の中心に据え、数多くの練習問題を解かせることに

[10] Alston (1974, VI) では 'Pronunciation' の項目に分類されている。

より英文法を学ばせようとするものである。 Alston (1974, I, pp. 52–53) によると、1792年までに7つの版が出版されており、1780年には 'From the London edition' として、米国 Philadelphia の Styner and Cist から出版されている。本書についても、第4章で改めて詳細に論じることにする。

(8) 1770. *A Plan of an English Grammar School Education. With an introductory Inquiry, whether by the English Language alone, without the Embarrassment of Latin and Greek, the British Youth, in general, cannot be thoroughly accomplished in every Part of useful and polite Literature and qualified to make a more early, advantageous, and elegant Figure in Life. Addressed to the serious consideration of every sensible Parent and Teacher in Great Britain.* London: E. and C. Dilly. Edinburgh: A. Kincaid and J. Bell. [11)]

(8) は (1) で述べた主張——英語の修得にはラテン語の文法の助けは不要とする主張——をその後の実践教育の経験に基づいて、さらに敷衍した著作である。国語としての英語、雄弁術、発音、修辞学、英語教育をとり上げて、それぞれについて具体的に述べている。 Alston (1974, X, p. 54) によると、初版のみのようである。 Buchanan の生前の著作物としてはこの書が最後となっている。

(9) 1773. *The First Six Books of Paradise Lost, rendered into Grammatical Construction; the Words of the Text being arranged, at the bottom of each Page, in the same natural Order with the Conceptions of the mind; and the Ellipsis properly supplied, without any Alteration in the Diction of the Poem. With Notes Grammatical, Geographical, Historical, Critical, and Explanatory. To which are prefixed Remarks on*

---

11) Alston (1974, X, p. 54) には Edinburgh 版が掲載されているのみである。London 版は Eighteenth Century Collections Online (ECCO) の Print Edition による。(入手済み)

Ellipsis and Transposition, Exhibiting an early Method of construing, and reading with Judgment, either Prose or verse. Designed for the Use of our most eminent Schools, and of private Gentlemen and Ladies, and also of Foreigners of Distinction, who would read this admirable Poem with Unstanding and Taste. Edinburgh: A. Kincaid and W. Creech, and J. Balfour. (Posthumous).

(9) は、のちの Earl of Southerland 夫人となった Elizabeth (1765–1839) を5歳～6歳の間 Buchanan が家庭教師をしていた関係から、彼の死後、その未亡人によって Elizabeth に捧げられたものである。[12] 表題のすぐ下に、'By the late James Buchanan, Author of the British Grammar, a Regular English Syntax, &c.' とあり、この著書から Buchanan が 1773 年以前に亡くなったことだけは確かである。

4. James Buchanan の英語研究の流れ

Buchanan は、英文法書として (1) *The Complete English Scholar*, (5) *The British Grammar*, (7) *A Regular English Syntax* の 3 点を公刊している。Alston (1974, I) によると、(1) は 'pronunciation, spelling, grammar, syntax' からなり、(5) も同様である。(7) になると発音と綴り字の部分が省かれ、正誤問題によって学習を促す工夫がなされている。一方、発音辞典としては (2) *Linguae Britannicae Vera Pronunciatio: or a New English Dictionary*, (3) *A New Pocket Book for Young Gentlemen and Ladies: or, A Spelling Dictionary of the English Language*, (6) *An Essay towards Establishing a Standard for an Elegant and Uniform Pronunciation of the English Language* の三書を編纂している。(2) はイギリス人のみならず外国人に対しても正しい発音を教えることを目的とした発音辞典であり、音の長短、単音と重音の区別、黙字など

---

[12] 著者名のすぐ下に以下の記述がある。

The Manuscript was left with Dr James Robertson, Professor of Hebrew, who has published it for the benefit of Mr Buchanan's Widow.

を工夫している。(3) は (2) を要約したものである。さらにその 9 年後、それまでのロンドン英語の観察から著した発音辞典が (6) である。(8) の *A Plan of an English Grammar School Education* は (1) で述べた主張について、一方では (2), (3), (4), (5), (6), (7) と文法や発音に関する著作を世に問いながら、また一方ではおそらくそれらの著作を教育の中で実践しながら、研究を重ねていくことによってまとめ上げた著作である。

Buchanan が残した著作は必ずしも多くはないが、そこから以下のような大まかな流れがあるように思われる。スコットランド生まれの彼は、当時イギリスの中心都市として発達しつつあったロンドンの英語を英語習得のための標準とみなし、また教育で優勢であったラテン語教育と英語教育を分離しようと考えた。1753 年の (1) ではそのような観点から、発音・綴り字から文法に至るまで広く扱っている。その後、1757 年に (2) と (3) を、また、1766 年に (6) をそれぞれ編纂して、綴り字と発音について自らの考えを発展させている。一方、文法は 1762 年に (5) を、1767 年に (7) を刊行し、とくに (7) では正誤問題などの工夫を凝らすことにより、文法面に対する彼の考えがさらに敷衍されている。1770 年に著された (8) はそれまでの英語教育の集大成とも言えるもので、1753 年の (1) の主張を、その後の 17 年間の発音や綴り字、文法などを実践的に教授した経験からまとめたものとなっている。当時一般的であったラテン文法の構成（発音、綴り字、文法）から出発した彼は、それに飽きたらず、発音辞典の独立を意図し、また、文法書に正誤問題を付すなどして、実践的な語学習得を目指したのではなかろうか。Buchanan は当時の教育や社会階層の変化を肌で感じ取り、スコットランド出身者としての経験から、イギリス人や外国人に対する英語教育はいかにあるべきかを実践的な教育から考察していったものと考えられるのである。

第 4 章　James Buchanan の文法

James Buchanan は全部で 3 冊の文法書を残している。この章では、Buchanan の文法に対する考え方の原点と言える 1753 年に発行された *The Complete English Scholar*, その文法を展開して独立した文法書として出版された 1762 年の *The British Grammar*, そしてそれをさらに発展させた 1767 年発行の *A Regular English Syntax* を発行年代順に取り上げ、その比較対照を行なう。

1. *The Complete English Scholar* (1753) の文法

目次は以下の通りである。本書に付されている目次は 'The Contents.' 以下の部分であるが、全体を俯瞰するために、(Title) の頁から記しておく。

(Title)
Dedication.
The Complete English Scholar. Part I.
Preface.
The Contents.
The Complete English Scholar. Part the Second.
The Complete English Scholar. Part the Third. An English Grammar, By Way of Question and Answer.
Part the Third. An English Grammar, In Four Parts. Of Grammar and its Parts.
Part I. Of Orthography.
Chap. I. Of the Letters.
§1. Remarks on the Powers, Properties, and Pronounciation [*sic*] of the Vowels.
§2. Of Diphthongs or Double Vowels.
§3. Of Triphthongs.
§4. Of the Single Consonants.
§5. Of the Double Consonants.
Chap. II. Rules for the True Spelling, and Right Division of the Syllables of Long Words. / Of the Prepositions that are Used in the Composition of English Words. / Of Stops or Points, and Marks or Notes. / Of Capital, or Great Letters.
Part II. Of Etymology.
Chap. I. Of the Eight Parts of Speech.
Chap. II. Of a Noun.

Chap. III. Of Substantives Proper and Common.
§1. Of Numbers.
§2. Of the Genitive Case.
§3. Of Gender.
§4. Of the Articles.
§5. Of the Comparison of Adjectives.
Chap. IV. Of the Pronouns.
Chap. V. Of Verbs.
Chap. VI. Of the Participle.
Chap. VII. Of the helping Verbs Which are Defective. / Of the Use and Significancy [*sic*] of the Helping Verbs Do, Will, Shall, &c.
Chap. VIII. Of the Perfect helping Verbs Have, and Am or Be.
Chap. IX. Of Irregular Verbs.
Chap. X. Of the Verb Active and Neuter.
Chap. XI. Of the Adverb.
Chap. XII. Of a Conjunction.
Chap. XIII. Of the Prepositions.
Chap. XIV. Of Interjections.
Chap. XV. Of the Derivation of the Parts of Speech.
Part III. Of Syntax.
Part IV. Of Prosody.

1.1 James Buchanan が著したものの中で、現存する一番古い英文法は、1753年に出版された *The Complete English Scholar* である。ただし、独立した文法書ではなく、総合的な英語学習書の一部として書かれたものである。Alston (1974, IV, p. 89) によると 1753 年に刊行したものだけとなっている。正式な書名として、表紙には

> The Complete English Scholar. In Three Parts. Containing a new, short, and familiar Method of instructing Children, and perfect grown Persons in the English Tongue, and of Learning Grammar in general, without the Help of Latin. In which the various Lessons are adapted to convey the ruling Principles of Life, and mend the heart at the same time that they enlighten the Understanding.

とあり、著者名として 'By James Buchanan' とある。出版社名は 'London, Printed for A. Millar, in the Strand.' となっており、出版年は 'MDCCLIII', つまり 1753 年となっている。表紙の次には 1 頁の 'Dedication' の頁があり、 Buchanan のほかの英文典の献辞とは違い、

当時のカンタベリーの大主教 Thomas Herring に献呈されている。その献辞は以下の通りである。

To The
Most Reverend Father in GOD
THOMAS,
By Divine Providence
Lord Archbishop of Canterbury,
Primate and Metropolitan of all England,
The Complete English Scholar
Is, with the most profound Respect,
Most humbly dedicated by,
May it please Your Grace,
Your Grace's most obedient,
Much obliged,
And most devoted Servant,
James Buchanan.

1.2 本書は大きく 3 部に分かれている。第 1 部 Part I は綴り字と発音を取り扱う部門で、1 音節語から多音節語までを段階を踏んで学習させるようになっている。それぞれの音節に数多くの練習問題を付して、着実に身に付けさせるように配慮されている。第 2 部はそれまでに身に付けた基本的な英文をさらに発展させることを目的とする読本の部門である。英文を正確に読むことができるように、 *Spectator, Tatler, Guardian, Mr. Rollin's Method of Teaching and Studying the Belles Lettres* などの雑誌や書籍、 Alexander Pope (1688–1744), John Dryden (1631–1700) などの諸作品、あるいは歴史書や地理書などから、広く集められた読本となっている。世間一般に知られている雑誌や著名な文人の作品などを収録することにより、上質な文章を学ばせながら、同時に教養を身に付けさせる教育的配慮ともなっている。そして第 3 部が英文法を扱ったものとなっている。

1.3 第 3 部英文法について、 Buchanan はその 'Preface' (序文) で次のように述べている。

The third Part or Volume is an English Grammar, in four Parts.

In that most necessary Part, Orthography, are many new and useful Observations, and also Rules for Spelling, intirely [*sic*] omitted by other Grammarians. And amongst other Improvements in Etymology, there are a few succinct Rules, which teach, by the Terminations of Words, the Etymon of most of the English Language, as derived either from the Greek, Latin, or French, which will in a great measure supply the want of Latin to the Fair Sex, and prove very advantageous to Boys who are to be put to Trades, and Persons of riper Years, who have not been taught the learned languages. (1753, p. xii)

上述したように、英文法の部分は総合的な英語学習書の一部として書かれたものである。そして、英文法の領域としては4部門あり、もっとも必要な部門が 'Orthography' （正書法）である。 Buchanan は正書法を重視しており、さまざまな知見を織り交ぜて、その規則を説明している。第3章で見たように、彼はこの部門をさらに研究して、のちに綴字辞典や発音辞典を個別に出版するようになる。

次に、'Preface' の後半部に書かれているように、女性や子供、年長者などにも配慮して、ラテン語などを学んでいなくても英語が学べるように書かれていることがわかる。そして、品詞については、それまでの古典語であるギリシャ語やラテン語の品詞を踏襲することとし、それは少年たちがその後ラテン語を学ぶときにも容易に進めていけるようにということである。それは、当時流行していた普遍文法主義の影響から、他の言語にも同様の品詞があるからであると説明している。

また当時の文法学校の弊害について、 Buchanan は、以下のように強い調子で述べている。

By what has been said, and the Testimony of Numbers, it is evident that learning Latin does not improve Boys in the English orthography. Does it them procure them a good Style? No. Mr. Locke and the Spectator observe, That Men educated to Letters, who have threshed hard at Latin for nine or ten Years together, are oftentimes very deficient in their own Language. (1753, p. xiv)

ラテン語を学んでも英語の正書法を伸ばすことにはつながらない、良い文体を得ることにもならないと言っている。10 年以上もラテン語を学んだ教養ある人でも、英語が不完全な場合がよく見受けられるからである。

将来、教会関係の仕事に就く者にとっては、ギリシャ語やラテン語の知識が教養として大事であることは認めているが、大多数の人にとって、自国の言語である英語を身に着けていないのは不幸であるとも述べている。

> The far greater Part of Mankind have need of no other Language than their own, to carry on them several Arts and Professions, and it would be very unhappy for them, if they could come at the Knowledge of their own Tongue no sooner, than by a Study of ten or eleven Years in these learned Language. (1753, p. xiv)

そして、この本を活用することにより、他のどんな手助けも費用もいらず、完璧に英語を学ぶことができるとまで述べている。

> As this Book may be thought sufficient for a thorough English Education, without the Help, or Expence of any other, I proposed that it should be bound up in three several Parts. 1. That children might not spoil the second or third Volume, 'till they were perfect in the first. 2. Because they will have Occasion to carry home the second Volume every Night to spell so much off against next morning, and likewise the third, to get the Grammar by heart, and so being thus bound, they will be the more portable. (1753, p. xvii)

1.4 第 3 部は全部で 82 頁となっている。これはこの本全体の 14%程度であり、それほど多くはない。(一番多いのは第 2 部「読本」の 331 頁で全体の半分以上を占めている。) 第 3 部のタイトルは、'Part the Third. An English Grammar, in Four Parts. Of Grammar and its Parts.' となっている。基本的には問答形式をとっており、その最初は、文法の定義についての問答である。

Quest. What is Grammar? *Answ.* Grammar is the Art of expressing the Relations of Words in Constructing, with due Quantity in Speaking, and Orthography in Writing. (1753, p. 477)

'Grammar'(「文法」)の定義を問答形式で問い、文法とは、しゃべったり、綴ったり、書いたりするときに、文構造での語の関係を表現する技術のことであると答えることによって、文法の定義を会得させようとしている。これは、Buchanan の文法観をよく表している問答であり、これ以降の2つの文法書でもほとんど同じである。

Grammar is the Art of expressing the Relations of Words in Construction, with due Quantity in Speaking, and Orthography in Writing. (*The British Grammar* [1762], p. 1)

Grammar is the Art of expressing true Orthography in Writing, just Quantity in Speaking, and the proper Relations of Words in Construction. (*A Regular English Syntax* [1767], p. 1)

このことについては後ほどふれることにする。

この定義に続いて、文法の目的とその射程範囲が記されている。

The English Grammar teaches to speak and write the English Language rightly.

How many Parts has Grammar? *A.* It has four, Orthography, Etymology, Syntax, and Prosody. (1753, p. 477)

英文法とは英語を正しく話し、書くことを教えるものであると定義している。また、文法の扱う領域として、'Orthography'(「正書法」)、'Etymology'(「語形成」)、'Syntax'(「文構造」)、'Prosody'(「韻律」)の4部門があるとする。(なお、'Etymology' は後述するように「語源」ではなく、「語形成」である。)当時の文法家が扱う文法は、発音や文字なども含む広範囲なものとなっている。これはその後の2冊の文法書でもほぼ同様で

ある。以下、参考までに記しておく。

> What does the English Grammar teach? The English Grammar teaches to speak and write the English language rightly. How many Parts has Grammar? Grammar has four Parts, Orthography, Prosody, Etymology, and Syntax. (*The British Grammar* [1762], pp. 1–2)

> An English Grammar should teach to speak and write the English Language correctly.
> How many Parts has Grammar? Grammar has four Parts, viz. Orthography, Prosody, Etymology, and Syntax. (*A Regular English Syntax* [1767], pp. 1–2)

若干の表現の違いはあるが、基本的には Buchanan の考え方にぶれがないことがわかる。ただし、1753 年版の本書では 'Prosody' を 4 部門の最後で説明しているのであるが、綴り字との関係からであろうか、その後の 2 つの文法書では 2 番目に変更している。これも自ら教育で実践してみての結論なのであろう。

このあとに 'Orthography' (「正書法」)、'Etymology' (「語形成」)、'Syntax' (「文構造」)、'Prosody' (「韻律」) の 4 部門それぞれの簡単な説明が施されている。

> What does Orthography teach? *A.* it teaches how to spell or write every Word with proper Letters. (1753, p. 477)

正書法は正しい文字を使って、あらゆる語の綴り方を教えることである。

> What does Etymology teach? *A.* it teaches the Exposition or Kinds of Words, their Derivation Change, Analogy or Likeness to one another in any Language. (1753, p. 477)

'Etymology' は現代では「語源」を扱う分野であるが、ここでは語の種類や派生形、類似した形などを取り扱う語形成を教えるものとなっている。

> What does Syntax teach? *A.* It teaches the right placing or Joining of Words together in Sentences. (1753, p. 477)

'Syntax' は現代では「統語論」と訳されることが多いが、ここでは初歩の文法という意味で「文構造」と訳す。文構造は文の中でそれぞれの語を正しく配列し、つなぎ合わせることを教えるものである。

> What does Prosody teach? *A.* Prosody teaches the Accents and Quantities of Syllables, and the Art of making Verses. (1753, p. 477)

韻律は、音節中のアクセントの位置や音節数を教え、また詩を作る技術も教えるのである。

文法が取り扱うこれら4部門は、その後の文法書においても基本的には変わることはない。以上のことから、 Buchanan にとってあるべき文法の姿は1753年の時点ですでに確立されていたと見るべきではないだろうか。その後は教育の中で実践を行い、見直したり、修正を加えながら、よりよい文法書へと改良していったと考えられる。以下、それぞれの部門を詳しく見てみよう。

1.5 Part I は 'Of Orthography' と題して、2つの Chapter に分かれている。 Chap. I は 'Of the Letters' 、つまり文字についてである。文字の定義としては、この点はその後の文法書でもほぼ同様である。文字と音との関係については説明がないまま、次のように説明している。

> How are they divided? *A.* Into Vowels and Consonants. What is a Vowel? *A.* A Vowel is a Letter, which makes a full and perfect Sound of itself, without adjoining any other Letter to it. (1753, p. 478)

文字は母音と子音からなり、母音とは他の文字とつなげなくても、独立して完全な音を表すものであると述べているので、ここでの 'Vowel' と 'Consonant' は「母音」と「子音」ではなく、「母音字」と「子音字」を表していることになる。その後、彼は綴り字・発音辞典を出版しているので、自ら文字と音の関係に修正を加えていったことがわかる。このことについても後述する。

Chap. I は次の 5 つの Section (§) に区分されている。すなわち、§1 は 'Vowel' (「母音」の性質と発音)、§2 は 'Diphthong' (「二重母音」)、§3 は 'Triphthong' (「三重母音」)、§4 は 'single Consonant' (「単子音」)、§5 は 'double Consonant' (「二重子音」) をそれぞれ扱っている。その説明は、たとえば §1. 'Vowel' (「母音」の性質と発音) の節では、'How many Sounds has the Vowel (a)? *A.* It has three.' (「母音字 'a' はいくつの音が表せるか。」「3 つの音が表せる」)) と説明している。以下 §5. 'double Consonant' (「二重子音」) まで同じようになっている。1〜5 の各節とも、説明は簡潔なものとなっている。

Chap. II は 'Spelling' と 'Syllable' について説明されている。音節の説明も前の章と同様に簡単な説明にとどまっている。しかし、前置詞 (接頭辞も含む) を用いて、語形成をどのように行なっていくかについては、詳しく述べられている。さらに句読点やアポストロフィーなどの記号の使い方を説明している。最後に大文字の使い方 (例えば固有名詞など) について述べている。

1.6 Part II の 'Of Etymology' では、品詞、語の派生、変化、類推、相似などについて説明されている。まず、Chap. I では 'Noun' (「名詞」)、'Pronoun' (「代名詞」)、'Verb' (「動詞」)、'Participle' (「分詞」)、'Adverb' (「副詞」)、'Conjunction' (「接続詞」)、'Preposition' (「前置詞」)、'Interjection' (「間投詞」) の 8 品詞についての説明がある。この品詞分類は、彼の文法観を示すものとして重要であり、その後も基本的に変わることはない。以下、章を分けて、それぞれの品詞についての説明が行われている。

Chap. II は名詞を扱った章であり、そこで行われている名詞の定義は次のとおりである。

What is a Noun? *A.* It is the name of a Thing that may be perceived either by the Senses or Understanding. (1753, p. 508)

名詞とは五感や理解力によって受け取られた事物の名前であるとする。

And it is either Substantive or Adjective. (1753, p. 508)

また、名詞は「実詞」か「形容詞」であるとする。

What is a Noun Substantive? *A.* A Noun Substantive is the Thing itself. (1753, p. 508)

実詞は事物そのものであるとする。

What is an adjective? *A.* The Adjective is a Word that expresses the Qualities or Properties of a Thing. (1753, p. 508)

そして、形容詞は事物の性質を表す語であると説明している。彼は 'Preface' でも述べているように、この 1753 年の時点では、基本的には伝統的なラテン文法を踏襲して、'Noun' の中に 'Substantive' と 'Adjective' を包含する立場をとっている。

Chap. III は 'Of Substantives Proper and Common' と題して、実詞の説明を詳細に行なっている。§1 では 'Number' (「数」) について、§2 では 'Genitive Case' (「属格」) について、§3 では 'Gender' (「性」) について、§4 では 'Article' (「冠詞」) について、§5 では形容詞の比較について、それぞれ説明している。'Article' については別個に論じているのに対して、'Adjective' は原級、比較級、最上級についてふれているだけである。'Adjective' についてはこれに続く章でも論じていないので、1753 年当時 Buchanan は形容詞についてはまだそれほど重きをおいていなかったのではないだろうか。しかし、その後の実践研究により、形容詞の取り扱いに変化が見られる。このことについては後の 2 つの文法書を考察するときに述べる。

Chap. IV は 'Of the Pronouns' と題して、代名詞について述べている。その説明は簡潔なものとなっている。

Chap. V は 'Verb' (「動詞」)についてである。動詞の定義では、'Being' (「存在」)、'Doing' (「動作」)、'Suffering' (「受身」) を指し示すとしている。'Voice' (「態」) には 'Active' (「能動態」) と 'Passive' (「受動態」)の2種類があり、'Tense' (「時制」)は、'past' (「過去」)と 'present' (「現在」) と 'future' (「未来」) の 3 種類としているが、英語で区別できるのは現在と過去の 2 つのみであり、その他の時制を表すには助動詞('auxiliary or helping Verbs') を用いる必要があるとする。この時期の Buchanan は形態から見た時制の取り扱いに重きを置いているように見える。

'Person' (「人称」) は単数の 1 人称 'I', 2 人称 'thou or you', 3 人称 'he or she' ('it' は書かれていないが、'Of the Pronouns' 「代名詞」の説明の箇所では表記されている。) と、複数の 1 人称 'we', 2 人称 'ye or you', 3 人称 'they' の 3 種類を認めているが、動詞の変化形がないため、'Mood' (「法」) はないとする。'There are no Moods, because the Verb has no Diversity of Endings to express its Manners of signifying.' と述べ、ではどのようにして動詞の 'Manner' (「様態」) を表すことができるかと問えば、それは時制と同じく、助動詞の助けを借りるのだと述べている。つまり、機能的には 'Mood' (「法」) の存在は認めている。

Chap. VI は 'Participle' (「分詞」) についてである。この章も簡潔な説明である。Chap. VII は助動詞のうち、'do', 'will', 'shall', 'may', 'must' について論じている。Chap. VIII は同じく助動詞のうち、'have' と 'am' と 'be' について論じている。そして、この章ですべての 'Tense' (「時制」) と 'Mood' (「法」) について、一覧表に示す形で述べている。その表から時制を取り出すと、次のようになる。

'Tense' (「時制」)

'Present' (「現在時制」)、'Imperfect' (「過去時制」)、'Perfect' (「現在完了時制」)、'Pluperfect' (「過去完了時制」)、'Future' (「未来時制」)

'Mood'（「法」）

'Indicative'（「直説法」）、'Subjunctive'（「仮定法」）、'Imperative'（「命令法」）、'Infinitive'（「不定法」）

この分類の仕方はその後の2つの文法書にもつながるものであるが、先述したように、1753年の時点で、Buchananはこれら時制と法は動詞が表わすのではなく、助動詞がその任を負っていると考えている。

Chap. IXは'Irregular Verb'（「不規則動詞」）について、Chap. Xは'Verb Active'（「他動詞」）と'Verb Neuter'（「状態動詞」）について、Chap. XIは'Adverb'（「副詞」）について、Chap. XIIは'Conjunction'（「接続詞」）について、Chap. XIIIは'Preposition'（「前置詞」）について、Chap. XIVは'Interjection'（「間投詞」）について、Chap. XVは'Of the Derivation of the Parts of Speech'（「派生形」）について、それぞれ簡潔に論じている。

1.7 Part IIIは'Syntax'（「文構造」）についてであるが、わずか4頁半にとどまっている。まずは'Syntax'の定義である。

> Syntax is the right placing or joining of Words together in Sentence. (1753, p. 547)

文構造とは文の中でいくつかの語を正しく配置するものであるとする。そして、文の定義は次のようになっている。

> What is a Sentence? A Sentence is any Thought of the Mind expressed by two or more Words, and is either simple or compound. (1753, p. 547)

文とは2つ以上の語によって表現される心の思いのことであり、単文もあれば重文もあると説明している。このあと、文の中における各語の配列について順を追って説明しているが、全体として'Syntax'の説明は、その他のところと同様に簡潔なものにとどまっている。

1.8 次は 'Part IV. Of Prosody' (「韻律」) である。その後の 2 冊の文法書では綴字の後に取り扱われるようになる部門であるが、この時期には最後に取り扱われている。これはラテン文法を基にして、'Prosody' がラテン語で詩を作る場合に利用される応用部門だからであろう。定義でも、

> Prosody, or Poetry, teaches the true Pronounciation [*sic*] of Words, either in Prose or Verse, their Accents, and the Quantities or Times of Syllables. (1753, p. 552)

韻律、あるいは作詩法とは、散文と韻文での語の正しい発音、音節の強勢、音量、時間を教えるものです、とあり、1753 年の時点ではまだ 'Poetry' (「作詩法」) という語を使っているが、その後の文法書からは削除している。 Buchanan は 1757 年に 2 種類の発音辞典を出版しており、発音についても実践研究を行い、1762 年の文法書 *The British Grammar* では、この韻律の部門をかなり詳しく論じるまでになっていった。しかし、この 1753 年の時点ではわずか 2 頁の記述にとどまっているのである。

1.9 最後に、これまでの総まとめとして、 'The Lord's Prayer, as a Praxis on the Parts of Speech' と題して、練習問題を提供している。最初に以下の「主の祈り」をあげている。

> Our Father which art in Heaven: Hallowed be thy Name: Thy Kingdom come: Thy Will be dome in Earth as it is in Heaven: Give us this Day our daily Bread: And forgive us our Trespasses, as we forgive them that trespass against us: And lead us not into Temptation; but deliver us from Evil: For thine is the Kingdom, the Power and the Glory, for ever and ever. *Amen.*

そして、これを一語一語にわたって、次のように 'parsing' (「文構造解析」) を行なっていくのである。例として、その最初の一節を次に引用する。

Our) is a Pronoun possessive put for the first Person of the plural Number.
Father) is a Noun Substantive.
Which) is a Relative: It is spoken both of Things and Persons, though it should be only of Things; and *who* and *whom* are used when we speak of Persons; and *who* would have been more proper in this Place, because it speaks of a Person.
Art) is a Verb essential or neuter, and is the second Person of the Verb *am*.
In) is a Preposition.
Heaven) a Noun Substantive.
Hallowed) a Participle passive, because it ends in *ed*.
Be) is a Verb, from *am*.
Thy) is a Pronoun possessive.
Name) a Substantive. *Thy*) as before.
Will) a Substantive, from the Verb *to will*. *Be*) as before.
（以下、省略）

わずか2頁半の練習問題であるが、これが元となって、その後の彼の文法書にも取り入れられ、かなり豊富な練習問題が提供されるようになるのである。

1.10 これまで見てきたように、1753年上梓の *The Complete English Scholar* に付されている英文法の箇所は同書全体から見ると決して多くはない。しかし、 Buchanan の、その当時における英文法についての考え方、また、英文法の教授の内容とその指導法に関する見解を読み取ることができる。この英文法書が元となり、1762年の *The British Grammar* へと発展し、さらに研究を重ねて 1767 年出版の *A Regular English Syntax* へとつながっていくのである。その意味でも、この 1753 年に公刊された *The Complete English Scholar* は James Buchanan の文法観を見ていく上で、非常に重要な著作であることがわかるのである。

2. *The British Grammar* (1762) の文法

本書には目次が付されていないが、本文の各見出しに付されたものを、先の 1753 年版に倣って編集したものを、次に掲げる。

(Title)
Dedication.
The Preface.
Introduction. Of Grammar and its Parts.
Part I. Of Orthography.
Chap. I. Of the Number and Division of Letters.
Section I. Of the Various Sounds, Powers, and Properties of the Vowels.
Section II. Of Diphthongs, or Double Vowels.
Section III. Of Triphthongs.
Section IV. Of the Single Consonants.
Section V. Of the Double Consonants.
Chap. II. Of Syllables.
Chap. III. Of Stops, or Points, and Marks or Notes.
Part II. Of Prosody.
Part III. Of Etymology.
Chap. I. Of the Eight Sorts of Words, or Parts of Speech.
Chap. II. Of a Noun.
Chap. III. Of Substantives Proper and Common.
Section I. Of Numbers.
Section II. Of the Genitive Case.
Section III. Of Gender.
Section IV. Of the Articles.
Chap. IV. Of the Adjective, with its Comparison.

Chap. V. Of the Pronouns.
Chap. VI. Of Verbs.
Section I. Of Auxiliary or Helping Verbs.
Section II. Of the Perfect helping Verbs, HAVE, and AM or BE.
Section III. Of the Participle.
Section IV. An Example of the Inflexion of a Verb through all the Times and Moods of the Active and Passive Voice.
Section V. Of the Verb Active and Neuter.
Section VI. Of Irregular Verbs.
Chap. VII. Of the Adverb.
Chap. VIII. Of the Conjunction.
Chap. IX. Of the Prepositions.
Chap. X. Of Interjections.
Chap. XI. Of the Derivation of the Parts of Speech.
Part IV. Of Syntax.
Chap. I. Of Sentences.
Section I. Of the Construction of the Noun and Pronoun.
Section II. Of the Construction of Verbs.
Section III. Of the Construction of Adjectives.

Section IV. Of the Construction of Adverbs, Conjunctions and Prepositions.
Chap. II. General Rules for English Concord, with Exercises of False Syntax under each, as an Introduction to the Scholar's Writing English Syntactically.
Chap. III. Promiscuous Exercises in Prose and Verse on all the Foregoing Rules.
Chap. IV. Of Ellipsis or Suppression, and of Transposition or the transplacing of Words.
Chap. V. Exercises Containing Tautology or Repetition, &c.
Chap. VI. Exercises of Mean and Improper Diction, to be Turned into a Pure and Elegant Style.

2.1 上に目次を示した二番目の文法書 *The British Grammar* を取り上げる。 Alston (1974, I, pp. 41–42) によると、1762 年の初版本以外に、1768 年の第 2 版、1779 年の第 3 版、そして 1784 年には Alston (1974, I, p. 42) が [Another edition] としている別版が存在する。[Another edition] とは、アメリカのボストンで出版されたものである。1779 年発行の第 3 版は残念ながら未入手、未見である[1] よって、以下の考察では筆者が実際に入手出来た 1762 年の初版と 1768 年の第 2 版、1784 年にアメリカで発行された [Another edition] (以下、1784 年刊行のアメリカ版とする) の 3 つの版を比較対照する。 Buchanan の最後の著作は 1770 年とされ、1773 年発行の著書は彼の死後、その未亡人によって Elizabeth に捧げられたものである。よって、第 3 版やアメリカ版は著者の没後出版されたことになる。この *The British Grammar* は、初版から 22 年経ってもその需要があったということであろう。

本書の正式な書名としては表紙に、

> The British Grammar: or, an Essay, in Four Parts, towards Speaking and Writing the English Language Grammatically, and Inditing Elegantly. For the Use of the Schools of Great Britain and Ireland, and of Private Young Gentlemen and Ladies.

---

[1] Alston (1974, I, p. 41) によると、この第 3 版の出版社は London: B. Law, T. Caslon, J. Johnson, and T. Cadell で、ページ数は、頁番号なしが 4 頁、ローマ数字が 38 頁、アラビア数字が 254 頁ある。この第 3 版は Kennedy (1927, p. 211) にも記載がある。

とあり、このあとに Cicero の言葉（Nullum munus Reipublicae afferre majus meliusve possumus quam si Doceamus, atque erudiamus Juventutem）が引用されている。'Four Parts' については後ほどふれることにする。「英語を文法的に正しく話したり書いたりするため、また、気品のある文章を作るため」とある。学校だけでなく、独習者の使用も意図していたことがわかる。

表紙にはこのあと出版社名として、'London: Printed for A. Millar in the Strand' とあり、最後に出版年として、ローマ数字で 'MDCCLXII', つまり 1762 年と記されている。表紙はこれがすべてであり、先述したように、著者名は記されていない。第 2 版となる 1768 年版を見てみると、書名はまったく同じで、そのすぐあとに 'The Second Edition' が追加され、そのあとに Cicero からの同じ引用がある。出版社名は、'London: Printed for A. Millar, and Sold by T. Cadell in the Strand' と表記されている。最後に出版年として 'MDCCLXVIII' とあり、やはり著者名は記されていない。

アメリカ版の書名は上記と少し異なっている。

> The British Grammar: or, an Essay, in Four Parts, towards Speaking and Writing the English Language Grammatically, and Inditing Elegantly, For the Use of Schools, and of Private Young Gentlemen and Ladies.

アメリカで出版されているので、イギリスに限定されないように元版の国名（'of Great Britain and Ireland'）が省略されている。また、同じ Cicero の引用がこのあとに続き、そのあとに出版社名として、'Boston: Printed by Nathaniel Coverly, for John Norman, and sold at his Shop, near the Boston-Stone.' とあり、最後に出版年としてローマ数字で 'MDCCLXXXIV' と記されている。表紙はこれがすべてであり、1762 年の初版、1768 年の第 2 版と同様に、著者名は記されていない。

初版である 1762 年版の表紙の次には 2 頁にわたる Dedication があり、時のイギリス国王ジョージ 3 世の妃シャーロット（Charlotte）に献呈されている。以下の文がその献辞である。少し長いが引用しておく。

To
Her Most Excellent Majesty,
CHARLOTTE,
Queen of Great-Britain, &c. &c.

Madam,

Permit me to lay at Your Majesty's Feet an essay towards Speaking and Writing Grammatically, and Inditing Elegantly the Language of the bravest, wisest, most powerful, and respectable Body of People upon the Face of the Globe! Highly distinguished with the additional Glory, of being the Vernacular Tongue of the most Virtuous, most Potent, and best Beloved MONARCH upon Earth!

A Language, Madam, which has received fresh Lustre from its being now spoken by a Queen the Darling of a People, whose Tongues joyfully proclaim their Gratitude, and whose Hearts (united in the firmest and most dutiful Attachment) will always exult to hear Your Majesty express Your ineffable Goodness and all-attracting Affability in the refined and comprehensive English Energy! in the manly Diction of Britons!

If the following Sheets should have the happiness to be entertaining to Your Majesty, inexpressible Satisfaction will redound to him who has the Honour to be, with the most profound Reverence,

Madam,
Your Majesty's
Most Faithful,
Most obedient,
And Most Humble Servant,
The Author.

この献辞の最後には 'The Author' とだけ記されており、ここでも著者名は記されていない。この 2 頁の献辞は 6 年後に出版された第 2 版でもほとんど同じである。しかし、1784 年版は独立後のアメリカでの出版のためか、献辞の頁はない。

2.2 次に 'The Preface'（「序文」）が初版では 36 頁、第 2 版では 39 頁にわたっている。序文の頁数の違いは、第 2 版では最初の頁に図柄を入れたこと、第 1 段落の最初の文字を異なった飾り文字にしたため、1 行あたりの文字数が違った行があること、また、各段落のあとに 1 行ずつスペー

スをとったことによる。内容は全く同一である。［Another edition］であるアメリカ版では版の組み直しにより 28 頁となっている。

第 1 章、第 2 章で見たとおり、当時の社会の動き、庶民の要望などにより、教育が普及してきており、この序文の中でも Buchanan は以下のように述べている。

> I might here make Quotations from the celebrated Mr. Locke, and some other Writers, on Education, strongly recommending and enforcing the Instruction of the British Youth in the Grammar of their own Language. (1762, p. xvii)

> And as Mr. Locke and the Spectator observe, Men who have threshed hard at Greek and Latin for ten or eleven Years together, are very often deficient in their own Language. (1762, p. xxv)

ここで 2 回にわたって名前が出ている 'Mr. Locke' とは 17 世紀後半に活躍した John Locke (1632–1704) のことである。Locke は 1693 年に *Some Thoughts Concerning Education*(『教育に関する若干の考察』)を出版して、教育についての考えを著している。Buchanan は有名な Locke の教育論を引き合いに出すことにより、イギリスにおける国語としての英語教育の重要性を力説しているのである。

Buchanan (1762, p. xvi) は、若者や読み書きのできない大人が綴り字を非難されたり、文法を間違ったり、同じ語を繰り返したり、言葉遣いが粗野であったりするのは、(i) 大人たちが英語を文法的に正しく学んでいないからであり、(ii) 若者には物事の知識が不十分であったり、観察力が不足しているためであり、(iii) 両者ともに創意工夫にかけているからであると言う。それらを改善するためには、(i) 綴り方を完全なものとして、(ii) 辞書をよく見て語を増やしていくことに努め、(iii) 練習問題を通して、文法上の間違い、文の分析を行い、同語反復や粗野な言い方にはならない方法を学ぶことによって、創意工夫が高まってくると述べている。広い意味での文法教育、語学教育がいかに必要であるかを繰り返し述べているのである。

もう一つ、女性（'the Fair Sex'）が適切な英語教育を施されておらず、大変恥ずべきことであると言う。[2] 男性の多くが女性を人形のごとく扱い、男性よりも劣ったものであるかのように考えているが、それは間違いである。女性も男性と同じく知性を持った社会的存在であり、知識と教養を身に付けさせることが重要であると述べている。この書のタイトルに'Ladies' とあるのも頷けるであろう。

文法用語について、彼は次のように述べている。

> ... yet considering for whom I was chiefly writing, I endeavoured to render the Stile familiar; and, as much as the Subject would admit, to avoid Terms which might appear either extraneous or disgusting. (1762, p. ii)

当時の他の文法家が使っていた用語を使用することにより、初学者にもわかりやすい文法書を示そうとしていることがわかる。そして、文法の学び方として、次のような問答形式をとりながら、少しずつ着実に理解させようとする。

> Beginning again he[3] distinguishes the Parts of Speech, parsing every Word, and giving the Rules of Syntax. For Example, *I Prepare*; what Part of Speech is *I*? A Pronoun. What sort of a Pronoun? A personal Pronoun. What State? The foregoing State, because it goes before the Verb. Does the foregoing State or Nominative Word always go before the Verb? Yes, except 1, 2, 3, 4, 5, 6, see Page 186. (1762, p. vi)

学習者は文構造の解析を行いながら、各語の品詞を区別していく。たとえば、'*I Prepare*' を例にとると、'*I*' の品詞を問い、'Pronoun'（代名詞）と答える。次に代名詞の種類を問い、'personal Pronoun'（人称代名詞）と答える。その人称代名詞の格を問い、'foregoing State'（主格）と答え、

---

[2] Buchanan (1762, p. xxix) を参照。
[3] the Learner（学習者）のこと。

その理由も述べる。このようにして、1語について、さまざまな解析を行うことにより、文法を理解させようとしているのである。次は動詞についてである。

> What Part of Speech is *prepare*? A Verb. How do you know? Because whatever Word denotes either being, doing, or suffering, is a Verb. What Sort of a Verb is it? An active transitive Verb. How do you know? Because the Action passes over upon some other Person or Thing, the Subject of that Action. (1762, p. vii)

'*prepare*' の品詞を問い、'Verb'(「動詞」)と答える。その理由を問い、'being'(「存在」)、'doing'(「動作」)、'suffering'(「受身」)を表す語はどれも動詞だからであると答える。続けて動詞の種類を問い、'active transitive Verb'(「能動他動詞」)だと答える。またその理由を問い、その行為がほかの人や物、その行為の対象者に及んでいるからであると答える。上記の '*I*' と同じようにして、綿密な解析を行なっている。

これらの説明の前に 'prepare' という語の発音や音節、綴り字について説明を行なっており、さらに 'prepare' の派生形などについても学ばせている。それを受けて、文法へと進ませる。文法の学び方は 'parsing'(「文構造解析」)を用いて、徹底的に文の中での語の役割を身に付けさせようとしているのである。

2.3 序文が終わると、'The British Grammar' ともう一度記されて、'Introduction'(「序説」)が書かれている。初版、第2版ともわずか2頁(アメリカ版も同じ)であるが、その文章の始まりは次のとおりである。

> *Question.* What is Grammar? *Answer.* Grammar is the Art of expressing the Relations of Words in Construction, with due Quantity in Speaking, and Orthography in Writing. (1762, p. 1)

1753年の *The Complete English Scholar* でも利用されていた問答形式が本書でも使われている。本書の対象者が学校の生徒や独習者であり、読み進めながら、理解を深めさせる方式をとっているものと思われる。

'Grammar'(「文法」)の定義を問答形式で問い、その応答として、文法とは、しゃべったり、綴ったり、書いたりするときに、文構造での語の関係を表現する技術のことであると答えることによって、文法の定義を会得させようとしている。*The Complete English Scholar* の定義とは、'Constructing' と 'Construction' の 1 語を除いて、すべて同じである。1753 年から 9 年経って出版された *The British Grammar* であるが、Buchanan の文法に対する考え方は変わっていないことがわかる。この文法の定義について、彼は注を付して次のように述べている。

> The abovementioned Definition of Grammar is certainly the best and most comprehensive that has yet been given; and is only an Improvement on the judicious Mr. Johnson's, who says, Grammar is the Art of expressing the Relations of Things in Construction, with due Accent in Speaking, &c. but he should have said of Words, not Things, as Grammar treats of Words, and not of Things; (後略) (1762, p. 1 の脚注)

上述の文法の定義は、これまでの定義の中で一番分かりやすいものであり、賢明な 'Mr. Johnson' の定義を改良した唯一のものでもあると述べている。 Johnson は、文法とは文構造の中での物事の関係を表す技術であると定義しているが、文法は語を扱うのであって、物事を扱うのではないから、'the Relations of Things'(「物事の関係」)ではなく、'(the Relations) of Words'(「語の関係」)とすべきであったとも述べて、自らの定義へと導いている。この 'Mr. Johnson' とは Samuel Johnson のことと思われるが、その Johnson が *Dictionary of the English Language* (1755) で述べた文法の定義を、 Buchanan はさらに改良して、言語そのものを対象にして、言語の構造を取り扱うという観点を示した定義にしていることが読み取れる。

Buchanan はこのあと、次の問答形式に進み、文法の目的とその射程範囲を記している。

> What does the English Grammar teach? The English Grammar teaches to speak and write the English language rightly. How many Parts has Grammar? Grammar has four Parts, Orthography, Prosody, Etymology, and Syntax. (1762, pp. 1–2)

これらは1753年の *The Complete English Scholar* の定義と同一である。文法そのものの定義と文法の目的とを分離しているのは、他の文法家とは違った思想を持っていたためと考えられる。たとえば同時期の Robert Lowth は *A Short Introduction to English Grammar* (1762, p. 1) の中で、文法を "Grammar is the Art of rightly expressing our thoughts by Words." と定義している。つまり、「文法は語句によりわれわれの思想を正しく表す技術である」と。それに対して、 Buchanan は文法を4つの部門からなるものとして、 'Orthography, Prosody, Etymology, Syntax' を挙げている。ここでいう 'Etymology' は、今日でいう「語源（論）」ではなく、品詞論と語形成論のことである。また、表紙の頁の書名にあった 'Four Parts' とはこの4部門のことである。そして、これに続けて、4部門それぞれの目的を問答形式によって簡潔に述べている。学習者を対象に具体的に説明しようとしているのは、次のような書き方からもわかる。

> What does Orthography teach? Orthography teaches to spell or write every Word with proper Letters: as, Nation, not Nashun; precious, not preshus; Tomb, not Toom, &c. (1762, p. 2)

'Orthography'（「正書法」）は何を教えるのかを問い、適切な文字を使って、あらゆる語を綴ったり書いたりすることを教えるのだと答える。そして例として、 'Nashun' ではなく 'Nation'、 'preshus' ではなく 'precious'、 'Toom' ではなく 'Tomb'、などをあげている。

2.4 2頁からなる「序論」が終わると、本書の中心をなす本論が253頁にわたって展開されている。これは初版、第2版とも同じ分量である。（アメリカ版では組版の違いにより、279 頁となっている。）本論は、序論で紹介されていた次の4部門からなっている。

Part I. Of Orthography（54頁）
Part II. Of Prosody（14頁）
Part III. Of Etymology（94頁）
Part IV. Of Syntax（91頁）

そして、それぞれの 'Part' で各部門について詳細な説明がなされている。ここでも必要に応じて問答形式をとることにより、具体的な説明を行おうとしていることがわかる。たとえば以下のような説明が各 'Part' で行われている。まず、 'Part I. Of Orthography' の 'Chap. I. Of the Number and Division of Letters' では次のような説明が問答形式でなされている。

> What is a Letter? A Letter is the Sign, Mark, or Character of a simple or uncompounded Sound. Are Letters Sounds? No. Letters are only the Signs or Symbols of Sounds, not the Sounds themselves. (1762, p. 3)

1753年の *The Complete English Scholar* の文字と音との関係については説明がないままで、文字と音を混同しているように見受けられたが、ここでは 'Letter' (「文字」) とは何かを問い、文字とは単音を表す記号、しるしのことであると答える。次に文字は音であるかと問い、それに答えて、文字はただ音を表す記号、しるしであり、音そのものではないと説明している。1753 年以降に綴り字・発音辞典も数冊出版しており、文字と音との関係について、研究を重ねた結果、このような定義となったのである。この説明のあと、 'Vowel' (「母音」) と 'Consonant' (「子音」) の説明が続くが、これは音声ではなく「母音字」「子音字」という意味である。以下も同様である。

Chapter I は次の5つの Section に区分されている。すなわち、'Section I. Of the Various Sounds, Powers, and Properties of the Vowels' (「単母音について」)、 'Section II. Of Diphthongs, or Double Vowels' (「二重母音について」)、 'Section III. Of Triphthongs' (「三重母音について」)、'Section IV. Of the Single Consonants' (「単子音について」)、'Section V. Of the Double Consonants' (「二重子音について」)、である。その説明は、たとえば Section I の単母音では、'How many Sounds has the Vowel a? It has three.' とあり、短母音、長母音、二重母音について、次のように例を示しながら説明している。

> 1. Its long sound which is like (ai) is expressed in cāme, sāme, māle, fāre, gāge, enrāge, orātion, &c. which Words are pronounced as if written caim, saim, mail, &c. 2. The Short sound of (a) is

expressed in bǎd, bǎt, bǎnd, hǎnd, mǎnner, bǎtter, &c. which Words are pronounced but a little more open than bĕd, bĕt, bĕnd, hĕnd, mĕnner, bĕtter. 3. The broad Sound we give to (a) is aw, i.e. as most Foreigners pronounce it; it has this guttural or broad Sound before ll, ld, lt, rd, lk, and betwixt (w) and (r), as all, call, bald, salt, ward, walk, war, warm, &c. （後略） (1762, pp. 7-8)

つまり、母音字とその発音がどのように対応しているかを説明しているのである。以下、 Section V まで同じようになっている。

Chap. II は 'Of Syllables' で、まず文字から音節が作られ、音節から語が作られ、語が適切に組み合わされて文となり、文から発話・文章が作られることが述べられている。そして、長い綴字の語の音節の区切り方について、5つの規則を設けて説明している。そのあと、複合語や派生語の作り方、注意すべき点などが述べられる。1757 年に Buchanan は *Linguae Britannicae Vera Pronunciatio: on a New English Dictionary* という綴字・発音辞典を出版しており、それをこの英文法書で実践的に解説しているものと思われる。

Chap. III は 'Of Stops or Points, and Marks or Notes' で、句読点について6つの規則を設けている。さらに、アポストロフィーなどの記号の使い方についても説明があり、最後に大文字の使い方（例えば固有名詞など）について述べられる。

2.5 'Part II. Of Prosody' は、次のような説明となっている。

What does Prosody teach? Prosody consists of two Parts: The first teaches the true Pronunciation of Words, comprising Accent, Quantity, and Emphasis; and the other the Art of making Verses. (1762, pp. 57–58)

'Prosody'（「韻律」）は何を教えるのかを問い、韻律とは2つの部門、つまり、アクセント、音の長短、強勢を含む、語の正しい発音を教える部門と、もう一つ作詩法を教える部門から成り立っていると答えている。

そして、アクセントの規則について 21 に分けてかなり詳細に説明して

いる。また、'Quantity'（「音の長短」）と'Emphasis'（「強調」）についても具体例を上げながら説明している。

2.6 'Part III. Of Etymology' は、品詞論と語形成論を扱っており、以下の 3 つがその説明例である。 Chap. I は 'Of the eight Sorts of Words, or Parts of Speech' となっており、最初に 'Word'（「語」）の定義を行なって、8 品詞の説明に入る。 Buchanan は 8 品詞の提唱者であるが、その内訳は 'Noun'（「名詞」）、'Pronoun'（「代名詞」）、'Verb'（「動詞」）、'Participle'（「分詞」）、'Adverb'（「副詞」）、'Conjunction'（「接続詞」）、'Preposition'（「前置詞」）、'Interjection'（「間投詞」）である。現代の 8 品詞であれば、分詞はなく、形容詞があるが、 Buchanan によると形容詞は名詞の中に含まれる。この項の注で彼自身もふれているように、古くはプラトンやアリストテレスの時代からギリシャ語やラテン語にいくつの品詞を認めるかについては多くの議論があった。イギリスで英文法が編まれるようになってからも、4 品詞、5 品詞、8 品詞、9 品詞など、各文法家たちがそれぞれの文法書において自説を展開したが、ギリシャ・ラテンの影響から分詞が品詞のひとつに数えられることが多かったのも事実である。[4] また、形容詞について Buchanan は、'a Noun (or an Adjective, which is a Word that signifies the Qualities or Manner of a Noun)' (Buchanan 1762, p. 72) と述べている。 'Noun' を広義に解釈し、その中に 'Noun Substantive' と 'Adjective' とを包含するというのもそれまでに広くとられてきたやり方である。[5] 彼もまた同様に解釈しているのである。それは次の 'Chap. II. Of a Noun' における定義からもわかる。

---

[4] 中世から近代にかけてラテン語教育でよく使われた Aelius Donatus の *Ars Grammatica* (*Ars maior* とか *Donatus maior* とよばれた) や、Priscianus Caesariensis の *Institutiones Grammaticae* 18 巻などは 8 品詞で説明されており、18 世紀の英文法家も基本的にはそれに倣っている。

[5] 形容詞の取り扱いについても、ほかの 18 世紀の英文法家と同じく、基本的にはラテン語文法に倣っている。

What is a Noun? A Noun is the Name of a Thing that may be perceived either by the Senses or Understanding. (1762, p. 73)

ここでは 'Noun'(「名詞」)の定義を問い、名詞とは五感や理解力によって受け取られた事物の名前であると答えている。そして、

And it is either Substantive or Adjective. (1762, p. 73)

と続き、名詞は 'Substantive'(「実詞」)か 'Adjective'(「形容詞」)であると説く。そして、

What is a Noun Substantive? A Noun Substantive is the Thing itself. (1762, p. 74)

つまり、実詞とは事物そのもののことであると定義している。

What is an Adjective? An Adjective is a Word that expresses the Qualities or Properties of a Thing. (1762, p. 74)

同じようにして、形容詞とは事物の性質や特性を表す語のことであると定義する。1753 年の *The Complete English Scholar* での名詞の取り扱いと基本的には同じであり、上述のように彼は形容詞を独立した品詞とはみなしていない。[6)]

Chap. III は 'Of Substantives Proper and Common' と題して、実詞の説明を詳細に論じている。 Section I では 'Number' (「数」)について、 Section II では 'Genitive Case' (「属格」)について、 Section III は 'Gender' (「性」)についてそれぞれ説明している。そして、 Section IV では 'Article' (「冠詞」)を取り上げている。冠詞は現代では形容詞に属するものとされているが、Buchanan 自身も同じように考えているのは、

---

6) しかし、1753 年の書とは異なり、Chap. IV で改めて形容詞を単独で取り上げて説明している。形容詞をどのように取り扱うべきか、Buchanan の文法観の変遷がうかがえて興味深い。以下、Chap. IV を参照。

以下の説明からわかる。

> What is an Article? An Article is a Word placed before a Sbstantive [*sic*], for the more particular expressing or determining of its Signification. (1762, p. 87)

冠詞とは実詞の前に置かれる語のことで、その意味をはっきりと表したり決定したりするために用いられると説明している。そして、英語には冠詞がいくつあるかを問う。

> How many Articles are there in the English Language? There are two, (a) and (the); and these are really Adjectives. (1762, p. 87)

それに答えて、'a' と 'the' の 2 つがあり、これらは本当は形容詞であると述べている。

冠詞の説明のあと、Chap. IV として形容詞と比較について論じている。ここで再度、名詞 ('Noun') と形容詞 ('Adjective') の違いについて説明している。形容詞はそれ自身では意味をなさず、実詞と一緒になって初めて意味をなすと彼は述べている。そして、実詞がなく、形容詞だけで文が成り立っているように見える場合でも、そこには必ず実詞の存在があることを前提として理解しているのだと述べる。実詞はそれだけで独立して文の中で 'Noun' として機能することができるが、形容詞はそれだけで独立して機能することはできず、実詞の存在が顕在化にしろ、潜在化にしろ、前提となってはじめて 'Noun' として文の中で機能していると考えているのであろう。そういう意味で 'Noun' の中の下位範疇として 'Adjective' を設定しているのである。

比較の説明では副詞の比較についても説明がある。また、規範文法的な態度として、Milton などの著名な作家の例を引き合いに出して、以下のように述べている。たとえば、

> There are some Superlative to be found in Milton and other writers, which are obsolete, and ought not to be imitated. Such

are shadiest, virtuousest, famousest, powerfullest, by Milton, inventivest, by Ascham, mortalist [*sic*], by Bacon; naturallest, by Wotton. (1762, p. 96)

Milton は shadiest, virtuousest, famousest, powerfullest を使っており、Ascham は inventivest を、Bacon は mortalist を、Wotton は naturallest を、それぞれ使っているのであるが、これらはもう使われていない形であり、真似すべきではないと述べている。

次は Chap. V は 'Pronoun' (代名詞) についてである。代名詞の定義を次のように行なっている。

What is a Pronoun? A Pronoun is a Part of Speech which is often used instead of a Noun Substantive common, and supplies the Want of a Noun proper. (1762, p. 97)

代名詞とは品詞の一つであり、'Noun Substantive common' (「普通名詞」) の代わりに用いられたり、'Noun proper' (「固有名詞」) が必要な所に補ったりするもののことであると説明している。

次に、代名詞には 4 種類あると述べている。すなわち、'Personal' (「人称代名詞」)、'Demonstrative' (「指示代名詞」)、'Relative' (「関係代名詞」)、'Interrogative' (「疑問代名詞」) である。

How many Kinds of Pronouns are there? There are four Kinds of Pronouns, viz. Personal, Demonstrative, Relative, and Interrogative. (1762, p. 98)

そして、人称代名詞には 2 つの 'State' (「格」) を認めている。[7]

---

[7] 名詞や代名詞にいくつの格を認めるかについては 20 世紀になってからも形態か、機能かで論争が起こっているのはよく知られたところである。たとえば、O. Jespersen (1860–1943) と E. A. Sonnenschein (1851–1929) の「格」('case') をめぐる論争は有名である。

Have not the Pronouns a twofold State? Yes, the Pronouns have a twofold State, both in the Singular and Plural Number. The first State is called the foregoing State as, I, we, the second State is called the following State, as, me, us. The Pronoun is used in the foregoing State, when it goes before the Verb, as, I write, not me write, we know, not us know. But it is used in the following State, when it follows the Verb or Preposition, as, the Man loves me, not I, John sent to me, not to I. (1762, p. 100)

この 'State' という用語は「格」を表すために当時の文法家が用いたものであり、*OED* にもその説明が見られる。[8] 代名詞には単数にも複数にも 2 つの格があることを述べ、一番目の格は 'foregoing State'(「前置格」つまり主格のこと [筆者注]) で、I や we がそれにあたり、2 番目の格は 'following State'(「後置格」つまり対格のこと [筆者注]) で、me や us がそれにあたると説明している。具体的な例をあげながら、その違いをわかりやすく説明していることがわかる。

そして、人称代名詞の変化形を以下のような表にまとめている。

---

[8] *OED* (**State**, sb. I. 13. †b.) に以下の記述がある。

By some English grammarians of the 18th c., ***foregoing*** or ***leading state*** and ***following state*** were used for the nominative and objective cases respectively, the term *case* being regarded as inapplicable to English. *Obs.*

そして、その最初の用例として第 3 章でもふれた James Greenwood の *An Essay towards a Practical English Grammar* (1711) から次の例をあげている。

1711 J. Greenwood *Ess. Pract. Eng. Gram.* 104 The Pronouns have a twofold State.·· The first State we shall call the Foregoing State, as I, We; the second State we shall call the Following State, as Me, Us.

A Table of all the Pronouns.

				Their Possessive to be used	
		The Foregoing State.	The Following State.	With a Substantive.	Without a Substantive.
First Person	Sing.	I	we [*sic*]	my	mine
	Plur.	we	us	our	ours
Second Person	Sing.	thou, or you	thee	thy	thine
	Plur.	ye or you	you	your	yours
Third Person Sing.	Male	he	him	his	his
	Female	she	her	her	hers
	Neuter	it	it	its	its
Third Person Plur.		they	them	their	theirs
The Interrogatives	Of Persons	who	whom	whose	whose
	Of Things	what		whereof	

(Buchanan 1762, p. 102)

注目すべきは、現代では用いられることのない3人称単数中性の所有代名詞 'its' が 'Their Possessive to be used without a Substantive' として記されていることである。また、'Second Person Singular & Plural' (2人称代名詞の単数と複数) には thou と you、ye と you があると述べているが、その使い分けについては書かれていない。また、'First Person Singular, The Following State' (「1人称単数目的格」) に 'we' とあるのは 'me' の誤植かと思われる。

Chap. VI は動詞を扱っている章である。動詞は 'Being' (「存在」)、'Doing' (「動作」)、'Suffering' (「受身」) を指し示すと定義されている。'Voice' (「態」) には 'Active' (「能動態」) と 'Passive' (「受動態」) の

2種類があり、'Number'（「数」）は 'Singular'（「単数」）と'Plural'（「複数」）の2種類、'Person'（「人称」）は3種類、'Mood'（「法」）は 'Indicative'（「直説法」）、 'Subjunctive'（「仮定法」）、 'Imperative'（「命令法」）、'Infinitive'（「不定法」）の 4 つを認めている。この不定法を認めているのはラテン文法からの強い影響かと思われる。1753 年の *The Complete English Scholar* では、形態を重んじていたため、 'Mood' は全くないと述べていた。形態を重んじれば 'Mood' は存在しないとも考えられるし、意味的・機能的見地から言えば 'Mood' は存在することになる。（'Infinitive' は別であるが。）これは現代の言語学でも問題になっており、現代ではさらに 'Modality' の問題とも絡んでいる。[9] いずれにしても、 Buchanan の 'Mood' に対する考え方の変化が読み取れて興味深いところである。

'Tense'（「時制」）は、 'Present'（「現在」）、 'Preter-imperfect'（「過去」）、 'Preter-perfect'（「現在完了」）、 'Preter-pluperfect'（「過去完了」）、 'Future'（「未来」）の 5 つを認めている。*The Complete English Scholar* (1753) では、英語で区別できるのは現在と過去の 2 つのみであり、その他の時制を表すには助動詞 ('auxiliary or helping Verbs') を用いる必要があるとしていた。時制の取り扱いについても、この 9 年間で形態的な見方から意味的・機能的な見方へと変わってきている。これはそれ以降の文法家も同様の問題を抱えており、ラテン文法の影響のもと、英文法をどのように取り扱ったらよいのか、文法家たちがさまざまに苦労したことがわかる。

これに引き続き、 Section I では助動詞 'do', 'will', 'shall', 'may', 'can', 'must', 'ought' の用法についての説明が行われる。 Section II では 'have' と 'be' 動詞の用法が説明される。ここで注目すべきは、2 人称単数過去の 'you was' である。その複数は 'you were' となっており、単数と複数を区別するためにあえて用いているのであろうか。これは他の箇所でも同様に記されているので、単なる誤植ではないと思われる。現代では誤用とされる 'you was' であるが、当時はまだ規範文法が成立する途上であり、作家や文人たちの書いたものの中にもこのような現代からすると間

---

[9] たとえば、 F. R. Palmer の *Modality and the English Modals* (1979) や *Mood and Modality* (1986, 2001[2]) などを参照。

違った表現が見受けられるのである。[10] Section III では分詞が扱われている。[11] Section IV はこれまでの復習として、'burn' を例にとって、態、法、時制、数、人称による変化形式を全て網羅している。Section V では 'Active' (「能動態」) と 'Passive' (「受動態」) と 'Neuter' (「状態」) の 3 つの説明を行なっている。'Active' はその下位範疇として自動詞と他動詞に分けられている。このうち、'Active Intransitive' については、その動詞の後に名詞がなく、行為が動作者から他者へと及ばないものとする。たとえば、'to walk', 'to run', 'to gallop', 'to creep' などである。それに対して、'Neuter' は、能動でも受動でもないもので、単に事物の状況や性質、人間の気質を表すものとし、たとえば、'to sit', 'to hang', 'to lie', 'to stand', 'to be green', 'to be yellow', 'to be wise', 'to rest' などをあげている。次に、Section VI では不規則動詞について述べている。

Chap. VII は 'Adverb' (「副詞」) について、Chap. VIII は 'Conjunction' (「接続詞」) について、Chap. IX は 'Preposition' (「前置詞」) について、Chap. X は 'Interjection' (「間投詞」) について、それぞれ説明を行っている。そして、第 3 部の最後として、'Chap. XI. Of the Derivation of the Parts of Speech' で、品詞の派生について詳細な説明を与えている。

2.7 Part IV. は 'Syntax' (「文構造」) に関するところであり、最初に 'Syntax' の定義を行なっている。

---

10) たとえば Jane Austen の *Mansfield Park* の中に 'you was' が用いられている箇所がある。詳細については Tieken-Boon van Ostade (2002, pp. 88–102) や末松 (2004, pp. 185–92) を参照。

11) 'Participle' の説明として、Buchanan (1762, pp.124–25) は次のように述べている。

> 'There are two, the Active Participle which ends in (ing), as, burning, and the Passive Participle which ends in (ed), as, burned.'

現在分詞と過去分詞の両方を扱っていることがわかる。

What is Syntax? Syntax is the right placing or joining of Words together in Sentence. (1762, p. 165)

文構造とは文の中でいくつかの語を正しく配置するものであると説明している。

そして、Chap. I では文を取り扱っている。まずは文の定義である。

What is a Sentence? A Sentence is any Thought of the Mind expressed by two or more Words joined together in proper Order; and it is either simple or compound. [12] (1762, p. 165)

文とは適切な順序で配置された 2 つ以上の語によって表される心の思いのことであり、単文もあれば重文もあると述べている。ここで注目すべきは、前著 *The Complete English Scholar* (1753) にはなかった 'joined together in proper Order' という重要な要素を加えていることである。前著を出版後、文の定義を精査して、この文言を付け加えたのであろう。ラテン語のように語の順序が比較的自由な言語とは違って、英語はそれぞれの語の屈折が失われた代わりに、語順が重要になってきた。Buchanan はラテン文法と比較検討していくうちに、この文言に行き着いたのではなかろうか。

Section I では、文構造における名詞（実詞）と代名詞の用法について説明している。そのなかで注意すべきものとしては、疑問文を作るときに、動詞＋名詞の順序（たとえば、'Burns he?' とか 'Write I ever so often?' など）は粗野な言い方であり、注意して避けるべきであるとか、関係代名詞 'that' は 'who', 'whom', 'which'の代わりによく用いられるが、上品な使い方ではないとか、関係代名詞 'which' は昔は人にも使われていたが、

---

12) Buchanan は 'compound Sentence' の説明として、'A compound Sentence is when two or more simple Sentences are joined together' としており、その例として 'God is just, and Man is wicked.' など等位接続詞を用いた例をあげているが、さらに説明を続けて、'Sentence' をつなぐ働きのあるものとして、'Conjunction' (「接続詞」)、'comparative Adverb' (「比較で用いられる副詞」)、'relative Pronoun' (「関係代名詞」) を挙げており、その例として、'As you behave to me, so will I to you.' や 'That is the Man who bought the Books.' などをあげている。これらは現代の文法では複文 (complex sentence) に当たるものである。

現代(つまり Buchanan の時代)ではものにだけ使うようになっている、しかし、教会の祈りなどでは今なお 'which' が使われている、などである。Section II では文構造における動詞の用法について、 Section III では形容詞の用法について、 Section IV では副詞、接続詞、前置詞の用法について、それぞれ例を挙げて説明している。

Chap. II では 'false Syntax' (「誤文訂正」) の練習問題を通して、'Concord' (「一致」) について 12 の規則を学ばせるようにしている。[13] たとえば、動詞は主格と数と人称で一致させなければならないとか、名詞が 2 つ並ぶ場合にはアポストロフィーをつけるとか、動詞の前にある代名詞は 'Foregoing State' (「主格」) であり、動詞の後に来る代名詞は 'Following State' (「目的格」) でなければならないとか、前置詞は目的格の前に置かなければならないとか、二重比較(たとえば 'more softer' や 'most softest' など) にはしない、などである。これらを豊富な練習問題を通じて、正しい用法を身に付けさせようとしているのである。いわゆる「規範文法」は、20 世紀には負のイメージをもって語られることが多かったが、このような学習法を通して、正しい英文法を身につけることは、当時の社会状況においては必須条件であったので、英文法を整備して、それを一般人に提供することは、需要に対する供給の関係から当然のことだったのであろう。それまでは文人や知識人の書く文章であっても、文法的な間違いがあったり、まして一般の庶民にいたっては読み書きもままならなかった。そのような中で、社会で認められるべき規範を創り出し、それを一般に広めていくことは、当時の状況から判断して、当然考えられるべきことであり、非難されるべきことではなかったのではないだろうか。

次の 'Chap. III. Promiscuous Exercises in Prose and Verse on all the Foregoing Rules' では、これまでの規則を基に散文と韻文を使ったさまざまな練習問題を提示している。 'Chap. IV. Of Ellipsis or Suppression, and of Transposition or the Transplacing of Words' では省略について取り上げている。また、 'Chap. V. Exercises Containing Tautology or

---

[13] 1753 年の *The Complete English Scholar* では、'false Syntax' (「誤文訂正」) による練習問題の工夫は見られない。これはその後の教育実践を通して編み出されたものなのかもしれない。(もちろん、他の文法家が使用しているのをヒントにしたこともあったであろう。)

Repetition, &c.' では 'Tautology' (「同語反復」) を含む語文訂正の練習問題を与えている。さらに、'Chap. VI. Exercises of Mean and Improper Diction, to be Turned into a Pure and Elegant Style' (粗野で不適切な言い回しを如何に上品な文体に変えるかの練習問題) では、Chap. V で提示した練習問題をどのように書き換えると上品な文章になるか、その解答を示している。次に示すのはその一例である。文法的な間違いの訂正 ('Let we' → 'Let us' や 'who' → 'which' など) だけでなく、表現の仕方 ('accompany' → 'keep Company with' や 'Progress' → 'going forward' など) も練習させることによって、さらに英語に磨きをかけるように工夫している。[14]

Chap. V にある「粗野で不適切な言い回し」の例

> Let we accompany he in his Progress through these successive Stages, and *let we* mark the Principles who actuates, and *mark* the Fortunes who attend him in each *of these successive Stages*, that us may have a full View of he. (1762, p. 219)

Chap. VI にある「上品な文体に書き換えた」例

> Let us keep Company with him in his going forward through these Stages following in Order, and take Notice of the Principles which put him in Action, and the Fortunes which wait on him in each, that we may have a full Sight of him. (1762, p. 240)

2.8 Buchanan の *The British Grammar* を概観してわかることは、初版の最終頁にある 'Errata' を第 2 版では本文に組み込んでいるとか、若干の句読点や行の追加などはあるが、初版、第 2 版ともその内容構成にはほとんど変更がない。本論は綴り字、発音、品詞、文構造と 4 部門に分かれて解説がなされ、'Grammar' という名称を書名に冠してはいるが、狭

---

[14] 'Company' や 'Progress' の最初の文字を大文字で書いているのはこれらが「実詞」であることを示している。 Buchanan の著書は一貫してこのようにすべての「実詞」の最初の文字を大文字で書いている。本書と同時期の Lowth や Priestley の著書ではそうなっていない。

い意味での「文法」ではなく、広い意味で 'English Language' を学ぶ学習者にとって必要な学習書となっていることがわかる。Alston （1974, I, p. 42）によると、彼の死後出版された［Another edition］（1784）は出版社がアメリカの 'Boston, Nathaniel Coverly for John Norman' となっており、イギリスだけでなく、アメリカでもその需要が認められたことを物語っている。

1753年の前著 *The Complete English Scholar* との比較では、文法全体の大きな変更は見られないが、形容詞の取り扱い方、時制や格を形態的見方から意味的・機能的な見方にその視点を移していること、文の定義など進展がはっきりと読み取れる。9年間の教育実践や英文法の研究により、着実に発展していることが明らかである。

3. *A Regular English Syntax* (1767) の文法

本書にも目次は付されていないが、1762年版同様、本文内容に沿って、編集し直したものを以下に示す。

The Preface
A Regular English Syntax.
  Chap. I. Introduction.
    Section I. Of Letters.
    Section II. Of Syllables.
    Section III. Of Accent.
  Chap. II. Of the Eight Sorts of Words, or Parts of Speech.
    Section I. Of a Noun.
    Section II. Of Numbers.
    Section III. Of Cases.
    Section IV. Of Genders.
    Section V. Of the Articles.
    Section VI. Of the Adjective, with its Comparison.
    Section VII. Of the Pronouns.
    Section VIII. Of Verbs.
    Section IX. Of the Participles.
    Section IX. [*sic*] Of the Verb Active and Neuter.
    Section X. [*sic*] Of the Adverb.
    Section XI. [*sic*] Of the Conjunction.
    Section XII. [*sic*] Of the Prepositions. / Of Interjections.
A Regular English Syntax.
  Chap. I. Of Sentences.
    Section I. Of the Construction of the Noun and Pronoun.
    Section II. Of the Construction of Verbs.
    Section III. Of the Construction of Adjectives. / Of the Construction of the Articles and the Participle, When Used as an Adjective.

Section IV. Of the Construction of Adverbs. / Of the Construction of Conjunctions.
Section V. Of the Construction of Prepositions.
Chap. II. General Rules for writing English Grammatically; illustrating what is Right by Examples, and pointing out what is Wrong by Excises of False Syntax under each Rule.
Chap. III. Promiscuous Exercises of False Snytax [*sic*], in Prose and Verse.
Chap. IV. Of Ellipsis and Transposition.
Chap. V. Rules for the Proper Arrangement of Words in a Period, Beginning with a Natural Style, and Proceeding Gradually to What is the Most Inverted.
Chap. VI. Of Stops or Points, and Marks or Notes.
A Praxis on the General Rules of Syntax.
Of Tautology or Repetition.
An Exercise on Redundancy or Verbosity.

3.1 1767年に初版が発行された *A Regular English Syntax* は、Alston (1974, I, pp. 52–53) によると、1769年に 'A new edition'、1780年に 'From the London edition'、1783年に [Another edition]、1786年には別の [Another edition]、1788年には 'Fourth American edition'、さらに1792年には 'Fifth American edition' が、それぞれ発行されている。先にふれたように、Buchanan の最後の著作は1770年とされ、1773年出版の著書は彼の死後、その未亡人によって Elizabeth に捧げられたものである。前著の *The British Grammar* (1962) と同様、本書も、初版から少なくとも25年経ってもその需要があったことを物語っている。

本書の正式な書名としては表紙に、

> A Regular English Syntax. Wherein is exhibited, The whole Variety of English Construction, properly exemplified. To which is added, The elegant Manner of arranging Words, and Members of Sentences. The Whole Reduced to Practice, for the Use of private young Gentlemen and Ladies, as well as of our most eminent Schools.

とある。 *The British Grammar* と違い、'Syntax' をその書名にはっきりと示している点が特徴的である。それをさらに明示するために、'The whole Variety of English Construction, properly exemplified' という表

現まで用いている。また、その対象者として、'the Use of private young Gentlemen and Ladies, as well as of our most eminent Schools' という表現を用いているところから、前著が学校で少なからず利用されるようになってきたことを踏まえて、独習者向けにも適していることを強調しようとしたのであろう。

次に *The British Grammar* との大きな違いは、書名のあとに著者名として 'By James Buchanan' と記されていることである。さらに 1769 年の 'A New Edition' では、 'By James Buchanan. Author of the New English Dictionary, British Grammar, British Spelling Book, &c.' と追加表記がなされている。(ちなみに、1780 年の 'From the London edition' にはない。) 'the New English Dictionary' とは 1757 年出版の発音辞典を、'British Spelling Book' とはやはり 1757 年出版の発音・綴り字辞典を指すものと思われる。[15] 1757 年のこの 2 つの著作によって名前が知られるようになり、1769 年の新版にはそれらを追記することによって、英文法書としての価値をさらに高める意図があったのであろう。なお、この 'British Grammar' という表記から、著者名のなかった 1762 年の *The British Grammar* が彼の作であることがわかる。

著者名のあとには、出版社名として 'London: Printed for J. Wren, at the Bible, opposite the New Exchange Buildings in the Strand' とある。そして、最後に出版年として 'MDCCLXVII' とある。新版の方では、著者名のあとに 'A New Edition' とあり、そのあとに、 'London: Printed for G. Keith, J. Johnson and J. Payne, G. Pearch, F. Blyth, and G. Burnett' と記されている。そして最後に 'MDCCLXIX' とある。1780 年の 'From the London edition' はアメリカ版であるが、著者名のあとに 'From the London edition' とあり、そのあとに出版社名として 'Philadelphia: Printed by Styner and Cist, in Seconde-Street' とあり、最後に出版年として 'MDCCLXXX' とある。

表紙の次には 1 頁の 'Dedication' があり、時の国王 George ジョージ 3 世に献呈されている。以下の文がその献辞である。

---

[15] 1757 年に出版された 'the New English Dictionary' と 'British Spelling Book' 両書の正式なタイトルは第 3 章で示した。

To
His Royal Highness
GEORGE,
Prince of Wales, &c. &c.

This Regular English Syntax is, with the most profound Respect, most humble inscribed by
His Royal Highness's
Most obedient,
And most devoted Servant,
James Buchanan.

前著 *The British Grammar* と違い、簡潔な献辞となっている。その最後には献辞者名が 'James Buchanan' と記されている。前著 *The British Grammar* のアメリカ版 (1784) と同様、1780 年版はアメリカでの出版のため、献辞の頁はない。

3.2 次に、'The Preface' が初版 (1767 年)、新版 (1769 年) とも 30 頁を占める。1780 年版では、版組を変えたため 21 頁となっているが、3 つの版とも内容は全て同一である。この序文の中でも前著 *The British Grammar* での記述と同様に、Jonathan Swift (1667–1745), Joseph Addison (1672–1719), Alexander Pope (1688–1744) など当時の文人たちに多くの文法的間違いがあることを考えてみると、体系的な英文法がそのような教養ある人たちによって顧みられていなかったのである、と力説する。それとともに、正しく英語を読み書きするためにはラテン文法から離れるべきだとも言う。さらに、6 年も 7 年もラテン語を学んでも、100 人に 1 人も自国の言語である英語を正しく読み書きできるようにはならないとまで述べている。前著 *The British Grammar* では以下のように述べた箇所があった。

And as Mr. Locke and the Spectator observe, Men who have threshed hard at Greek and Latin for ten or eleven Years together, are very often deficient in their own Language. (1762, p. xxv)

本書でも同様の記載が見られる。

> No wonder therfor [*sic*], that Mr. *Locke* and the Spectator took notice, that Men who have threshed hard at Greek and Latin for ten or eleven Years, were often deficient in their own Language. (1767, p. xvii)

ここでも著名人を引き合いに出すことにより、イギリスにおける国語としての英語教育の重要性を力説しているのである。さらに、前著 *The British Grammar* を引き合いに出していると思われる箇所がある。

> Something similar to this Method is highly recommended by an ingenious anonymous Writer. (1767, p. xxii)

> Particularly, says he, teaching them to write and speak correctly and fluently in their own Language, is the most important Instruction. (1767, p. xxiii)

しかし現状ではどこで英語が教えられているかと問い、どんな街にもラテン語中心の文法学校はあるのに、英語中心の文法学校がないことを嘆いている。そして、どのラテン文法学校においても英文法を教えるべきであるとし、英語の専門教師を置くべきであると言う。

もうひとつ、前著 *The British Grammar* でも述べられていたが、女性('the Fair Sex') に対する適切な英語教育がまったく無視されているのは、大変恥ずべきことだと述べている。教養ある男性が伝統的な文法学校教育から得た恩恵を、これまでの社会慣習が女性たちから奪ってきたのであると強い調子で非難している。本書のタイトルにも 'for the Use of private young Gentlemen and Ladies' とあるのは前著からの彼の思いなのであろう。

本書でも 'catechetical Form' (「問答形式」) をとることによって、初学者でも容易に学習することができるになっている。そして、やはり前著

同様に、 'false Syntax' (「誤文訂正」) や 'Tautology' (「同語反復」) などを通して、正しい英文法から発展した修辞学まで学ぶことができるとも述べている。

> I was sorry to differ from this sensible Writer in the Preface to the *British Grammar*; but from Experience I am still of the same Opinion, namely, that it would be more rational to let young Gentlemen first deliver their written Thoughts, I mean the Subjects given them for Exercises as the Foundation of Oratory, whether extemporary or studied. (1767, p. xxxi)

3.3 序文が終わると、'A Regular English Syntax' ともう一度記されて、'Chap. I. Introduction' が始まる。序論は、初版 (1767 年)、新版 (1769 年) とも 10 頁である。1780 年版は版組の違いにより 7 頁と 2 行である。3 つの版とも内容は全て同一である。その始まりは、

> What is Grammar? Grammar is the Art of expressing true Orthography in Writing, just Quantity in Speaking, and the proper Relations of Words in Construction. (1767, p. 1)

と、前著 *The British Grammar* と同様に問答形式になっている。1780 年版でも同様の内容であるが、次に示すように問答形式が見やすく工夫されている。これは 1780 年版の全書を通じてそのようになっている。

> *What is Grammar?*
>
> GRAMMAR is the Art of expressing true Orthography in Writing, just Quantity in Speaking, and the proper Relations of Words in Construction. (1780, p. 1)

文法の定義について、前著の *The Complete English Scholar* (1753), *The British Grammar* (1762) と比較してみる。

Grammar is the Art of expressing the Relations of Words in Constructing, with due Quantity in Speaking, and Orthography in Writing. (1753, p. 477)

Grammar is the Art of expressing the Relations of Words in Construction, with due Quantity in Speaking, and Orthography in Writing. (1762, p. 1)

Grammar is the Art of expressing true Orthography in Writing, just Quantity in Speaking, and the proper Relations of Words in Construction. (1767, p. 1)

1753 年と 1762 年の違いは前節で述べたとおり、'Constructing' と 'Construction' の 1 語だけであった。1762 年と 1767 年の違いは、構文中の 'the Relations of Words in Construction' (「語同士の関係」) を、構文中の 'the proper Relations of Words in Construction' (「語同士の適切な関係」) と改め、さらにその文言をあとに持ってきている点である。学習用の英文法書として、正しく書いたり、正しく話したりする技術ということをより際立たせるために、表現形式を変更したのであろうか。

前著の *The British Grammar* と同様、上記の問答に続けて、文法の目的とその射程範囲を次のように述べている。

An English Grammar should teach to speak and write the English Language correctly.

How many Parts has Grammar? Grammar has four Parts, viz. Orthography, Prosody, Etymology, and Syntax. (1767, pp. 1–2)

英文法は英語を正しく話し、書けるようにすることを教えるべきであり、文法には 4 つの分野、すなわち、'Orthography' (「正書法」)、'Prosody' (「韻律」)、'Etymology' (「語形成」)、'Syntax' (「文構造」) があると説明している。若干表現は違うが、前著 *The British Grammar* と同様のことが述べられていることがわかる。そして、このあと、'Orthography', 'Prosody', 'Etymology', 'Syntax' の 4 部門について簡単な説明がある。これらをまとめるようにして、

Hence we see, that Grammar treats of Letters, Syllables, Words, and Sentences. (1767, p. 2)

と述べている。綴り字、発音、語、文構造を扱うことがはっきりと読み取れるものとなっている。

前著 *The British Grammar* では序論が 2 頁で、そのあとに上記の 4 部門を詳細に述べた本論が続いていたが、本書 *A Regular English Syntax* では、その表題通り文構造を本論としているためか、綴り字と発音については 'Chap. I. Introduction' (第 I 章序論) の中で、その下位項目を立てて、以下のように 'Letters', 'Syllables', 'Accent' を説明している。すなわち、'Section I. Of Letters', 'Section II. Of Syllables', 'Section III. Of Accent' である。

'Section I. Of Letters' では最初に文字の定義があるが、これは前著 *The British Grammar* と全く同じものとなっている。'Section II. Of Syllables' でも文字から音節が作られ、音節から語が作られ、語が適切に組み合わされて文となり、文から発話・文章が作られることが全く同じ表現で述べられている。'Section III. Of Accent' では前著と少し違う表現となっている。前著 *The British Grammar* では 'Part II. Of Prosody' で以下のように説明されていた。

What is Accent? Accent is the raising of the Voice upon a certain Vowel in a Word, which must be louder, or better heard than the rest. (1762, pp. 58–59)

それが本書では以下のような定義となっている。

What is Accent? Accent is the Rising and Inflection of the Voice upon a certain Syllable in a Word, which Syllable must be better heard than the rest of the Word. (1767, p. 9)

前著と比べて、音声の上昇だけでなく抑揚についても記し、それが母音ではなく音節についてであると述べているのは、前著からの実践による観察

の結果であろうか。この定義は、その前年に彼が著した発音辞典(Buchanan 1766) にある 'Accent' の説明と符合する。

> Accent, marked thus [´], is the rising and inflexion of the voice upon a certain syllable in a word. The syllable, therefore, that has the accent, is always long by inflexion. (Buchanan 1766, p. xxiii)

3.4 10頁にわたる第I章序論が終わると、Chap. II として 'Of the Eight Sorts of Words, or Parts of Speech', つまり品詞論があり、56頁にわたっている。(1780 版では 41 頁である。) この第 II 章でも前二著と同様に、必要に応じて問答形式がとられている。たとえば、次のようにである。

> Are Words Things or Ideas? No: Words are neither Things nor Ideas; but only the Signs or Symbols of Ideas. (1767, p. 11)

語は事物でも考えでもなく、ただ事物や考えを表す記号やしるしでしかないと説明している。これは次に示すように、前著 *The British Grammar* とほとんど同じである。

> Are Words Things or Ideas? No, Words are neither Things nor Ideas, but only the Symbols or Signs of Ideas. (1762, p. 72)

ここで注目すべきはその注である。以下のような注が付されている。

> Every whole of Speech, every Section, Paragraph, or Sentence, implies a certain Meaning, divisible into other Meanings, but Words imply a Meaning which is not so divisible, and are therefore the smallest Parts of Speech, as nothing less than a Word can have any Meaning at all. (1767, p. 11)

語を意味上の最小単位と認めており、これは現代の言語学の定義にもつながるものである。

これに続いて、英語には 'Noun' (「名詞」)、'Pronoun' (「代名詞」)、'Verb' (「動詞」)、'Participle' (「分詞」)、'Adverb' (「副詞」)、'Conjunction' (「接続詞」)、'Preposition' (「前置詞」)、'Interjection'

(「間投詞」) の 8 品詞があることを述べているのは前著と同様である。そして、この 8 品詞について、Section I から個別に説明を行なっている。

Section I は 'Noun' (「名詞」) についてである。名詞の定義は前著と全く同じものである。

> What is a Noun? A Nous is the Name of a Thing that may be perceived either by the Senses or Understanding. (1767, p. 12)

しかし、前著で説明のあった 'it is either Substantive or Adjective' という説明は省かれており、この節ではもっぱら 'Noun Substantive' の説明が簡単になされているのみである。そして、'Adjective' については別の節 (Section VI) を立てて説明している。品詞としては扱っていないが、実際には別の品詞として考えていたのかもしれない。

Section II は 'Numbers' (「数」) を扱っている。この節の説明は前著 *The British Grammar* を簡略化したものである。

Section III は 'Cases' (「格」) について述べている。前著では 'Genitive Case' という小見出しのもとで論じられていたものであるが、説明はほとんど同じものとなっている。

Section IV は 'Gender' (「性」) についてである。この節も前著とほぼ同じ記述となっている。

次の Section V は 'Article' (「冠詞」) に関するものであるが、これも前著同様の扱いで、'Noun' の下位分類ではあるが、その内容は 'Adjective' と同じように考えていることがわかる。

Section VI は 'Of the Adjective, with its Comparison' として、形容詞を論じている。加えて、原級、比較級、最上級といった「比較」の問題も論じている。その説明も前著と同様で、形容詞はそれ自身では意味をなさず、実詞と一緒になって初めて意味をなすとし、実詞がなく、形容詞だけで文が成り立っているように見える場合でも、そこには必ず実詞の存在があるのを前提として理解しているのだと述べる。上述したように、本書でも実詞はそれだけで独立して文の中で 'Noun' として機能することができるが、形容詞はそれだけで独立して機能することはできず、実詞の存在が顕在化にしろ、潜在化にしろ、前提となってはじめて 'Noun' として文の中で機能していると考えているのであろう。そういう意味で 'Noun' の中の下位範疇として 'Adjective' を設定しているのである。「比較」の説明もほかの節同様、前著に比べてかなり簡略化され、基本的な事項だけをまずは学ばせるように配慮している。

次はSection VIIの‘Pronoun’（「代名詞」）である。ここも他の節と同様に前著 *The British Grammar* の説明を簡略化したと思われる説明になっている。同書を引用したとはっきり思われるのは節末の代名詞の表である。この表中、前著で1人称単数目的格（同書の説明では、‘First Person Singular, the following State’）が‘we’と誤記されていたが、この *A Regular English Syntax* でも誤記はそのまま残されている。（なお、1780年版では修正されて、‘me’と表記されている。）また、ここでも現代では用いられることのない3人称単数の所有代名詞である‘its’が記されている。

Section VIIIは‘Of Verb’動詞についてである。‘Voice’（「態」）には‘Active’（「能動態」）と‘Passive’（「受動態」）の2種類、‘Number’（「数」）は単数と複数の2種類、‘Person’（「人称」）は3種類、‘Mood’（「法」）は‘Indicative’（「直説法」）、‘Subjunctive’（「仮定法」）、‘Imperative’（「命令法」）、‘Infinitive’（「不定法」）の4種類を認めており、前著とほぼ同じ記述となっている。そして、助動詞‘do’, ‘will’, ‘shall’, ‘may’, ‘can’, ‘must’, ‘ought’, ‘have’, ‘be’の用法について、‘Voice’, ‘Number’, ‘Mood’, ‘Tense’の観点からその変化形が前著同様に記されている。

Section IXは‘Participle’（「分詞」）についてである。ここも前著と同じである。

次は節番号が前節と重複しており、本来はSection Xとなるところが‘Section IX. Of the Verb Active and Neuter’となっている。1769年版も1780年版も重複したままである。個々の説明も前著 *The British Grammar* とほぼ同じであり、さらに前著では別の節で説明していた不規則動詞をこの節に入れている。この不規則動詞の変化表中、‘eat’の過去形が両書共に‘eat’となっている。

Section X（本来はXI）は‘Adverb’（「副詞」）、Section XI（本来はXII）は‘Conjunction’（「接続詞」）、Section XII（本来はXIII）は‘Preposition’（「前置詞」）をそれぞれ扱っている。これらの節も前著を簡略化したものとなっている。また、間投詞については前置詞の説明の後に付される形で説明が行われている。前著ではこのあとに品詞の派生について詳細な説明がなされていたが、本書では全て省かれている。

3.5　以上が本書の序論となる部分であり、もう一度本書の書名‘A Regular English Syntax’が記されている。実はここからが本書の中心をなす本論ともいうべき部分であり、全部で127頁に及んでいる。1780年版では内容は同じであるが、組版の違いにより117頁となっている。その

最初の部分は以下の問答形式で始まっている。

> What is Syntax? Syntax is the right placing or joining of Words together in Sentences. (1767, p. 67)

文構造とは文の中でいくつかの語を正しく配置するものであると述べている。この問答はまさしく前著 *The British Grammar* と同様である。前著では 'Orthography' 54 頁、'Prosody' 14 頁、'Etymology' 94 頁、'Syntax' 91 頁となっていたが、本書では上述した通り 127 頁を費やして 'Syntax' の解説を行っている。しかしその元となっているのは前著 *The British Grammar* であり、'Syntax' の定義だけでなく、それに続く文の定義も全く同じものが使われている。

> What is a Sentence? A Sentence is any Thought of the Mind, expressed by two or more Words joined together in proper Order, and it is either simple or compound. (1767, p. 67)

文とは適切な順序で配置された 2 つもしくはそれ以上の語によって表される考えや意見のことであり、単文もあれば重文もあると説明している。このように、文の定義は前著のままであるが、本書では 'Syntax' をその中心に据え、書名で記した 'The whole Variety of English Construction, properly exemplified' を学ばせようとしている。具体的に見てみよう。

本論は 'Chap. I. Of Sentences' から始まり、上述の定義のあと、前著と同様の項目を取り上げて論じている。内容はほぼ同じであるが、説明が増えており、節の違いがあるので、以下に示しておこう。

The British Grammar (1762) (14 頁)

Section I. Of the Construction of the noun and Pronoun.
Section II. Of the Construction of Verbs.
Section III. Of the Construction of Adjectives.
Section IV. Of the Construction of Adverbs, Conjunctions, and Prepositions.

A Regular English Syntax (1767) (33 頁)

Section I. Of the Construction of the noun and Pronoun.
Section II. Of the Construction of Verbs.
Section III. Of the Construction of Adjectives.
Of the Construction of the Articles and the Participle, when used as an Adjective.
Section IV. Of the Construction of Adverbs.
Of the Construction of Conjunctions.
Section V. Of the Construction of Prepositions.

各節とも説明が増えているが、特に増えているのは、第3節の形容詞の箇所である。前著にはなかった冠詞と分詞が形容詞として文の中でどのように使われるかをかなり詳細に論じている。また、副詞と接続詞と前置詞は前著ではひとつの節にまとまられていたが、本書では2つに分け、さらに両節ともに説明が詳しくなっている。

Chap. II では、'General Rules for writing English Gramatically [*sic*]; illustrating what is Right by Examples, and pointing out what is Wrong by Exercises of False Syntax under each Rule' と記して、文構造の規則を立て、それぞれの項目で豊富な正用例と誤用例を挙げて、具体的に説明を行っている。前著 *The British Grammar* では12であった規則を15に増やし、前著では20頁を費やして説明していたものを、本書では38頁にまで増やしている。

'Chap. III. Promiscuous Exercises of False Snytax [*sic*], in Prose and Verse' では、これまでの規則を基に、散文と韻文を使ったさまざまな練習問題を与えているのは前著同様であるが、本書では誤答問題の解答を各頁の下に付して、学習上の便宜をはかる工夫を行なっている。'Chap. IV. Of Ellipsis and Transposition' は省略を取り上げている。さらに、'Chap. V. Rules for the Proper Arrangement of Words in a Period, Beginning with a Natural Style, and Proceeding Gradually to What is the Most Inverted' では、英文法から発展した文体上の語配列の規則を論じている。Chap. VI は 'Of Stops or Points, and Marks or Note' と題して、前著では 'Orthography' の章で説明されていた句読点について規則を説明している。さらに、アポストロフィーなどの記号の使い方についても説明があ

る。

127 頁にわたる Syntax を縦横に学ばせたあと、総合的な練習問題として 'A Praxis on the General Rules of Syntax' に 44 頁（1780 年版ではやはり組版の違いのため 29 頁と短くなっている）を充てている。この練習問題の章では、 Buchanan が本書で実際に使っている説明の文章をそのまま練習問題の題材として取り上げている。たとえば、次に挙げる文章は本書 109 頁にある文章である。

> A Passionate Temper renders a Man unfit for business, deprives him of his Reason, robs him of all that is great and noble in his Nature; it makes him unfit for Conversation, destroys Friendship, changes Justice into Cruelty, and turns all Order into Confusion. Page 109. (1767, p. 194)

この文章を基にして、次に示すように問答形式を用いて、一文ずつ、一語ずつ、解析を行っていく。これはギリシャ語やラテン語教育で用いられた 'parsing' （「文構造解析」）の手法である。

> What part of Speech is *A*? *A* is an indefinite Article, used in a large or unlimitted [*sic*] Sense, not denoting here any particular Temper; *a* is always written before Words beginning with Consonants, and only before Words of the Singular Number; see Page 21. (1767, p. 194)

まず、上に示した練習問題 1 の文頭の不定冠詞 'a' を取り上げている。'a' の品詞は不定冠詞であり、その機能は限定的ではなく広い意味を表し、綴り字は単数の語で子音で始まる語の前につくことなどを述べ、その説明箇所として本書の 21 頁（冠詞を説明した節）を参照するように指示している。続いて、

> What part of Speech is *passionate*? It is an Adjective, because it denotes the Quality, Property or Manner of the Noun Substantive *Temper*; compare *passionate*? passionate, for the Positive; *more* passionate for the Comparative; *most* passionate,

for the Superlative. (1767, pp. 194–95)

形容詞 'passionate' を取り上げて、その機能は形容詞であり、名詞 'Temper' の性質を示すことを述べるとともに、その比較変化形（原級 'passionate'、比較級 'more passionate'、最上級 'most passionate'）を示している。以下、このようにして一つ一つの語を吟味することにより、文構造を理解させようとしている。

このようにして、一語ずつの詳細な分析が行われ、各語の文中における機能を説明したあと、次の文章が続く。

> Why is there but one Nominative to so many Verbs in this Sentence? Because the Noun is often elegantly understood to its Verb or Verbs; and again, the Verb is elegantly understood to its Noun or Nouns; see Page 77, and 150. (1767, p. 198)

一つの主語が複数の述語動詞と呼応している文構造について説明したこの問答では、問題演習をさせながら、本論で学習した文法項目をもう一度ここで確認させようとしていることがわかる。現代の学習参考書と問題集にも通じる実践的な教授法といえよう。77 頁とは、本論第 I 章の第 II 節、動詞の構造についての項目のことであり、そこでは次のような説明がなされている。

> The Noun or Nominative Word is often elegantly understood to its Verb or Verbs; as, Cesar came, saw, and conquered; i.e. Cesar came, and Cesar saw, and Cesar conquered. (1767, p. 77)

一つの名詞または名詞相当語句（ここでは主語のこと）が複数の述語動詞と呼応できることを述べている。同様に、150 頁とは、本論第 IV 章、省略と置き換えについての項目のことであり、そこでは以下の説明がなされている。

> What is Ellipsis? Ellipsis is an elegant Suppression (or the leaving out) of a Word, or Words in a Sentence.

> The Nominative Word or Words are often elegantly suppressed; as, God rewards the Righteous, and (God) punishes the Wicked. (1767, p. 150)

省略とは文中で語や語群を簡潔に抑制することであり、主語はよく省略されると説明している。そして、'God rewards the Righteous, and (God) punishes the Wicked.' などの例文を挙げる。一つの主語が複数の述語動詞と呼応できる場合、同じ主語を繰り返す必要はないことが説明されている。

このようにして全部で15の練習問題を掲載し、上述した分析（綴り字、品詞、語形成、主語と述語動詞との呼応など）を試みることにより、さまざまな文を総合的に理解させようとしている。そして、これらの練習問題のあとに、同語反復についての項目をさらに追加している。そこでは次のように述べている。

> As the foregoing Praxis was not designed for Youth at School who learn to pars [*sic*] under the Direction of a Master, but for the Benefit of grown Youth; who, having formerly acquired some Notion of Grammar, would improve themselves further in the Propriety of their own Language: So, as an additional Advantage, I have here added an Exercise of Tautology, after the Manner mentioned in the Preface. (1767, p. 225)

この練習問題は学校で教師の指導のもと、文法を学んでいる生徒を対象としたものではなく、すでに文法を学んでおり、さらに英語に磨きをかけたい独習者向けのものである、と書かれている。本書の書名 'the Use of private young Gentlemen and Ladies, as well as of our most eminent Schools' にもあるように、基本的な英文法を学習した独学者のために、応用発展ともいえる練習問題の項目を追加することで、独学者の英語学習をさらに発展させようとする Buchanan の教育的配慮がうかがえる。

4. James Buchanan の 3 冊の文法書を比較して

以上、Buchanan の 2 つの文法書 *The British Grammar* (1762) と *A Regular English Syntax* (1767)、さらにはそれらの基になっている 1753 年の *The Complete English Scholar* を取り上げ、それぞれの初版と第 2 版、あるいは新版などの内容、形式に関する相違を考察してきた。第 3 章で述べたように、Buchanan はまず、1753 年に *The Complete English Scholar* を世に送り出し、自らの国語教育や文法に対する考えを明らかにした。そして、1757 年に *Linguae Britannicae Vera Pronunciation: or a New English Dictionary* と *A New Pocket Book for Young Gentlemen and Ladies: or, A Spelling Dictionary of the English Language* という 2 つの発音・綴り字辞典を出版している。その 5 年後の 1762 年に *The British Grammar* を、さらにその 4 年後の 1766 年には *An Essay toward Establishing a Standard for an Elegant and Uniform Pronunciation* という発音・綴り字辞典を編纂している。そして、その次の年 1767 年に *A Regular English Syntax* を著している。

1762 年に出版された *The British Grammar* は、本論が 4 つの章に分かれ、それぞれの章では 'Orthography, Prosody, Etymology, Syntax' という 4 部門を詳しく解説している。'Grammar' というものを広くとらえて、英語学習者にとって必要な項目を解説している。

これに対して *A Regular English Syntax* は、その前年にさらに改良を重ねた発音・綴り字辞典を編纂しているので、'Orthography, Prosody' についてはその辞典に任せる形をとり、前著 *The British Grammar* よりも説明を簡略化し、'Etymology, Syntax' の部門の説明を増やし、とくに 'Syntax' を本論の中心に据えている。頁数を充分に割き、さらに総合的な練習問題の項目を設けて、文構造の分析を実践的に学べるようにしている。これらは学校での使用のみならず、独習者への配慮から行われており、5 年の間に彼がいかに英文法書を改良しようとしたかがよくわかる。1753 年から 14 年をかけて 'Syntax' に大部の頁を割くまでに至ったのは、かなりの実践研究の成果である。

Buchanan は、英語を正しく話し、読み書きできることが英語学習者、すなわちイギリス国民にとって必要なことであると考えた。それはこれまで見てきた 3 冊の文法書で彼が述べていることからも明らかであろう。そ

して、それを教育の中で実践できるように、個々の語を正しく綴り、正しく発音できるようにさせることを目的として発音・綴り字辞典を編纂し、個々の語を統合して、正しい文を作り出すことができるようにさせるために英文法書を公刊したのである。実践的な英文法家として Buchanan がいかに英文法に関わってきたのか、その意図はどこにあったのか、1753 年の *The Complete English Scholar,* 1762 年の *The British Grammar,* そして 1767 年の *A Regular English Syntax* の 3 つの文法書を比較検討することにより、それが浮かび上がってきたように思われる。さらにはこの 3 冊の文法書の発展の跡をたどることにより、James Buchanan というスコットランド生まれの実践文法家、教育者の国語教育、つまり英語教育や文法教育についての思想を読み取ることができたのではないかと考える。これまで 18 世紀の文法家の研究においては、 Lowth や Priestley ほどには取り上げられることの少なかった Buchanan ではあるが、Alston (1974) などの書誌学的研究から明らかなように、実際には彼が世に送り出した文法書や発音辞典はイギリス本国のみならず、新天地であり、その後独立したアメリカにおいても繰り返し出版されていたのである。彼もまた、 Lowth や Priestley とともに 18 世紀中葉における重要な「規範」文法家であったことがわかる。

5. Priestly, Lowth, Murray の文法書と比較して

本章の最後として、 Buchanan の文法書を他の文法家の文法書と比較して、 Buchanan の意義を考えてみることにする。

5.1 1753 年から 1767 年にかけて 3 冊の文法書を刊行し、その間に発音・綴り字辞典も数冊編纂した Buchanan は、18 世紀中葉の文法家のひとりであるが、同時代に活躍した文法家として Joseph Priestley と Robert Lowth がいる。また、彼らから 30 年ほど遅れて、18 世紀末には Lindley Murray が現れ、第 2 章で述べたように、Murray が「編纂した」*English Grammar* をもって英語におけるいわゆる「規範文法」が完成したのである。この節では、これまで詳細に見てきた Buchanan の文法書と、

Priestley, Lowth そして Murray のそれぞれの文法書を比較して、(1) 時制と法、(2) 品詞分類、(3) 文法の領域、(4) 文法の定義、に限って、Buchanan の独自性を試論的に明らかにしてみたいと思う。

5.2 Priestley は 1761 年に *The Rudiments of English Grammar; adapted to the use of schools. With observations on style* を著した。彼は科学者としての観点から、英語の事実を観察することによって、規範を導き出そうとした。そして、規則としての文法では説明がつかない事象については慣用という扱いとした。話し言葉の慣習が唯一の基準であるというのが彼の言語観である。この言語観に基づいて、英語には 2 つの時制 ('Present Tense', 'Preter tense') しかないと述べている。'Future' を時制として認めないのは、「未来」を明示する動詞の変化形がないためである。しかし、 Priestley (pp. 32–36)[16] は助動詞による時制を複合時制という呼び名で認めている。さらに彼は法 (mood) をも認めないので、時制が大変複雑なものとなっている。

Lowth は 1762 年に *A Short Introduction to English Grammar with Critical Notes* を上梓した。言語に基準と安定を求める時代思潮の中で、Lowth はそれに適合するような優れた規範を作るべく、この文法書を書いた。Lowth (pp. 37–40)[17] によると、英語の時制は 3 つ ('Present, Past, Future') あり、これを 'Indefinite' (「不定時」) とし、これに対する 'Definite' (「確定時」) をそれぞれ 'Imperfect' (「進行形」) と 'Perfect' (「完了形」) に区分している。'Indefinite' と 'Definite' という区分は古典語の aorist の区分に基づいており、3 つの時制は基本的な自然の時間の流れによって分けられ、 perfect かそうでないかの区分は相 (aspect) による。 Lowth は Mood (法) については 'Indicative' (「直説法」)、'Imperative' (「命令法」)、'Subjunctive' (「仮定法」)、'Infinitive' (「不定法」)、 'Participle' (「分詞」) の 5 つを認めており、この点が Priestley とは異なっている。

Buchanan は 1753 年の *The Complete English Scholar* では形態的な見方から動詞の分類を試みていたが、1762 年の *The British Grammar*

16) 頁番号は南雲堂版による。以下も同様。
17) 頁番号は南雲堂版による。以下も同様。

や 1767 年の *A Regular English Syntax* では意味論的・機能論的観点に考えを改めている。すなわち、動詞の時制には 'Present' (「現在」)、'Preter-imperfect' (「過去」)、'Preter-perfect' (「現在完了」)、'Preter-pluperfect' (「過去完了」)、'Future' (「未来」) の 5 つを認めている。また、法には 'Indicative' (「直説法」)、'Subjunctive' (「仮定法」)、'Imperative' (「命令法」)、'Infinitive' (「不定法」) の 4 つを認めている。

これら 3 名の文法家の時制と法に対する捉え方はそれぞれ一長一短あると思われる。しかし、英語を学ぼうとする者に規範的な文法を提供し、とくに初学者に対してわかりやすい文法を構築するという観点からはどうであろうか。ラテン語など古典語との関わりを謝絶し、英語自体を観察するという Priestley の取り組みはかえってことを複雑化してしまうきらいがあり、事実、その後の他の文法家には受け入れられることはなかった。そういう意味では、Lowth や Buchanan のようにラテン文法から取り入れられるものは取り入れるという態度の方が受け入れられたようである。それでは彼らから 30 年余り後の Murray の文法書ではどのように扱われているのであろうか。

Murray は 1795 年に *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners: With An Appendix* を「編纂」した。この書は近郊のクエーカーの女学校の女教師たちが女学生のために教える適当な英文法書を書いてくれるように懇請されて書いたものであり、Murray 自身は自分を著者とは呼ばず、編集者 ('compiler') と言い、その英文法書も著作ではなく、Johnson, Lowth, Priestley, Sheridan など先人の著書からいい所をとった「編纂物」('compilation') としている。彼は、3 つの基本時制とそれぞれの完了形からなる 6 つの時制を認めている。法は 'Indicative' (「直説法」)、'Imperative' (「命令法」)、'Potential' (「可能法」)、'Subjunctive' (「仮定法」)、'Infinitive' (「不定法」) の 5 つを認めている。彼は古典語の文法を踏まえ、また、動詞の形態だけからではなく、助動詞＋本動詞の結びつきという現実的な観点から、時制や法を捉えようとしている。そして、この捉え方がそれ以降の英文法の規範となっていくのであるから、その元は上に見たとおり、Lowth や Buchanan の文法観が生かされたのである。20 世紀の科学的な見方からすると、彼

らの捉え方には新機軸はなく、英語をある一定の枠にはめ込もうとする規範的な態度にしか写らなかったのかもしれない。しかし、ラテン文法を基にしながら、理性と慣用の観点から英語の時制を捉え、学習に適するように配慮しようとしたことがわかる。これは品詞の分類についても同様である。次は品詞分類について、Buchanan と Priestley, Lowth, Murray とを比較してみる。

5.3 Priestley の *Rudiments* によると、品詞分類は伝統的に 8 品詞論を採用している。分類は 'Noun' (「名詞」)、'Adjective' (「形容詞」)、'Pronoun' (「代名詞」)、'Verb' (「動詞」)、'Adverb' (「副詞」)、'Preposition' (「前置詞」)、'Conjunction' (「接続詞」)、'Interjection' (「間投詞」) で、分詞を動詞に含め、冠詞を形容詞に含めている。動詞の時制と法については独自の見解を表している Priestley であるが、品詞分類ではいたって保守的になっているのが特色である。

Lowth はどうであろうか。彼も伝統的な品詞分類を行っている。それは次のように Dr. Johnson の 9 分類と同じようになっている。すなわち、'Article' (「冠詞」)、'Substantive' (「名詞」)、'Pronoun' (「代名詞」)、'Adjective' (「形容詞」)、'Verb' (「動詞」)、'Adverb' (「副詞」)、'Preposition' (「前置詞」)、'Conjunction' (「接続詞」)、'Interjection' (「間投詞」) の 9 つである。冠詞と形容詞を分離し、名詞を古典語の文法のように 'Noun' という広い扱いではなく、'Substantive' として、形容詞と分離しているのが特徴的である。彼もまた分詞を動詞に含めている。

Buchanan についてはこれまで 3 冊の文法書を見た中でも述べてきたが、それぞれ次のように分類されている。まず、1753 年の *The Complete English Scholar* では、'Noun' (「名詞」)、'Pronoun' (「代名詞」)、'Verb' (「動詞」)、'Participle' (「分詞」)、'Adverb' (「副詞」)、'Conjunction' (「接続詞」)、'Preposition' (「前置詞」)、'Interjection' (「間投詞」) の 8 品詞に分けられている。この品詞分類は、彼の文法観を示すものとして重要であり、その後も基本的に変わることはない。1762 年の *The British Grammar* でも 'Noun' (「名詞」)、'Pronoun' (「代名詞」)、'Verb' (「動詞」)、'Participle' (「分詞」)、'Adverb' (「副詞」)、'Conjunction' (「接続詞」)、'Preposition' (「前置詞」)、'Interjection' (「間投詞」) の 8 つとなっている。形容詞については、'a Noun (or an Adjective, which is a Word that signifies the Qualities or Manner of a

Noun)' (Buchanan 1762, p. 72) と述べて、'Noun' を広義に解釈し、その中に 'Noun Substantive' と 'Adjective' とを包含するという考え方であった。この 2 冊の文法書では形容詞を独立した品詞とはみなしていない。ただ、1762 年の *The British Grammar* では、形容詞を単独の章で取り上げており、形容詞をどのように取り扱うべきか、迷っているのではないか。1767 年の *A Regular English Syntax* でも事情は変わっていない。'Noun' (「名詞」)、'Pronoun' (「代名詞」)、'Verb' (「動詞」)、'Participle' (「分詞」)、'Adverb' (「副詞」)、'Conjunction' (「接続詞」)、'Preposition' (「前置詞」)、'Interjection' (「間投詞」) の 8 品詞のままである。しかし、'Noun' (「名詞」) の説明を行っている節ではもっぱら 'Noun Substantive' の説明が簡単になされているだけである。そして、'Adjective' については別の節を立てて説明している。独立した 8 品詞の中には入れていないが、実際には別の品詞として考えていたのかもしれない。以上のように、 Buchanan は古典語の文法に則った形で、伝統的な 8 品詞論を採用しており、 Priestley や Lowth とは違い、分詞と動詞を分離させ、形容詞を 'Noun' の中に含めたままにはしているが、実際には独立させた取り扱いをおこなっている。

30 年余り後の Murray の文法書は、'Article' (「冠詞」)、'Substantive' (「名詞」)、'Adjective' (「形容詞」)、'Pronoun' (「代名詞」)、'Verb' (「動詞」)、'Adverb' (「副詞」)、'Preposition' (「前置詞」)、'Conjunction' (「接続詞」)、'Interjection' (「間投詞」) の 9 品詞論を展開している。これは Lowth の品詞論を採ったもののようであり、個々の定義も Lowth の定義に倣っていることが分かる。この Murray の文法書が規範文法の決定版となり、その後、英国のみならず、広く海外にまで、遠くは日本での英語学習における学校文法でも採用されたのである。もっとも現代では、冠詞を形容詞に含めた 8 品詞が一般的になっている。16 世紀末の Bullokar から 18 世紀末の Murray にいたるまで、実にさまざまな文法家が現れ、さまざまな品詞論を展開していったが、結果的には、Lowth の流れをくむ Murray の 9 品詞で落ち着き、さらに検討が加えられていって、現代では Priestley の 8 品詞になっている。伝統的な 8 品詞論を採った Buchanan の考え方は、'Substantive' (狭い意味での「名詞」) と 'Adjective' (「形容詞」) が分離されておらず、3 冊の文法書を比較する中で、彼の 'Adjective' (「形容詞」) の取り扱いに変化があったことは分かったが、まだ古典文法の 'Noun' (広い意味での「名詞」) の概念に引きずられていたのであろう。また、'Verb' (「動詞」) と 'Participle' (「分詞」) を独立させていることも同様である。18 世紀も終わりに近づ

くと、古典語から離れ、英語の実情に即した品詞分類がなされるようになったのである。

5.4 Buchanan は1753年の *The Complete English Scholar* の中で、英文法の領域としては 'Orthography'（「正書法」）、'Etymology'（「語形成」）、'Syntax'（「文構造」）、'Prosody'（「韻律」）の4部門があり、もっとも必要な部門が 'Orthography' であるとして、それを重視している。当時の文法家が扱う文法としては、発音や文字なども含む広範囲なものとなっている。これはその後の2冊の文法書もほぼ同様である。1762 年の *The British Grammar* においては、'Orthography, Prosody, Etymology, Syntax' の4部門を扱うことは変わっていないが、「正書法」の次に「韻律」を配して、文字の正しい綴りと読みから英語学習が始まり、発音へとつながっていくことを示している。1767 年の *A Regular English Syntax* は、その前年にさらに改良を重ねた発音・綴り字辞典を編纂しているので、'Orthography, Prosody' についてはその辞典に任せる形をとり、前著 *The British Grammar* よりも説明を簡略化し、'Etymology, Syntax' の部門の説明を増やし、とくに 'Syntax' を本論の中心に据えている。このように Buchanan は文法というものを広く捉え、英語学習者にとって必要と考える4部門を文法の射程範囲と考えていた。

Priestley はその著書において、文字が 26 文字であること、母音が 5 つ、残りが子音であること（文字と発音が混在したままである）、などを簡単に述べており、独立した章立てでは扱っていない。Prosody（「韻律」）は独立した章立てではあるが、Buchanan の扱いと比べると、わずかなものに止まっている。

Lowth は Priestley に比べると 'Letters' と 'Syllables' の扱いが少しは多くなっているが、それでも Buchanan に比べるとずっと少ない。ただ、'Punctuation' の扱いは 'Letters' と 'Syllables' に比べると多くなっている。Priestley, Lowth ともに、'Orthography' や 'Prosody' よりも、狭義の文法の方により重きをおいている点が、Buchanan と異なっている。両者と Buchanan の英文法に対する考え方に違いがあることが読み取れるのではないだろうか。

Murray は Lowth や Priestley の文法書を参考にしているようであるが、英文法の領域としては 'Orthography'（「正書法」）、'Etymology'（「語形成」）、'Syntax'（「文構造」）、'Prosody'（「韻律」）の4部門を立てている。そして、両者と異なり、その取り扱いは、'Orthography' が全体の約 10%、'Prosody' が約 15%であり、その点

では Buchanan の文法に対する態度に近いと言える。このように各文法家が考える文法の範囲は、それぞれの著した文法書における「文法」の定義にもよく現れている。次に、 Buchanan, Priestley, Lowth, Murray の文法の定義を見てみよう。

5.5 Buchanan は文法の定義を次のように述べている。

> Grammar is the Art of expressing the Relations of Words in Constructing, with due Quantity in Speaking, and Orthography in Writing. (1753, p. 477)

> Grammar is the Art of expressing the Relations of Words in Construction, with due Quantity in Speaking, and Orthography in Writing. (1762, p. 1)

> Grammar is the Art of expressing true Orthography in Writing, just Quantity in Speaking, and the proper Relations of Words in Construction. (1767, p. 1)

1753 年と 1762 年の違いは、'Constructing' と 'Construction' の 1 語だけである。1762 年と 1767 年の違いは、構文中の 'the Relations of Words in Construction' (「語同士の関係」) を、構文中の 'the proper Relations of Words in Construction' (「語同士の適切な関係」) と改め、さらにその文言をあとに持ってきている点である。学習用の英文法書として、正しく書いたり、正しく話したりする技術ということをより際立たせるために、前著と表現形式を変更したのであろうか。

Priestley はここにあげるほかの文法家とは違う文法の定義を行っている。

> Language is a method of conveying our ideas to the minds of other persons; and the *grammar* of any language is a collection of observations on the structure of it, and a system of rules for the proper use of it. (1761, p. 1)

Priestley は普遍文法の立場に立っており、文法とは言語構造の観察の

総体であり、適切な使用のための規則体系であると述べている。この説明に続けて、次のように述べている。

> Any number of letters, which together give a distinct sound, make a *syllable*, and several syllable are generally used to compose a word. Having given this view of the constituent parts of the English language, I shall consider the Grammar of it under the following Heads. (1761, p. 2)

違った音を表す文字が集まって音節を成し、音節が集まって語を形成する。彼はここから文法の射程範囲を次のように考えるのである。つまり、 the inflections of words (語の屈折), the grammatical use and signification of certain words (具体的には、冠詞と助動詞の用法と意味), Syntax (統語法), Prosody (韻律), grammatical figures (文体的な「あや」) である。

Lowth の文法の定義は次の通りである。

> Grammar is the Art of rightly expressing our thought by Words. (1762, p. 1)

彼は文法を思想表現の技術と見なしているが、林 (1983, p. 8) によると、この Lowth の定義は、「話すこと」と「書くこと」とを総合した広範な立場から考察したものであるということになる。そして、上述の Buchanan の定義については、言語の「構造」を取り扱うという観点を示した定義であるとする。つまり、文の構造を表現する技術が文法であるということなのである。

Murray は文法を次のように定義している。

> English grammar is the art of speaking and writing the English language with propriety. (1795, p. 13)

英文法とは、英語を適切に話したり、書いたりする技術であるという。これは、上述した Lowth の定義中の 'our thought' を具体的に「話すこと」と「書くこと」として、学習者によりわかりやすく定義している。 Lowth の文法を改良することによって、広範な学習者に受け入れられた Murray

のこの定義が、規範文法における定義となったのである。この点ではBuchanan の文法の定義は定着しなかったわけであるが、林 (1983, p. 8) は Lowth や Murray のようなラテン文法の定義に基づいたものだけではなく、 Buchanan の定義する、話者と聴者との間の伝達、理解に着目した定義を高く評価している。

5.6 以上、Buchanan の文法書と、Priestley, Lowth, Murray のそれぞれの文法書を比較して、(1) 時制と法、 (2) 品詞分類、 (3) 文法の領域、(4) 文法の定義、に限って、Buchanan の独自性を試論的に明らかにした。時制と法では、 Buchanan は意味論的・機能論的観点に立っており、その点では Lowth と Murray と共通している。品詞分類では、Buchanan はラテン文法により近く、とくに形容詞や分詞の扱いが他の文法家と異なっている。文法の領域は Priestley や Lowth は文字や発音、韻律についての取り扱いが少ないのに対して、 Buchanan は文字から発音、韻律、語形成、文構造へとまんべんなく取り扱っている。そして、この態度は Murray の文法でも見られる。文法の定義では、 Lowth と Murray がラテン文法の定義に近く、 Priestley は規則の体系であるとし、Buchanan は文構造を表現する技術と考えている。1761 年から 62 年にかけて Priestley, Lowth, Buchanan がそれぞれの文法書を刊行した。そして、 Buchanan はその後、発音・綴り字辞典を編纂して、1767 年には 3 冊目となる文法書を著して、自分が考える文法の射程範囲をカバーする分野を、それぞれの著書で詳しく述べたのであった。それから約 30 年経ち、 Murray は請われて、それまでの文法家の文法書を参考にして、文法書を編纂したのであった。そこには Buchanan の名前こそ記されてはいないが、上述したことからもわかるように、参照したのではないだろうか。18 世紀末までに著されたさまざまな文法を集大成する形で Murray の文法書が編纂されたわけであり、そのような意味からすると、直接には言及されていなくとも、 Buchanan の文法、言い換えると、 Buchanan の思想がその中に生かされていたのではないかと考えられる。

結　論

本研究は、18 世紀中葉の実践文法家であり教育者であった James Buchanan の文法に焦点を絞り、20 世紀の「科学的」文法学者から不当な非難を受けてきたいわゆる「規範文法」がなぜ必要とされたのかを、当時の社会状況や文法の目的、その対象者などを考慮した社会言語学的な観点から明らかにした研究である。以下、考察の結果をまとめる。

第 1 章では、18 世紀のイギリスにおいて、いわゆる「規範文法」が成立するにいたる時代的背景を考察した。当時の社会の変化と社会階層の移動により、下流階層の上昇志向に伴う教育への高まりがあった。17 世紀後半以降、さまざまな形式の学校が現れ、基本的な読み書きなどを学ぶ必要性が高まり、自分たちの国語である英語を学ぶために英文法や修辞学などの新しい科目が教授されるようになった。元来低い地位にあった商人たちの上昇志向とともに私立学校の需要も増えていった。教育を必要とする新しい層が勃興したのである。また、貨幣経済を中心とする社会の変化とともに、書かれた文書が重要な意味を持ち、流動的な社会の中で各種の文書が大事な役割を果すようになった。すなわち、書かれた文書自体が自らの財産と安全を保証し、人間関係を維持していくうえで重要なものであるという認識が広がったのである。新聞や雑誌の出現によって読み物が増え、求人欄に目を通す人も現れ、識字率が高まっていくにつれて、辞書や文法書などの需要も必然的に高まることになったのである。その一方で、上流階層の知識人たちが望んだイギリス版アカデミーは、Jonathan Swift など文人たちが建議したにもかかわらず、 結局、国家レベルで設立されることはなかった。しかし、Samuel Johnson が 1755 年に *A Dictionary of the English Language* を編纂することにより、民間レベルでの解決となった。その後の辞書はこの Johnson の辞典を基にすることになった。文法書はそれから 40 年を経て、Lindley Murray が 1795 年に *English Grammar* を出版して、規範文法の完成を迎えることになる。18 世紀イギリスの時代的背景を考察することにより、規範文法の成立には、社会の

変化と教育を必要とする民間レベルでの辞書や文法書の需要の高まりがあったことを明らかにした。

第2章では、中世から18世紀の規範文法にいたる文法観の流れを考察した。イギリスにおける文法論に関する関心は、ラテン語の教授や学習から始まった。文法書は Donatus や Priscianus などの書が使用された。しかし、ノルマン人に征服された後は、学芸と学校教育は衰退の一歩をたどることになる。14 世紀後半以降、英語が口語として広く普及していくとともに、文書・証文などの書記言語としても確立し、イギリス議会の記録には英語が再び用いられた。ルネサンス期に入ると、イギリスの文献学の興隆に先駆的役割を果たすグループが現れた。 Lily がラテン文典を編み、それが広く利用されるようになり、のちの英文法家たちに多大な影響を与えることになった。フランス語は外国語として認識され、英語で書かれたフランス語文典や辞書などが著されるようになった。イギリスの人文主義者たちは、英語の特質を弁護し、英語を軽視し差別する人々に対して反論するようになる。ここにおいて、本格的な英語の研究が始まったのである。16 世紀末には、William Bullokar の綴字本や英文法書が著され、これから約 200 年の間に、有名・無名の文法家が現れ、さまざまな種類の英文法書を出版した。ラテン語教育から始まったイギリスの教育は、近代期に入って、英語そのものの見直しへとつながり、辞書や文法書の需要の高まりとともに、ラテン文法を基にしながら英語独自の規範文法を成立させるにいたったのである。その頂点として Murray の文法書が編纂されたのである。中世以来のラテン語教育、そして、16 世紀末以降の約 200 年にわたる英文法書の発展によって、18 世紀末に規範文法が成立するにいたったことが確認できた。

第3章では、18世紀中葉に活躍した文法家 James Buchanan 研究の意義とその著作について考察した。彼は Robert Lowth や Joseph Priestley と同時期の人物でありながら、二人ほど注目を集めていない。しかし Buchanan の著作を丹念に読み解くことにより、国語（英語）教育に対してどのように向き合っていたのかを以下のように明らかにすることができた。スコットランド生まれの彼は、当時イギリスの中心都市と

して発達しつつあったロンドンの英語を英語習得のための標準とみなし、また教育で優勢であったラテン語教育を英語教育から分離することを考えた。まず、1753年に *The Complete English Scholar* を刊行し、発音と綴り字、読本、文法を扱った。その後、発音と綴り字に関しては、1757年に *Linguae Britannicae Vera Pronunciatio: or a New English Dictionary* と *A New Pocket Book for Young Gentlemen and Ladies* を、1766年に *An Essay towards Establishing a Standard for an Elegant and Uniform Pronunciation of the English Language* を出版し、独自の表記法を取り入れて、自らの考えを発展させている。一方、文法は 1762年に *The British Grammar,* 1767年に *A Regular English Syntax* をそれぞれ著し、正誤問題などの工夫を凝らすことにより、文法面に対する彼の考えをさらに発展させている。1770 年にはそれまでの英語教育の集大成とも言える *A Plan of an English Grammar School Education* を公刊した。1753年での主張を基にして、その後の17年間の発音や綴り字、文法などを実践的に教授した経験からまとめたものである。当時一般的であったラテン文法の構成（発音、綴り字、文法）から出発した彼は、それに飽きたらず、綴り字・発音辞典の独立を意図し、また、文法書に正誤問題を付すなどして、実践的な語学習得を目指した。 Buchanan は当時の社会階層の変化や英語教育の必要性を肌で感じ取り、イングランド出身ではなく、スコットランド出身者としての経験から実践的な教育を行ない、さまざまな著作を世に問うことによって、イギリス人や外国人に対する英語教育はいかにあるべきかを考えた文法家であることを明らかにすることができた。

第4章では、Buchanan が世に送り出した3つの文法書を取り上げ、それぞれの初版と第2版、あるいは新版などの内容、形式に関する相違を詳細に論述した。彼はまず、1753年に *The Complete English Scholar* を出版し、自らの国語教育や文法に対する考えを公にした。綴り字や発音、文法についてはそれ以降に刊行する著書の基になる考えが述べられている。1762年に出版した *The British Grammar* は、本論が4つの章に分かれ、それぞれの章では 'Orthography'（「正書法」）, 'Prosody'（「韻律」）, 'Etymology'（「語形成」）, 'Syntax'（「文構造」）という4部門を詳しく解

説している。'Grammar' というものを広くとらえて、英語学習者にとって必要な項目を解説しているのである。これに対して 1767 年に出版された *A Regular English Syntax* は、その前年にさらに改良を重ねた発音・綴り字辞典をすでに編纂しており、'Orthography, Prosody' についてはその辞典に任せる形を取り、1762 年出版の *The British Grammar* よりもその部門の説明は簡略化し、'Etymology, Syntax' の部門の説明を増やし、とくに 'Syntax' を本論の中心に据えている。「文構造」に頁数を充分に割き、さらに総合的な練習問題の項目を設けて、文構造の分析を実践的に学べるようにしている。これらは学校での使用のみならず、独習者への配慮から行われたものであり、1753 年から 1767 年までの 14 年間に彼がいかに文法書を改良しようとしていたかを明らかにすることができた。1753 年の著書で、自らの国語（英語）教育に関する態度を表明した彼は、その後さらに 2 つの文法書を世に送り出すことにより、自分の考える国語（英語）教育に改良をほどこしながら、実践していったのである。3 つの英文法書を詳細に比較検討することにより、 Buchanan が英文法をどのように取り扱おうとしていたのか、また、その意図はどこにあったのかを明らかにし、スコットランド生まれの実践文法家、教育者である彼の国語教育、つまり英語教育や文法教育についての思想を浮かび上がらせることができたのではないかと考える。

最後に、 Buchanan と同時代の文法家である Priestley と Lowth の文法書、また、彼らから 30 年ほど後の Murray の文法書を、時制と法、品詞分類、文法の領域、そして、文法の定義に関して比較した。そこでわかったのは、(1) 時制と法では、 Buchanan は Lowth と Murray と共通している。(2) 品詞分類では、 Buchanan はラテン文法により近く、とくに形容詞や分詞の扱いが他の文法家と異なっている。(3) 文法の領域では、 Priestley や Lowth に対して、 Buchanan は文字から発音、韻律、語形成、文構造へとまんべんなく取り扱っており、これは Murray の文法でも見られる。(4) 文法の定義では、 Lowth と Murray がラテン文法の定義に近く、 Priestley は規則の体系であるとし、 Buchanan は文構造を表現する技術と考えていることである。1761 年から 62 年にかけて Priestley, Lowth, Buchanan がそれぞれの文法書を上梓し、それから約 30 年後に、 Murray はそれまでの文法家の文法書を参考にして、文

法書を編纂した。そこには Buchanan の名前こそ記されてはいないが、Murray は Buchanan の文法書も参照したのではないかと思われる。18世紀末までに公刊されたさまざまな文法を集大成する形で Murray が文法書を編纂したわけであり、そのような意味からすると、直接には言及されていなくとも、 Buchanan の文法、言い換えると、 Buchanan の思想がその中に生きているように考えられる。

Buchanan は、英語を正しく読み書きできることがイギリス国民や英語学習者にとって必要なことであると考え、個々の語を正しく綴り、正しく発音できるようにするために発音・綴り字辞典を編纂した。また、個々の語を統合して、正しい文を作り出すことができるようにするために3冊の英文法書を刊行した。このように著作が複数あるにもかかわらず、18 世紀のイギリスの文法家の研究において、 Buchanan は他の著名な文法家ほどにはこれまで取り上げられることが少なかった。しかし、 Alston (1974) などの書誌学的研究により、実際には彼の著した文法書や発音辞典はイギリス本国のみならず、アメリカにおいても繰り返し出版されたことがわかる。このような事実から、これまで研究が進んでいる Lowth や Priestley などの文法家と同様に、18 世紀中葉における重要な「規範」文法家の地位を占めていたのではないかと思われる。

20 世紀までは第一次資料にあたることが難しかったが、最近ではコンピューターの発達やインターネット情報等により、当時の資料に直接アクセスできるようになってきた。実践文法家であり教育者であった James Buchanan の研究をさらに進め、文法書だけではなく、綴り字・発音辞典なども詳細に比較検討を行うことにより、 Buchanan のみならず、18 世紀の文法家たちが何を目指して「規範文法」に取り組んでいたのか、さらなる解明を行うことができるのではないかと考える。

参考文献

第一次資料

Bailey, N. 1759. *The New Universal English Dictionary of Words, and of Arts and Sciences.* carefully corrected by James Buchanan. The Fourth Edition. London: Printed for James Rivington and James Fletcher. Eighteenth Century Collections Online (ECCO) Print Edition, 2011.

Brightland, John. 1711. *A Grammar of the English Tongue.* London: Printed for John Brightland, and Sold by Guy, Sare, Brown, Mount, Barnes, Sprint, Taylor, Straban, Goudge, Betteswowth, Clements. 英語文献翻刻シリーズ, 8. 南雲堂、1970.

Buchanan, James. 1753. *The Complete English Scholar.* London: Printed for A. Millar. ECCO Print Edition, 2011.

————. 1757. *Linguae Britannicae Vera Pronunciatio: or a New English Dictionary.* London: Printed for A. Millar. ECCO Print Edition, 2011.

————. 1757. *A New Pocket Book for Young Gentlemen and Ladies: or, A Spelling Dictionary of the English Language.* London: Printed for R. Boldwin. ECCO Print Edition. 2011.

————. 1762. *The British Grammar.* London: Printed for A. Millar. 英語文献翻刻シリーズ, 13. 南雲堂、1968. ECCO Print Edition, 2011.

————. 1766. *An Essay Toward Establishing a Standard for an Elegant and Uniform Pronunciation.* London: Printed for Edward and Charles Dilly. ECCO Print Edition, 2011.

————. 1767. *A Regular English Syntax.* London: Printed for J. Wren. ECCO Print Edition, 2011.

————. 1768. *The British Grammar.* Second Edition. London: Printed for A. Millar, and Sold by T. Cadell. ECCO Print Edition, 2011.

————. 1769. *A Regular English Syntax.* A New Edition. London: Printed for G. Keith, J. Johnson and J. Payne, G. Pearch, F. Blyth, and G. Burnett. ECCO Print Edition, 2011.

————. 1769. *A New English Dictionary.* A New Edition. London: Printed for G. Keith, J. Johnson and J. Payne, G. Pearch, F. Blyth, and G.

Burnett. ECCO Print Edition, 2011.
————. 1770. *A Plan of an English Grammar School Education.* London: Printed for E. and C. Dilly. ECCO Print Edition, 2011.
————. 1770. *A Plan of an English Grammar School Education.* Edinburgh: Printed for A. Kincaid and J. Bell. ECCO Print Edition, 2011.
————. 1773. *The First Six Books of Milton's Paradise Lost.* Edinburgh: Printed for A. Kincaid and W. Creech, and J. Balfour. ECCO Print Edition, 2011.
————. 1780. *A Regular English Syntax.* From the London Edition. Philadelphia: Printed by Styner and Cist. ECCO Print Edition, 2011.
————. 1784. *The British Grammar.* Boston: Printed by Nathaniel Coverly for John Norman, and Sold at his Shop. ECCO Print Edition, 2011.
Bullokar, William. 1580. *Bullokars Booke at Large.* London: Henrie Denham. 英語文献翻刻シリーズ, 1. 南雲堂、1971.
Butler, Charles. 1634. *The English Grammar.* Oxford: Printed by William Turner, for the Author. 英語文献翻刻シリーズ, 4. 南雲堂、1967.
Cooper, Christopher. 1685. *Grammatica Linguae Anglicanae.* Londini: Typis J. Richardson, Impensis Benj. Tooke, apud signum Navis. 英語文献翻刻シリーズ, 4. 南雲堂、1967.
————. 1678. *English Teacher.* edited by Bertil Sundby. Lund: C. W. K. Gleerup.
Coote, Charles. 1788. *Elements of the Grammar of the English Language.* London: Printed for the Author; and Sold by C. Dilly. 英語文献翻刻シリーズ, 16. 南雲堂、1970.
Coote, Edmond. 1596. *The English Schoole-Maister.* London: Printed by the Widow Orwin, for Ralph Jackson and Robert Dexter. 英語文献翻刻シリーズ, 1. 南雲堂、1971.
Dilworth, Thomas. 1740. 1751[13]. *A New Guide to the English Tongue.* London: Printed and Sold by Henry Kent. 英語文献翻刻シリーズ, 9. 南雲堂、1968.
Dyche, Thomas. 1707. *A Guide to the English Tongue.* London: Printed for Catherine and Richard Ware. 英語文献翻刻シリーズ, 8. 南雲堂、1970.
Gil. Alexandro. 1621. *Logonomia Anglica.* Londini: Excudit Iohannes Beale. 英語文献翻刻シリーズ, 2. 南雲堂、1970.
Gr. P. 1594. *Grammatica Anglicana.* Extanct Londini ad insigne Solis in

Cœmiterio D. Pauli. 英語文献翻刻シリーズ, 1. 南雲堂、1971.
Greenwood, James. 1711. 1722[2]. *An Essay Towards a Practical English Grammar.* London: Printed for John Clark. 英語文献翻刻シリーズ, 10. 南雲堂、1970.
Hume, Alexander. 1865. *Of the Orthographie and Congruitie of the Britan Tongue.* 英語文献翻刻シリーズ, 3. 南雲堂、1968.
Johnson, Ben. 1640. *The English Grammar.* London: Richard Bishop, sold by Andrew Crooke. 英語文献翻刻シリーズ, 3、南雲堂. 1968.
Johnson, Samuel. 1755. 'A Grammar of the English Tongue.' *A Dictionary of the English Language.* London: W. Strahan for J. & P. Knapton, T. & T. Longman [et al.]. 英語文献翻刻シリーズ, 10. 南雲堂、1970.
Lane, A. 1700. *A Key to the Art of Letters.* London: Printed for A. and J. Churchil, and J. Wild. 英語文献翻刻シリーズ, 8. 南雲堂、1970.
Lowth, Robert. 1762. *A Short Introduction to English Grammar.* London: J. Hughs for A. Millar, and R. & J. Dodsley. A New Edition. Dublin: Printed for James Williams. 1769. 英語文献翻刻シリーズ, 13. 南雲堂、1968.
Mason, George. 1622. *Grammaire Angloise.* Londres: Chez Nat. Butter. 英語文献翻刻シリーズ, 2. 南雲堂、1970.
Maittaire, Michael. 1712. *The English Grammar.* London: Printed by W. B. for H. Clements. 英語文献翻刻シリーズ, 9. 南雲堂、1968.
Murray, Lindley. 1795. *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners.* York: Wilson Spence and Mawman. The Fifteenth Edition. York: Printed by T. Wilson and R. Spence, High-Ousegate, for Longman, Hurst, Rees, and Orme; Darton and Harvey, London; for Wilson and Spence, York; and for Constable and Co. Edinburgh. 1806[15]. 英語文献翻刻シリーズ, 19. 南雲堂、1971. (本書には、慶応2年 (1866年) か慶応3年 (1867年) に刊行されたと推定される「モルレイ氏著／英吉利小文典／渡部氏蔵版」も収録されている。)
Priestley, Joseph. 1769. *The Rudiments of English Grammar.* London: R. Griffiths, 1761. A New Edition. London: Printed for Becket and P. A. De Hondt, and Johnson and Payne. 英語文献翻刻シリーズ, 14. 南雲堂、1971.
————. 1762. *A Course of Lectures on the Theory of Language, and Universal Grammar.* Warrington: Printed by W. Eyres. 英語文献翻刻シリーズ, 14. 南雲堂、1971.
Sheridan, Thomas. 1783. *A Rhetorical Grammar of the English Language.* Philadelphia: Printed and Sold by Robert Bell, and Francis Bailey. 英語文

献翻刻シリーズ, 15. 南雲堂、1969.
Swift, Jonathan. 1712. *A Proposal for Correcting, Improving and Ascertaining the English Tongue: In a Letter to the Most Honourable Robert Earl of Oxford and Mortimer, Lord High-Treasurer of Great-Britain.* 英語文献翻刻シリーズ, 11. 南雲堂、1967.
Wallis, John. 1765[6]. *Grammatica Linguae Anglicanae.* Oxoniœ: exc. Leon. Lichfield, veneunt apud Tho. Robinson, 1653. Londini: Excvdebat Gvil. Bowyer. Prostant Apid A. Millar. 英語文献翻刻シリーズ, 3. 南雲堂、1968.
Ward, William. 1767. *A Grammar of the English Language in Two Treatises.* York: Printed by A. Ward, for C. Etherington. 英語文献翻刻シリーズ, 15. 南雲堂、1969.

第二次資料

Alston, R. C. 1974. *A Bibliography of the English Language from the Invention of Printing to the Year 1800: A Systematic Record of Writings on English, and on Other Languages in English, Based on the Collections of the Principal Libraries of the World.* A Corrected Reprint of Volumes I – X. Reproduced from the Author's Annotated Copy with Corrections and Additions to 1973. Including Cumulative Indices. Ilkley: Janus Press.
Anon. 1767. "*A Regular English Syntax*", in *The Critical Review: or, Annals of Literature*, Vol. 23, ed. A Society of Gentlemen (London: Printed for A. Hamilton), pp. 454–56.
Beal, Joan C. 2004. *English in Modern Times.* London: Arnold.
Beal, Joan C., J. Hodson, R. Steadman-Jones and C. Percy. 2006. "New Approaches to the Study of Late Modern English", in *Historiographia Linguistica*, Vol. XXXIII: 1/2, ed. E. F. K. Koerner (Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins Publishing Company), pp. 1–9.
Cobbett, William. 1830. *Advice to young men and (incidentally) to young women : in the middle and higher ranks of life in a series of letters addressed to a youth, a bachelor, a lover, a husband, a father, a citizen, or a subject.* London: Knopf. (庄司淺水訳 『若き人々への提言』 東京書籍、1990)
Crowley, Tony. 1991. *Proper English? Readings in Language, History and Cultural Identity.* London: Routledge.

Dobson, E. J. 1957. *English Pronunciation 1500–1700.* 2 vols. Oxford: Clarendon Press.

Emsley, Bert. 1933. "James Buchanan and the Eighteenth Century Regulation of English Usage", in *PMLA* 48, pp. 1154–66.

Funke, O., ed. 1938. *Grammatica Anglicana von P. Gr. (1594).* Wiener Beiträge zur englischen Philologie, LX Band. Wien & Leipzig: W. Braumüller.

Gneuss, Helmut. 1996. *English Language Scholarship: A Survey and Bibliography from the Beginnings to the End of the Nineteenth Century.* New York: Binghamton. (大泉昭夫訳 『英語学史を学ぶ人のために』 世界思想社、2003.)

Jespersen, Otto. 1933. *Essentials of English Grammar.* London: George Allen & Unwin Ltd. (中島文雄訳 『英文法エッセンシャルズ』 千城、1963)

Jones, Charles. 1989. *A History of English Phonology.* London and New York: Longman.

Kennedy, A. G. 1926. "Authorship of the British Grammar", in *Modern Language Notes* (Baltimore: Johns Hopkins University Press) 41. pp. 388–91.

————. 1927. *A Bibliography of Writings on the English Language: From the Beginning of Printing to the end of 1922.* New York: Hafner Publishing Co. Reprinted by Arrangement. 1961.

McKnight, G. H. 1968. *The Evolution of the English Language –from Chaucer to the Twentieth Century.* New York: Dover Publications. [This edition is reprinted from the original edition of 1928, which was entitled *Modern English in the Making.* New York: Appleton.]

Michael, Ian. 1970. *English Grammatical Categories: And the Tradition to 1800.* Cambridge: Cambridge University Press.

OED = *The Oxford English Dictionary*, ed. James A. H. Murray, et al. Oxford: Clarendon Press, 1933, 1989^2.

Palmer, F. R. 1979. *Modality and the English Modals.* London & New York: Longman.

————. 1986, 2001^2. *Mood and Modality.* Cambridge: Cambridge University Press.

Picard, Liza. 2000. *Dr. Johnson's London.* London: Weidenfield & Nicolson. (田代泰子訳 『18世紀ロンドンの私生活』 東京書籍、2002.)

Poldauf, Ivan. 1948. *On the History of Some Problems of English Grammar Before 1800.* Praze: Nákladem Filosofické Fakulty University Karlovy.

Porter, Roy. 1982. *English Society in the Eighteenth Century.* London: Penguin. (目羅公和訳『イングランド 18 世紀の社会』 (叢書・ウニベルシタス 529) 法政大学出版局、1996.)

Reader, W. J. 1964. *Life in Victorian England.* London: B. T. Batsford. (小林司ほか訳 『英国生活物語』 晶文社、1983.)

Robins, R. H. 1967. 1990[3]. *A Short History of Linguistics.* London: Longman. (中村 完・後藤 斉訳『言語学史 (第三版)』 研究社、1992.)

Schwartz, Richard B. 1983. *Daily Life in Johnson's London.* Madison, WI.: University of Wisconsin Press. (玉井東助ほか訳 『十八世紀 ロンドンの日常生活』 研究社、1990.)

Smollett, T. G. 1748. *The Adventures of Roderick Random.* Project Gutenberg Etext. 2003. (伊藤弘之ほか訳 『ロデリック・ランダムの冒険』 荒竹出版、1999.)

Sonnenschein, E. A. 1929. *The Soul of Grammar.* Cambridge: Cambridge University Press.

Sweet, Henry. 1891–98. *A New English Grammar: Logical and Historical.* 2 vols. Oxford: Clarendon Press.

Tieken-Boon van Ostade. 2002. "You Was and Eighteenth-Century Normative Grammar", in *Of Dyuersite & Chaunge of Langage: Essays Presented to Manfred Goerlach on the Occasion of his 65th Birthday,* eds. Katja Lenz and Ruth Moehlig, Heidelberg: C. Winter Universitaetsverlag, pp. 88–102.

————. 2006[a]. "Eighteenth-century Prescriptivism and the Norm of Correctness", in *The Handbook of the History of English,* eds. Ans van Kemenade and Bettelou Los (Malden, Mass.: Blackwell), pp. 539–57.

————. 2006[b]. "English at the Onset of the Normative Tradition", in *The Oxford History of English* ed. Lynda Mugglestone (Oxford: Oxford University Press), pp. 240–73.

————, ed. 2008. *Grammars, Grammarians and Grammar-Writing in Eighteenth-Century England.* Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

————. 2010. "Zero Tolerance of Prescriptivism?", in *English Today 102*, Vol. 26, No. 2, eds. D. Graddol and R. Mesthrie (Cambridge: Cambridge University Press), p. 2

————. 2009. *An Introduction to Late Modern English.* Edinburgh: Edinburgh University Press.

————. 2012. "Robert Lowth as a Codifier of the English Language –An introduction", in *Historiographia Linguistica* ed. E. F. K. Koerner (Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins Publishing Company), pp. 1–8.

Vorlat, Emma. 1975. *The Development of English Grammatical Theory 1586–1737: With Special Reference to the Theory of Part of Speech.* Leuven: Leuven University Press.

Wells, W. H. 1841. "James Buchanan. 1767", in *The Common School Journal: For the Year 1841,* Vol. III, ed. Horace Mann (Boston: Marsh, Capen, Lyon, and Webb), p. 231.

市河三喜 (編). 1940. 53. 『研究社英語学辞典』 研究社.

宇賀治正朋. 1971. 「Lindley Murray: English Grammar の解説」 (英語文献翻刻シリーズ, 19)、南雲堂、pp. 391–411.

————. 1971. 「モルレイ氏著 英吉利小文典の解説」 (英語文献翻刻シリーズ, 19)、南雲堂、pp. 412–19.

————. 2012. 『英文法史』 私家版.

————(編). 2010. 『文法 I』 (英語学文献解題, 4) 研究社.

大塚高信. 1971. 「William Bullokar: Booke at-large, Bref Grammar for English の解説」(英語文献翻刻シリーズ, 1)、南雲堂、pp. 335–48.

大塚高信・中島文雄 (編). 1982. 『新英語学辞典』 研究社.

興津達朗. 1976. 『言語学史』 (英語学大系, 14) 大修館書店.

日下部徳次. 1968. 「Alexander Hume: Of the Orthographie and Congruitie of the Britan Tongue の解説」(英語文献翻刻シリーズ, 7)、南雲堂、pp. 337–48.

佐々木 達. 1941. 『英語学研究史』 (研究社英米文学語学講座) 研究社.

————. 1950. 『語学試論集』 研究社.

————. 1966. 『言語の諸相』 三省堂.

佐々木 達・木原研三 (編). 1995. 『英語学人名辞典』 研究社.

朱牟田夏雄（編）. 1971. 『十八世紀イギリス研究』 研究社.
末松信子. 2004. 『ジェイン・オースティンの英語 — その歴史・社会言語学的研究』 開文社出版.
田口　純. 2007. 「1700 年前後の文法家の英文法観について (1)」 『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第 2 号、pp. 81–90.
————. 2008. 「18 世紀の規範文法家 James Buchanan」 田島松二・末松信子編 『英語史研究ノート』 開文社出版、pp. 241–45.
————. 2011. 「18 世紀の文法家 James Buchanan の 2 つの文法書について」 *The Kyushu Review*, 第 13 号（「九州レヴュー」の会)、pp. 59–74.
————. 2012. 「英国における「規範」文法隆盛への時代的背景」 *The Kyushu Review*, 第 14 号（「九州レヴュー」の会)、pp. 59–67.
田口仁久. 1975. 『イギリス学校教育史』 学芸図書.
田島松二（責任編集). 1998. 『わが国における英語学研究文献書誌』 南雲堂.
————. 2001. 『わが国の英語学 100 年 — 回顧と展望』 南雲堂.
————. 2005. 「18 世紀英語研究の現在を概観する」 『英語青年』 第 151 巻第 1 号、研究社、pp. 17–19.
田中　浩ほか. 1968. 『ロック　人と思想 13』 清水書院.
林　哲郎. 1968. 『英語辞書発達史』 開文社出版.
————. 1978. 『英語学史論考』 こびあん書房.
————. 1983. 『英語学素描』 九州大学出版会.
————. 1990. 『英語学史研究への道』 開文社出版.
林　哲郎・安藤貞雄. 1988. 『英語学の歴史』（英語学入門講座, 3） 英潮社新社.
広瀬泰三. 1968. 「James Buchanan: The British Grammar の解説」（英語文献翻刻シリーズ, 13)、南雲堂、pp. 379–89.
前島儀一郎. 1969. 「William Ward: A Grammar of the English Language in Two Treatises の解説」（英語文献翻刻シリーズ, 15)、南雲堂、pp. 445–58.
松塚俊三. 2001. 『歴史のなかの教師 — 近代イギリスの国家と民衆文化』 山川出版社.
松浪　有・池上嘉彦・今井邦彦（編). 1983. 『大修館英語学事典』 大修館書店.
横尾壮英（編). 1978. 『西洋教育史』（講座現代教育学, 3） 福村出版.
渡部昇一　1975. 『英語学史』（英語学大系, 13） 大修館書店.
————. 2003. 『英文法を知ってますか』（文春新書 344） 文藝春秋.

ウェブリンク

'The codifiers and the English language: Tracing the norms of Standard English'.
http://www.hum.leiden.edu/lucl/codifiers (2011 年 12 月確認.)
'The Codifiers and the English Language'
http://codifiers.weblog.leidenuniv.nl (2012 年 10 月確認.)
HSL/ SHL: Historical Sociolinguistics and Sociohistorical Linguistics
http://www.hum2.leidenuniv.nl/hsl_shl/ (2012 年 10 月確認.)
'Eighteenth Century Collections Online (ECCO)'.
http://gdc.gale.com/products/eighteenth-century-collections-online/ (2012 年 10 月確認.)
'Eighteenth-Century English Grammars database (ECEG)'
http://www.helsinki.fi/varieng/CoRD/corpora/ECEG/ (2012 年 10 月確認.)